

織斑一夏は逃げられない
い

ニジヨー条

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑一夏になってしまった隠れオタクの男の物語り。姉の親友に教えを乞うた為ISに関わってしまう破目に。知識は十分。周りは癖の強い女性達と厄介事を押し付け合う友人。関わっていくのは忌避していた筈のIS。退学すればモルモットか命を狙われる。卒業しても同様。

一夏「一体どうしろと?！」

作者はIS原作未読です。知識は二次小説とwiki便りで、ノリと勢いと書いたので間違ってる部分があるかもしれません。その際はどしどし指摘して下さい。あと、筆記スピードは遅いです。

1
2
/
1
2

タグ
ー
つ
追
加

目次

逃げられた頃の俺 | 1

ドラクエ式進路選択。一夏「……せ、選択

？」 | 14

帰宅。俺の不幸はこれからだッ！

27

入学。視線つて重圧になると知った日

46

決闘は避けられない | 63

真昼の出会い | 79

放課後の出会い | 95

戦いに向けて | 111

戦いに向けて2 | 130

亮斗 vs セシリア (上) | 149

亮斗 vs セシリア (下) | 163

一夏 vs セシリア | 182

束の間の男女 | 209

一夏 vs 亮斗 | 229

彼女が選んだ道 | 244

クラスの代表 | 262

風来 | 271

——これ、もつてろ

——これ、いちかの

渡したのは「今」の両親に貰った、オリオン座が刻まれた青のブレスレットだ。見た目がかッコイイので、俺のお気に入りだったのだ。

——それ、かえつてきたらかえせよ？そしたらさ、

——そしたら……？

——いっばい、■■■がみてきたこと、はなしてくれよな！

——………うん

ようやく納得した■■■は、そのブレスレットを首から下げ、犬の尻尾の様に小さいポニーテールを揺らして部屋の外に行く。

(「や、ろ)

引き留めなくちゃ、——そう思っても、声は出ず、体の感覚さえない。——当た

り前だ、だってコレは、

——いつてきます！

——おう、いつてらっしやい！

そういつて、妹は出て行った。

(やめ、ろ………っ)

だが……、

(やめろ……ッ)

帰って来たのは半分に割れたブレスレットだけだった。

——過去の出来事なのだから



「やめッ——!」

「うおッ?!」

「チッ、あと少しだったのに」

「いや、一夏からしたら、起きてれて良かったんじゃないか?」

声を上げながら体を起こすと、視界に映ったのは部屋を出て行く妹では無く、中学を共に過ごした友人達だった。

(ああ……、明日が入試試験だから、ラストの追いこみ勉強をしてたんだった)

一人だけ驚きの声を上げた奴は『ごたん五反田だん弾』。お前ありえないだろというレベルの

赤い髪が特徴だ。

一人は短髪の黒髪で、十分イケメンと呼ばれる容姿を持つている『御手洗^{みたらい} 数馬^{かずま}』。普段は女の取り巻きが3人居る。

最後の一人は、舌打ちし、手に水性ペンを持つ男『木場^{きば} 亮斗^{りょうと}』。コイツはツツコミ所満載で、名前を見れば日本人なのだが、容姿は外側にはね返った金髪のセミショートに青い瞳、白人特有の白い肌。言うだけなら女性と見間違えそうだが、意外にちゃんと男として見られる、と言う。もうお前二次元の住人だろ!?!と言わんばかりのあり得ない奴だ。コイツとは小学校に上がった頃からの付き合いで、一緒に剣道場に通っていた仲だ。ついでに言うところコイツも転生者だ。言動と行動で分かった。

そして、俺の名前が『織斑^{おりむらいちか}一夏』。転生者だ。

ある日の大学から帰り道で、ガードレールごと潰され、気付いたら4歳くらいの子になっていた。憑依じゃないのかとも思ったが、数日経ってから振り返ってみると、微かにだが、生まれ初めて抱きしめられた事や、父親に高く持ち上げられた事などを思い出すので転生だと判断した。

まあ、ぶつちやけどつちでも良いんだけどね。だってどつちにしたって生まれたての赤ん坊から人生始めたのは確かだし、『俺』が『織斑一夏』である事は変え様のない事実なんだから。

ただ、何故だか知らないが、3〜4歳辺りの記憶が酷く曖昧で、大部分の事を思い出せなかったのだ。

だがそんな事を考えている余裕はなく。織斑一夏として、姉——織斑千冬と二人で四苦八苦しながら生き。姉の人生初の友だちが天才を通り越し、大天才だと言う事が分かり、才ある者同士は惹かれあうのだと察し。この世界には前世に存在した企業や会社（主にゲーム関係）やアニメが無いと悟り愕然とし。件の大天才——篠ノ之束にプログラミングを教えて貰いながら彼女の趣味を手伝ったり、某同人弾幕ゲームを製作してネットで売って生活資金の足しにしながら数年経った時、

——世界が一変した。

その原因は、前述した姉の友人『篠ノ之束』しののの たばね。別名『天災兎』『対人コミュニケーションズスキルゼロ兎』『子供以下の対人認識女』『N.O. 1おっぱい』『テロ兎』『年考えろよ兎』と呼ばれる（殆ど俺しか言わないが）女だ。

と言うのも2年ほど前に、彼女はその鬼才な頭脳で宇宙空間でも活動可能なマルチフォームスーツ『インフイニット・ストラトス』、通称『IS』の基礎理論を構築し、発表したのだ。

しかし世界はIS理論を一蹴した。何故なら、そのISの搭乗資格を持てるのが女性だけだったからだ。凄いのは認めるが、女性だけにしか動かせないというのは欠陥だ、

と。

向こうも正論を述べているが、そんな事で、自分中心で考える篠ノ之東には理解できなかつた。

——だから彼女は考えた。

“なら、世界を自分中心で動く世界にしよう”、と。

そして僅か2年で実証機を造り、証明した。

やり方は天災の名に相応しく、ド派手で豪快で非常に分かり易かつた。

まずISの持つ量子理論を用いて作ったPCでもって、世界中の軍事基地をハッキングし掌握。

その後、約2400発以上のミサイルを日本の首都へ向けて発射。

各国の軍隊が撃ち落とすきれず、そのまま首都に向かってしまった半数以上（つまりは1200発以上）のミサイルを、IS実証機『白騎士』一機で迎撃。

その後、その性能を証明した『白騎士』を、捕獲または撃墜しようと送り込まれた即席連合艦隊の大半を無力化し、追跡を振り切つて雲隠れ。

死者も0と言うその実証に世界は注目した。圧倒的な性能、既存のどの兵器よりも強力で、縦横無尽な飛行性能。

世界は手の平をひっくり返してISに喰いつき、世界は一気にIS一色になり、世論

も I S を使える女性優遇の社会になった。結構傲慢な女性も居るが、それでも全体の 2、3 割程度だがまともな人格の女性はいる。その点を考慮してみると、女性の地位が上がった以外、前の世界と特に代わり映えない世界だということだ。

……いや、こつちの方が技術面では上だな。

なんせ、至る所に空間パネルの看板や商標を見る事があるのだ。近未来である。ドラえもんである。こつちでもやってた。

とまあ色々語ったが、俺たち中学生——特に I S 適性のない男子は普通に高校に行くか中卒で就職の二択なので、現在懸命に勉強中と言う訳だ。俺は別に成績低い訳じゃないが、時には復習するのも良い勉強になるで彼等の試験勉強に付き合っている。

「わりい寝てた」

「気にすんな。俺達も頭使い過ぎたから、一休みしてたしな」

「うん、それに一夏は結構ハードな日々送ってるからね。疲れるのも仕方ないと思うよ」
弾と数馬がそう言ってくる。

俺の一日を簡単に話すと、

まず朝早く——大体 2 時半時に起床し、新聞配達のバイト。これは早朝のみで、学校側にも家庭事情として認可して貰っている。キツイが体力を付けられ、尚且つ給料も出ると一石二鳥だ。

7時近くに家に帰り、軽く汗を流し朝飯の準備。米は自炊機だし、おかずは基本大量に作って作り置き+昨夜の残りで手軽に一品+味噌汁+漬物といった具合なので、大した手間じゃない。弁当のおかずにもなるし。姉さんは仕事柄たまにしか家に帰ってこないなので、だいたいこんな感じだ。

俺も姉さん（隠している様だが、IS学園で教師である事は調べてある）も、別にお金に困ってる訳じゃない。姉さんは職に付いてるし、俺はネットでアプリゲーム『刀砲 Project』（ぶつちやけ東○Projectのパクリ）の販売と、早朝の新聞配達でそこそこ儲かっているからだ。ちなみにこの「刀砲」、結構売れている。

ちなみに一作目の内容は、IS界最強のブリュンヒルデこと「博麗^{はくれい}千^{せん}」が幻想世界という妖怪と人が共存する世界に迷い込み、たまたま暴れまわっていた魔法使い一家と戦う、という設定だ。二作目からは相方がおり、ソイツの名前は「タバ姉さん」。千が接近戦主体で、「タバ姉さん」は遠距離主体のプレイヤーキャラだ。ちなみにまだ2D画面。制作側が俺しかいないので、作るのも一苦労だ。亮斗？アイツはテストプレイヤーだ。

——また話しがズレたので戻そう。

平日なら学校があるし、土日祝日はきちんと休みを取っているのだから、体を壊す事は無い。そもそも今の肉体自体、潜在能力というかポテンシャルが高いから、しつかりと

マッサージや休息を取れば問題ないのだ。

放課後は食材の買い物か、ソレがなかったら夕食の支度の時間まで弾達と駄弁ったり、出された課題をしたり、家に帰り『刀砲』のグラフィック制作やプログラムを組んだりして過している。

そして夜。就寝時間は10時と決めているので、その間に好きな事をしている。此処最近はや験勉強がメインだが、それでも風呂呂に入る前に数十分ほど竹刀を振っている。偶に姉さんが相手になってくれる時があるので、対人戦の勘が鈍らないので有難い事だ。

そして風呂に入り、姉さんが居る時は、最後に姉さんの晩酌のお供を軽く作って寝床に入る。

学生としては結構多忙な方だが、それでもまあ結構充実した日々多くっている。そして、出来る事ならこのまま何気ない日々を過ごしたいと思っている。

目下最大の重大ポイントと言えば、

「——どうか、天災が変な動きをしませんように」

波乱万丈な人生なんていらぬ。平穩な人生を歩みたいのだ。

「無駄な気がするがな」

「黙ってる亮斗」

あと、ナチュラルに心を読むな！

「落ちたらウチで雇ってやるよ」

「うっせえ！ 不吉な事言うな!! それに、そんなことしたらブラコンの蘭に殺されるだろうが、——俺が!!」

「どっちかって言うのと、料理人としてのライバル関係っぽいかな」

そうだとしても、あの子は俺を殺意の目で見て来る。——その理由が、お兄が良く話す話題が俺たち中心の話で、その中で俺が一番料理が上手いからだそうだ。

……俺、ホモじゃねえから!!

「僕としては受かって欲しいな。藍越って遠いから疎遠になるし——主に僕の精神的安穩の為に」

「友達甲斐の無いヤツだなオイ！」

俺はただ、恋する女性に男性視点からのアドバイスをしてやっただけなのに。

「ソレが有難迷惑だよっ！お陰で段々と外堀も埋められて来てるんだからね?! 仕返ししようとしても、一夏は女性関係に関しては整理してあるし！」

そりゃあ、俺、小説とかに出てくる鈍感系主人公じゃねえし。

外見から言えばイケメンに分類されるから、告白された事もある——が、その大半が一目惚れして遠目から眺め、イベントがあるごとにラブレターで呼び出され告白、と言

う流れだ。ある意味、初対面で告白される様なものだ。付き合える訳が無い。

親しくなつてから告られた事もあるが、その8割近くが、『織斑千冬が姉』と言う理由だ。口には出して無かったが、姉さんを見た後で、えらく積極的に迫つてきたから一目瞭然だ。

そんな理由で、女性と付き合つた事は「殆ど」無い。あつても俺の日常に合わせられなくて別れたり、実はオタク系だつたのを知つて別れたり等々。

「ハア……勉強する気分じゃ無くなつたな。……帰るか」

帰つて明日の準備と、夕食の支度と、……あ、そう言えば姉さんが飲むビールが無くなつてきたな。ならついでに数日分の食材を買つとくか。

「だな。要は半分以上点取れば良い訳だから、満点取る必要ないし」

俺の言葉に亮斗が同意し、道具を片付け始める。

そう言えば、コイツもモテそうなのにそう言つた噂とか話を聞かないな……やつぱり箒の事が気になつてるのか……？

「俺も帰るか。そろそろ蘭から『帰つて、こないの……？』つてメール来そうだし。……知つてるか？アレ、文面だけなのにヤンデレの口調で言われてる気がすんだぜ？」

そりゃ俺が教えたし。言うて殴つて来そうだから言わないけど。

「僕の平穩も終わりか。何故か男同士で遊びに行く時だけ、あの子たち付いて来ないか

ら気を使わなくて済むし」

それも俺の恋愛指導の賜物だ。以前「数馬は男も惚れる程良い男だが、衆道の毛はな
いから安心しろ」「偶には一人にさせてたり、同姓との時間をあげる事も重要」「年がら
年中一緒だと、一緒に居るのが当たり前になつて、意識されなくなる」と指導したのだ。
こつちは感謝されそうだけど、男に泣き付かれる趣味は無いので話さない。

「ハア〜」

溜息が重なった。

「お互い、苦労するな」

「お前ほどじゃないがな」

「同感。つーかテメエが大半の原因なんだが」

「この元凶めッ！」

「テメエらのシワ寄せを倍返ししたただだよ!!」

「最悪だ、お前!!」

失礼な奴らめ、と思つたが、コイツらが居たお陰で楽しい学園生活を送れた事は、凄
く感謝している。だからこそ、これからも平穏な生活をしていきたいと、切に願つた。

終わりが近い、と、心の片隅で少なからず感じていたとしても。

ドラクエ式進路選択。一夏「……せ、選択？」

——2月某日・受験日

俺が受ける私立藍越学園は、学費が安く高い就職率をキープしている。試験日も2月の中盤なので、第一希望に落ちた者や最後の頼みと言わんばかりに受ける者も居るので、毎年多くの受験生が志望する。質より量で学費の低さを補う為、それなりの定員設定（一クラス40人前後で8クラス、つまりは300人以上）なのに、ソレを越える志望が届くのだ。そして、俺と亮斗が受験する学校でもある。

——そんな中、俺は今人生の選択肢を選ばされていた。

場所は、藍越学園の試験会場——の隣で同じ日に開かれている、特殊国立高等学校I S学園最終試験会場。その一室の広い大ホールだ。

その中心に一つの『兵器』が置いてある。青白い光を放つ台座『シールドエネルギー補給装置』の上に、二メートル近い全高を持った、武士鎧をイメージしたメタリックグレイの兵器。純国産のI S『打鉄』だ。

ソレが、『誰か』を待つかのように鎮座している。

「ハア……」

思わずため息が漏れる。

そもその予兆として、朝からおかしい事の連発だった。

昨日はしっかりと寝たし、朝刊配達は休ませて貰ったし、朝飯はしっかりと食べた。目は覚めてたし、頭もしっかりとしていた。そしていざ出陣、と気合を入れドアを出た瞬間——耳鳴りがしたのだ。

それ以降、此処に来るまで何度も耳鳴りがし、試験会場に着く頃には頭がボーっとし、試験の間も頭痛に悩まされながらもやり遂げたのを覚えている。その後、まるで夢遊病患者の如くフラフラと通路を歩き——ふと我に気付いた時、打鉄に触れそうな瞬間だったので、慌てて手を引つ込め、——そして今に至る。



打鉄を前に立ち早数分、いや、もしかしたらもう10分以上は経ったかもしれない。

もうすぐ面接試験が始まろうとしている。今すぐに引き返さなければ、時間的に間に合わないのだが、様々の想いが入り混じりずっと打鉄を見続けていた。

だが漸くある事に思い至り、携帯を取り出し無記名の番号をコール。

『はろはろ☆たつばねさんだよ☆ 私に何か用かなー、いつくん?』

ワンコールもせずに相手は出た。

「——お久しぶりです、束さん」

篠ノ之東。ISの生みの親にして、3年ほど前から行方知れずの世界的重要人物。現在に置いて、世界各国——それこそ軍・企業・研究施設に関わらず、裏からも行方を探られている大天才※科学者その人だ。

……その割に、偶にウチで呑気にメシ食ってるけどな。

この前来た時は、娘みたいな子！と言われてクロエを紹介された時は、姉さん共々この世界が終わる様な顔をした覚えがある。

まあ今はそんな事関係ないので放置。

「『コレ』、東さんの差し金ですか」

『ナンノコトカナ？』 って、もはや疑問形じゃなくて確信で言ってるよね、いっくん』朝からの耳鳴り。誰一人として来ない大ホール。そしてご都合主義の如く一体だけ置いてある打鉄。——もしかしたら藍越とISが一緒の試験会場という事さえも、篠ノ之東の謀はかりごとの気がする。だってIS関係は全て国家レベルのセキュリティなのだ。しかも試験内容は筆記の他に、ISを用いた模擬戦もある。それを私立高校と同じ試験会場など、ハッキリ言って正気の沙汰じゃない。

「そもそも、男の俺にISが起動するんですか？」

昔、東さんの手伝いの関係で触った事があるが、コアを触っても起動しなかった覚えがある。

『問題ナシナシ！ 私を誰だと思ってるのさ！ じっくりと後、箒ちゃんが好意を寄せ
てる憎つきウザったい子……………りよっちゃんだ！ じっくりとりよっちゃん
のパーソナルデータをネットワーク内に入れといたから、問題なく動かせるよ！』

「(亮斗……………アイツもか)……………ん？あれ、と言う事は」
携帯を離し、耳を澄ます。

と、ドアの向こうから慌ただしい声が響き、

——大変よ！い、いま男の子がISを——

——なッ！それは——

——企業関係者は——

——パルパルパル——

大騒ぎだった。と言うか最後の奴、お前絶対に『刀砲』やってるだろ!?

「帰って良いですか?」

『えー!そしたら、昔、いっくんが私の手伝いしてたって情報流しちゃうよ?』

「脅しか?! ——アンタ知ってるだろ?俺がIS嫌いだって」

ISは、——アレは俺の周りの人達の人生を狂わせた。姉は一躍有名になったが、そ
の分普通の人々が得られるであろう「幸せ」が消えた。幼馴染の剣道少女は今も各地を
転々としているらしい。他にも公園でリストラされた中年男性や、女尊男卑の風潮のせ

いで男から避けられ、泣く泣く婚期を逃した●十代の女性。男が店主と言うだけで値切られた八百屋のおっちゃん等々、多くの人から愚痴を聞いた。つーか子供に愚痴んな、いい歳した大人が。

『女尊男卑』。これが今の世の中だ。ソレを齎したのもISだ。『女はISが使えるから偉い』。『どんな理不尽な事を言ってもやっても、女性なら許される』。そんな風潮だ。弾達と遊んでた時も、行き成り『これ買つて?』と言われた時は、思わず全員で言葉のフルボッコにしたのは良い思い出だ。

『ん〜そこを曲げ欲しいな〜って、束さん思ってるんだけど』
「無理です」

別に俺が居なくても、亮斗の奴が居るから良いじゃん。

『じゃあ仕方ないか。——くーちゃん!』

「了解です、束さま」

「へ?!——おわっ?!」

後ろから声がしたと思つたら、背後から押され——打鉄に触れてしまった。

キイインと音がし、脳裏に様々な情報が流れ込み、最後に女性の幻影が見えたと思つたら俺の視界はいつもよりも高く、その身は打鉄を纏っていた。

だがそんな事よりも、先程俺の背中を押した人物を見る為に背後に振り返る。振り

返った先、虚空に溶けて行くよう姿が消えゆく銀髪の少女を見つけるが、

「それでは失礼します」

「待——ッ！」

そう言い残し消えた。

俺の思考を読み取ったのか、I Sが自動的にハイパーセンサーの解析を掛ける。ドアが開けられた様子も、壁を突き破ったりしていないのでまだこの部屋に居る筈だ。

——だが、その予想に反し、ハイパーセンサーには何も引つ掛からなかった。

……無駄に技術力高けえよあの兎!

「——はああ、……オイ兎さん」

『何かな、狸の皮を被った狼さん?』

まだ繋がっていた東さんに話しかける。

最早この段階まで来てしまった以上逃げられないだろう。せめて、日常を再びブチ壊してくれやがった事や、これから先来るであろう苦勞に対して、この兎に次ぎ会った時はタダじゃすまさない事を忠告しておく。

「今度会ったら、その豊満なお胸様を啼くまで揉みしだく。覚悟しろ」

『何言ってるのさ、いつくん。東さんは何時でもおっけーだよ?』

「……………あ?」

『おつと流石に凡人共でもISが起動した事ぐらいいは気付くかく。それじゃあいつくん、またね!』

「え? あ、ちよ——!」

言いたい事を言い、即座に通話が切れた。

……あるええええ? 選択肢間違えたか俺?!

そんな俺の内心の混乱を他所に、無情にもホールの扉が開いてく。

「此処からも反応が!——こっちも男の子?! しかもイケメンキター!!」

「はあ……もう、我慢しなくても良いよね、俺?」

今世で一番苦労しているのが、顔が良いからと言う理由で言い寄って来る女性だ。前世では顔が良い男を羨ましいと思っていたが、実際にイケメンになると苦労も多いのだと、心底理解出来た。

2時間後——

「さて一夏、用意は良いか?」

「……積んだな、俺」

アレから2時間が経ち、現在の場所はコロシアムの様な広い場所。観客席には白衣や

スーツ姿の女性達。前者は自分の周りに空間モニターを展開し、後者は輝かんばかりの視線を此方に向けて来る——が、その視線の先は俺でなく、俺の目の前に居る打鉄装備の姉さん——いや、《ブリュンヒルデ》織斑千冬だ。一部、俺に侮蔑と憤りと羨望の視線を向けて来る女性も居るが、そんなのはここ数年の生活で慣れたので無視だ。

あ後は結構大変だった。検査に続く検査、更に追加で検査して、ISの基本と動かし方を数分で教えられ、そして今現在、世界最強の名を持つ《ブリュンヒルデ》こと、私生活では駄姉の称号を持つ織斑千冬と、IS学園入学試験の模擬試験が始まる所だ。

最早ツツコミ所が分からん。ISの知識は、束さんの手伝いをする過程で基本的な事は覚えたが、実際に動かすのは初めてだし。しかも相手が相手だ。

……つーか、何でド素人に最高峰のIS操縦者が相手なんだよ?! どつかの廃人ゲームだと、旅だった瞬間に勝負を仕掛けてくるトレーナーが伝説のチャンピオンみたいなもんだぞ?! しょっぱな難易度ルナティックでプレイする様なものだぞ?! どう考えても無理ゲーだろ!!

「ルールは分かっているな? シールドエネルギーはお互い600。得物はIS用ブレードのみ。お前に合わせ、私も移動範囲は地上のみで空中機動は禁止にしておこう」

「……………そりゃ有難いことで」

多分、今の難易度はハードくらいだ。せめてセカンド、もしくはノーマルくらいに下

げて欲しい。

「ああ、手加減はするし全力機動はしないぞ？ 負けても、お前と亮斗はIS学園に入学せざるを得ないだろうからな。だから——」

そう言つて、宣言通り片手一本、それも利き腕じゃない左手だ。その左手にIS用刀型近接ブレードを構え、

「勝つ気で来い」

一瞬にして30メートルもの距離を縮めて来た。

「ッ!!」

ただの振り下ろしの斬撃に体が反応し、バックステップをしながら片刃剣で受け流す。

だが、PICによって浮遊している状態だった為、予想よりもさらに後方へと下がってしまった。

「く——ッ!!（——やっぱ知識と実際に動かすのとじゃ、全然違うな!）」

慌ててブレーキを掛け、姿勢を正す。一瞬、PICを切るかどうかを迷ったが、

「良く聞け一夏!」

それよりも速く、姉さんが迫つて来た。

「（ちよ、はやッッ!!）何さ姉さんッ!」

二撃目が来た。攻撃方法は先程と同じ、正面からの振り下ろしだ。

動きを止めてしまった瞬間を狙われたので、必然的に受けるしか選択がないが、普通に受け様とは思わない。やる事は一つ、攻撃は諦め、受け流し中心の防御を選択する。

ギヤリツツ!!と金属が擦れる音を立て、何とか二撃目を防ぐが、シールドエネルギーが20程削られた。

これももつと上の実力者——それこそ国家代表クラスであれば、回避と同時に攻撃くらしい余裕で出来るだろう。

「私は、ISに関する事は一切しゃべらなかつたし、お前がISに関わらない様止めていた」

姉さんの言葉に、声は出さずとも肯定する。姉さんは、疲れて帰って来ても、酒を飲んでいようと、雑誌やIS関係のドラマやドキュメントは見せなかつたし、口にも一切出さなかつた。

「だが、お前は自分から関わっていた……ッ!」

「……ああ、姉さんには、黙ってたけど、結構調べてたよ、俺」
しゃべってる間にも斬撃は続く。

姉さんが本気で来ているのなら、俺はしゃべれもせず即負け決定だっただろう。——つまり手加減されている。斬り上げが入ってないし、一撃一撃の間が空いているし、振

る時も一秒程停止——つまり、何処から一撃を繰り出して来るのか教えてくれているのだ。

「私の苦勞は、無駄だったな一夏!!」

斬撃のパターンが増えた。最初は振り下ろしのみだったのが、次第に袈裟切りと逆袈裟が加わり3パターンに。

「——そう、だな」

削られていくシールドエネルギー。既に400を切った。

だが此方としてもただ単にやられているばかりでは無い。少しずつ、知識と実際に動かした感覚を繋ぎ、次第にISの機動をモノにして行く。

次第に動きの良くなるが、比例するように一撃が強くなり、剣速も速くなっていく。

「お前の人生は、これから先もISとは無縁の生活では居られなくなる!」

「元から、だよツ!」

多分、姉さんから束さんを紹介された時、束さんに出会った時から、俺の人生は殆ど決まっていたのかもしれない。

「お前が、ISを嫌ってるのは、知っている。だが——」

その先は言わせなかった。

振り下ろしの一撃に合わせ、一步を踏み込み姉さんの刀をかち上げる。そしてついで

と言わんばかりに、もう一步踏み込み斬撃を放つ。

——が、流石は世界最強。紙一重で躲された。

そのまま数歩距離を空け、俺と姉さんが向かい合う。

「——姉さん、一撃勝負だ」

構えは顔の左側に、地面と水平に持つ刺突の構えだ。足は肩幅に開き、左足だけ一步下げる。

シールドバリアーは既に120を切った。この一撃に全てを込めるので、恐らくは急所に入れられ、シールドエネルギー切れで俺の負けだろう。

……だが、例え負けると分かっているとしても、最後まで全力を尽くす!!

「……良いだろう」

俺の構えを見て、言葉少なく頷く姉さん。

構えるのは正眼の構え。基本中の基本の構えだが、姉さんが構える事で、極致に至っている錯覚を覚える。

「……………」

一瞬の空白。お互いの視線が絡み合い、——動いた。

仕掛けに行ったのは俺だ。

「篠ノ之流奥義——!」

篠ノ之流とは、篠ノ之家に伝わる剣術だ。俺達織斑姉弟が習った篠ノ之流は、後の後を基本とした守りの剣だ、今で言うとかウンター型と言つても良い。自ら仕掛ける事はせず、降り掛かる火の粉だけを払う撃剣だ。

だが時代の流れと共に、先の先を打てる技も産み出された。それが、今俺が放つ技。其の名を、

「桜花七式二の太刀《陽炎》!!」

技の種は刺突——と見せかけた、攻めのカウンター。敢えて相手の懐に飛び込む事で攻撃を誘い、相手の攻撃を受け流し、カウンターで決める技だ。

知識では理解している瞬時加速を、拙いながらも用い一直線に攻める。

だが、

「——良い、一撃だ」

その一撃を見て、姉さんは微かに笑っていた。歓喜と哀愁を混ぜ合わせた様な、育ち飛び立って行く雛を見守る親の様なそんな顔をしていた。

「見せてやる、一夏。篠ノ之流の終点、カウンター型の極致を」

「勝負!!」

交叉は一瞬で終わり、——直後、勝敗が決したブザーが鳴り響いた

帰宅。俺の不幸はこれからだッ!

車窓から見える風景が、高速で後ろへと流れて行く。——別に怪しい組織に誘拐された訳じゃないぞ?

時刻は夕方6時。場所は、試験会場から帰る黒塗りの車の中だ。既にあの試験（とう名の試験）から既に6時間は過ぎている。

「……まだ痛いな」

場所は脇腹だ。

あの試合は、当然と言うべきか俺の負けだ。敗因はシールドエネルギー切れ。対する姉さんの残量は498。開始直後はお互い600だったので、実に100程しか削れなかった。しかもその内の8割は、移動の際に消費した分だ。それも無駄な動きが多かったから余計に消費して、だ。

——世界の壁は、思っている以上に分厚かった。

最後の一撃、俺の攻撃はカウンター。姉さんの一撃が来ても、ソレを逸らし攻撃を与える技だった。

だがあの瞬間。俺の剣は弾かれたと同時に、胴に一撃を喰らった。真正面から見事に叩

き切られたのだ。

姉さんが取った方法は分かる。技名は篠ノ之流 終の太刀『現身』、その発生技『現身・胴』。俺の剣が姉さんの剣に接触した瞬間、俺が刺突から胴切りに移す直前、それこそコマ数秒の差で俺の剣を弾き、そのまま払った勢いを利用した胴薙ぎの一閃だ。

ハッキリ言つて、技量が違い過ぎる。

まず、剣閃のスピードがケタ違いに速い。それに加え、自分の剣速と間合い、相手の技、間合い、剣速を全て把握し、絶妙なタイミングで打たないと出来ない技だ。なにせ、一瞬でも遅れれば確実に激突コースだ。——俺では、まだそこまでの領域に達していない。

だが逆に言えば、まだまだ強くなる事が——、

「(ヤメヤメ、強くなってどうしろと)」

首を振つて、考えを途中で放棄する。

確かに、今後は自分自身を守る力が無いと危険だが、なにも頂点を目指さなくても良いのだ。

「おう坊主。此処で良いのか？」

車がゆつくりと停車し、運転手のおつちゃんに声を掛けられた。

外を見れば、すでに家の前まで来ていたようだった。

「ええ、有難うございます」

「気にするな。これが俺の仕事さ。——ほれ、降りな。こんな遅くまで試験をやつてたんだろ? 今日ぐらいは豪勢なメシでも食つて、風呂に入つて疲れを落とすと良いぜ? ——だからよ、明日からも頑張れよ、坊主」

……ヤベエ、カツコイイ!!

ニツと笑うおつちゃんに、今日だけでかなりすり減つた俺の心が猛スピードで癒された。

「応! 明日は良い事があると信じて男は進むだけですよね!」

「ハハッ! 良い言葉だ!!」

車から降り、扉越しに向き合う。

「お疲れツしたあ!!」

「坊主も氣いつけるよ!」

走り出す車を見送る。

「……帰るか」

あのおつちゃんは「豪勢なメシ」と言っていたが、生憎と本日の夕食は簡素なモノになるだろう。何故かと言うと、本来なら、試験帰りに気分転換も兼ねて買い出しに行こうかと思つていたのだ。まあ残りモノでもそれなりに良い物は作れるのだが——今

日は疲れた。

姉さんも、俺と亮斗の件で I S 委員会に赴く事になっており、2 日間は帰れないと言ってた。

「明日は買い物だな。食材の他にカップ系でも溜め買いしとくか。あと、寮生活になるから下着類も少し買って……調理器具とかはどうなんだ？ 食堂はあるみたいだけど、各部屋に備え付けのキッチンはあるのか？」——今度、姉さんに聞いとくか」

そう考えながら玄関を開け——、

「お帰りなさい、アナター！」

——次の瞬間、速攻で閉めた。

ついでに鍵も掛けたが、よくよく考えれば中から開けられるのだと気付く。改めて家を見れば、先程まで暗かった我が家に明かりがっていた。一度深呼吸して脳を無理矢理に正気に戻し、先程玄関に立っていた女性の事を考える。

……アレ、どう見たって、

「ウサミミメイド、だよなあ？ しかもエロ目的のスカートの丈が短いタイプ。

……中身がまともならエロくて最高なのに」

再びドアを開ける。

「お帰りなさいませ、旦那様」

ドアを開ければ、先ほどとは違った人物が立っていた。

銀髪のセミロングを三つ編みにした、黒眼と金の瞳が特徴の少女。背は150程で、着ている衣装は紺色のロングスカートのワンピースに、白いエプロンを掛け、頭にはカチューシャを付けている……ぶつちやけメイド服だ。こっちはエロ目的じゃない方だ。

「——ただいま。あと旦那様言うな、クロエ」

少女の名前は『クロエ・クロニクル』。聞いた限りだと、なんと試験管ベビー、つまりは人工子宮育ちの遺伝子操作で生まれたんだとか。一体何処の種Gだよ、と最初は思ったね。

今から3年程前に行方を暗ました束さんが、なんか色々あった末に拾って育てている子である。あと、胸は服の上からでも自己主張しているサイズ。

ついでに言うくと、俺を打鉄に接触させた張本人である。

「お疲れ様です、旦那様。お食事の用意は出来ております。束さまも心待ちにしております、どうぞ居間へ」

「ああ、分かっ……なん、だと……っ」

更に言うくと、暗黒料理ダークマターの作り手である。以前、指導した事があるが、それでも暗黒料理ダークマターの発生率は未だに9割以上だ。

「がんばりました」

「ああ……、頑張っちゃったのか」

「じゃあ今日が俺の命日かな。」

「先、着替えて良いかな？」

無論、死に装束に。

「どうぞ。東さまも、現在居間でお召変えをしている最中ですので」

「なにっ!? い、いや落ちつけ俺っ、コレは諸葛亮ならぬ諸葛東の罫だ！油断と隙とエロを見せたら喰われるぞ！人生と物理的^性になッ!!」

理性を振り絞り自室に戻る。

まずは制服を脱ぎハンガーに掛け、数秒悩み、衣類棚から少しだけオシヤレに気をつかった私服に着替え、机から食前用胃薬を取り一粒飲む。ついでに食後用も何時でも飲むように準備。部屋から出て、階段を降り、居間の扉の前に立つ。

——さあ、戦いの時間だ。

「お待たせしました、東さん」

「やっと来たね、いっくん」

窓際のテーブルの上には、見た目は普通な料理が並んでいる。内容は親子丼に卵入り味噌汁、納豆、漬物、……それに卵焼き、オムレツ、目玉焼き。ほとんど俺が教えた物が大半だ。

っーか、

「朝食かよっ!?あと卵何個使った!？」

「それよりいつくん、東さんを見てナニか言う事はないのかな〜?」

その言葉に食卓の上の事を一旦忘れ、対面の席に座る東さんを見る。

「……………綺麗ですよ」

「やった♪」

嬉しそうに顔が綻んだ。言っておくがコレはマジだ——服装だけ見れば。

着ているモノは先ほどのメイド服とは違い、薄いピンク色のフリルの花をあしらった、胸元を大胆にV字カットした白のワンピースドレスだ。それ以外にも普段頭の上に付けているウサミミを取って髪は三つ編みにし、軽く化粧を施したのか元々整った顔立ちには更に美しく、胸元から覗く谷間や、自分の興味のある人にしか見せない笑顔が合わり——ハッキリ言おう、物凄くときめきました。

東さんの後ろに銀髪メイドが居るのも含めれば、本当に何処かの令嬢と従者の構図だ。——食卓の上に並んでると合わせると、異和感がもの凄いが。

一言で例えるなら、『一般家庭の朝食の場にドレス姿の美女とメイドがいる光景』である。めっちゃシユールだ。

「じゃあ食べよー今日はいくーちゃんが自信のあるモノだからおいしいよー!」

そりゃあ、調理器具全て買い変える程酷使して特訓した料理だからな。むしろ酷くなつてたら泣く。俺が。

「そう言えば、クロエの分はないのか？」

窓際テーブルの上に乗っているのは二人分しかない。元々食卓用のテーブルじゃないから仕様が無いのだが。

「……東さま」

「ん、まあいつか。くーちゃんも一緒に食べよ」

「わ、わかりましたっ」

何故かひどく緊張した様子で椅子を持って来て座るクロエ。……なんだろ、今すぐ離脱しろと第六感が警戒してる。今すぐ逃げないとなんかヤバいつて。けど電話越しだと、はぐらかされるかすぐに切られるから、こんな機会じゃないと東さんと話し合う機会なんて無いし……ええ、男は度胸！いざとなったら姉さん直伝の『対東さん鎮圧用アイアンクロー』だ！握力74kgは伊達じゃない事を見せてやる！

「じゃあ頂きます☆」

「い、頂きます」

でも今は目の前のゴハンに集中しよう。トラップつてのは、目に見えない所に潜んでるからな！

少年少女十美女、食事中

「(バ)馳走様」

美味かった。ただその一言に尽きた。外れは無かったし、きちんと味付けも出来た。焦げに異臭、食感が悪かったり、食べた直後に味が変わるなんて事もなく食べ終わった。

……成長したなあー。

そう思わずにはいられなかった。弟子の成長を喜ぶ心境とは、こんな感じなのかもしれない。

「——で、本日はどんな用事ですか?ただ純粹に祝いに来たなんて事ないでしょ?束さん。——今回は祝って貰ったって喜べないし、嬉しくない」

「悲しいな〜って、はいはい言うからそう怖い顔しないでよ、いっくん。——くーちゃん、片付けお願い出来る?」

「はい」

何時もなら俺も一緒に片づけを手伝っている所だが、今回ばかりはクロエが食器を流しに運ぶのを尻目に、俺はずっと束さんから目を離さなかった。

「さて、まずはおめでとう、って言っておくよ。いつくんも……りよっちゃんも、I S学園に入学する事は確定してるよ」

この人、また亮斗の名前忘れやがったな。

「もし何らかのちやちやが入っても、私が脅すし」

「(怖えつつーの) それで?なんで俺……をI Sに関わらせようとしたんですか?」

亮斗を含めなかったのは、アイツは関わる気があつたからだ。

「俺がI Sを嫌ってる事は知ってるでしょう?それに、姉さんも俺をI Sには関わらせようとさせなかった」

「ちーちゃんには申し訳ないと思ってるけど……箒ちゃんがI S学園に入る事になったんだよ。だからいつくんと、りよ……りよっちゃんを再会させてあげようと思った、つてのが理由の一つかな」

本名『篠ノ之箒』。篠ノ之家の次女であり、束さんの妹。そして俺と亮斗の同年で幼馴染だ。箒が関わってるなら、シスコンであるこの人がこういう行動を起こしたのも頷ける。

だが……、

「ウチはI S学園から近いでしょうが。休みになれば向こうから会いに来るでしょう?あと、亮斗の名前を忘れるなら、アイツとかヤツ呼ばわりで良いですよ?」

姉さんだつて、朝早くから出て、忙しくない時は大体7時くらいには帰って来るのだ。幾ら規則とかが厳しくたって、休みの日ならば日中に会って数時間くらい過す時間位取れる筈だ。

「本当に、箒ちゃんが素直に会いに来ると思う?」

……………微妙だなあ。

今のアイツがどう成長したか知らないけど、俺の中の「篠ノ之箒」は人見知りで意固地で、亮斗の前じゃ素直じゃなかった。……何かと理由付けて避けてそうだなオイ!?

「ほ、他の理由はッ?!」

「他ね……大まかに分ければ2つかな?——いつくん、自分からISに関わってるよね?いつくんが前にプログラマーの仕事を受けてた時、依頼先がIS関連の企業だったし。後、デユノア社と倉持技研の武装開発部門に幾つか設計図を売ってたよね?」

「やっぱりバレてた、と言うのが正直な感想だった。と言うより、束さんのハッキングレベルだと簡単に調べが付くだろう。」

——だが甘い。

「プログラマーの仕事は中学上がるのを機に手を引いた。設計図を売ったのも、ソレが一番儲かりそうだったからだ。——幾ら学費の安い藍越とは言え、高校は金が掛かるし」

まだ小学生だったからバイト出来ないし、家事とかもしなくちやならなかった頃の話しだ。その頃に、東さんから教わったプログラミング能力を活かし、IS企業からの仕事をネット経由でやり取りし、こっそりと請け負って金を稼いでいたのだ。

ついでに言うのと、杭打ち機って浪漫だよな？

「つーか、同類のアンタが分からない訳じゃないでしょ？」

「まあね、デュノアが先に凸突き系の武装を作ったのは評価してあげても良いね。——じゃあ更に聞くけど」

まだ何かあるのか？

「——いっくんのPCの中に入ってる、幾つモノ設計図はなんなのさ？」

「っ!! 待て、何で知ってる?!」

「結構自作のハッキング対策はしてあるみたいだけど、——あれ、CPUにISCコアの試作型使ってたでしょ」

確かに、東さんがISCコアを作る過程で生まれた、既存のCPUよりも高性能の試作ISCコア（自己学習・自己進化・形状変化・量子変換機能なし）を用いて自作のPCを作ったけど。……アレ、何度も調べてバックドアの存在が無い事を確認したし、コアネットワークにも繋がって無かった筈なんだけど？

「ふふん、私を誰だと思ってるのさ？」

そうやって豊満な胸を張り、

「前にいっくんの性癖調べようと思って、直にコア繋げてハッキングしたのさ!」

「その可能性は考えてなかったツツ!!」

だが残念だったな!その手の類は、全て脳内保管してあるのだよ!!

「確かにそっち係は調べられなかったけど、面白いデータは一杯見られたね。例えば、

私も考えてる展開装甲を模した武装とか。——中々面白い事考えるよね〜いっくんも。

『ガトリング砲を仕込んだ大剣型大バサミ』とか『遠距離はレーザー、中距離は実弾、近

距離では実体剣』、『スラストアスターとして使いながらも近距離ではレーザーブレード』なん

てモノもあつたよね? 完成予想図と概要だけで、中身は全然出来てなかったみたいだ

けど」

俺の黒歴史いいいいいい!!!

「ちツ、違うっスよ?ええつと、そう絵、アレはただの絵ですよ! イラスト書くの上手

くなつたから、ただ何となく書きたくなつただけの絵です!」

黒歴史を知られた羞恥心からか、火照つた体を冷まそうと水を一気に飲む。

……うん、少しは頭が冴えた……気がする。

「うんうん、やっぱりいっくんも男の子だね〜、自作のロボットとか考えたくなるよね

〜」

「アハハハハつ、思春期真っ盛りですからっ！」

「そうだね〜……あ、いっくん。自分好みのISとか作ってみたくない？」

「ハイ、ツクリタイデス。ノデ、ISガクエンニイキマス」

「良かった〜。東さんもいっくんが考えた武装とか、もつと一杯見てみたいな！」

「あはははつ、何時か見せますよ」

くそう、ぜつたい泣かす——いっくかな！

「で、もう用事は無いですよね？ ならお帰りはあちらです」

指差す方は当然玄関だ。もう三つ目を聞く気力が無いので、とつと帰って貰う事にした。

……ホンツツツツトに風呂入って寝たい。

もしくはアルコール品を呑んで酔い潰れたい。でもアルコール品は姉さんの私物なので、必然的にさっさと寝る事を選択する。

「ねえ、いっくん」

不意に東さんが言葉を発した。

『『織斑一夏』は今の世界に満足してる？』

察するに、コレが三つ目の理由なのだろう。

……満足してる、か。どう満足なのかが良く分からんが、今言えるとしたら——、

『満足してた』、ですかね。アンタが俺の日常をブチ壊さなきゃ、ずっと満足な日々を過ごせましたよ」

「そっかあ〜」

そう言つて、後悔と満足が合わさった表情かおを見せる。その顔を見て、ふと考える事があつた。

……そもそも、この人は今、『何』を目指しているんだ、と。

ISを作つたのは宇宙を目指したいから、と言う理由だつた。

3年前以降、行方不明になつてから起こす騒ぎも、ISを本来の『船外活動用のマルチフォーム・スーツ』として見て貰おうとした行動だと思つていた。

だが、クロエを連れて来てからの束さんの行動は何処か違つていた。ウチに来る頻度は減つたし、何処かの国で騒ぎを起こしたと言う話も聞かなくなつた。クロエに聞いても、普段は姉さんや俺、それに箒の事を盗撮してたり、何かしらの研究をしているだけなのだと言う。

偶に来てても、愚痴る事も無くなり、姉さんと二人で話す事が多くなつた。——何よりも、仮面の笑顔が増えた事だ。束さんが本当に笑つた顔を見たのは、先程の夕食前に見たのが、随分と久しぶりな気がする。

「束さん、一つ聞いて良い——」

言っている途中で遮られた——口で。

「(柔らかい——じゃなくてツ!!)」

「んっ」

「んんっ?! (舌!舌あ!!舌がニユルつとー?!?)」

その後1分ほどだろうか。たつぷりと俺の口内を舐めまわしたあと唇を離し、

「——はあ、……ねえいっくん。賭け、しよつか」

唐突にそう言つて話しを切り出した。

「え、あ? か、賭け?」

あの超論理主義の東さんが、不確定要素の多い賭事?

「賭けの内容は『いっくんが今の世界を壊す為に動く』かどうか」

む、無茶苦茶物騒な内容だなオイ!

「今、いっくんは危うい天秤の上に乗ってるの。——解るよね?」

解る。なんせ世界で二人しかない男性のIS操縦者で、それに姉はISに乗れば世界中でも5本指に入る単体戦力を持ち、その友人で、今俺に抱きついていている人は世界最高の頭脳の持ち主だ。当然、俺を手に入れようと世界各国が動く。

「期限は一年。いっくんが現状維持——つまり自分の人生を他者に預け、鎖で繋がれる事を選択したら私の負け。その場合、私は二度と干渉しない事を誓ってあげる。——当

然、私は当然『壊す』に賭けるよ」

「最悪で最上級のプロポーズだな、オイ」

負けても首を鎖で繋がれて、勝っても首輪で繋がれるのか。

「話しは以上だね。——ああ、あと少し早いけど卒業祝いをいっくんにあげるよ!」

「は? どういう——」

急に体に入らなくなった。腕にも足にも力が入らず、頭は熱に魘されるかのようにポーつとし、——言いたくないが、俺の一部分が臨戦態勢になっている。

……コレは、まさか……ッ!

「んふふ、よーやく効いてきたね」

「盛り、やがったな……っ」

道理でメシ食った後から異様に体が熱くなる筈だよ!

「い、嫌な予感しかしないが一応聞こう、——プレゼントの内容は!?!」

「イヤン♡ 女の人に言わせるなんて、いっくんって意外とサド? でも言うよ! プレゼ

ントはワ・タ・シ♡ あとくーちゃん」

「い、いちかさん……っ」

クロエが台所からふらふらと千鳥足で此方にやって来る。その顔は赤く、何かを求め様な物欲しげな表情をしていた。

……そう言えば、クロエも一緒に食つてたつて。あの時、東さんがやけに強調していった『一緒に食べよ』つて俺の事かよ?!

「さあ、いっくん。覚悟は出来たかな? ちなみに私は出来てるよ! ……くーちゃんも良みたいだし」

「お、俺が今後、どんな道を進むかなんて、俺にもわかりませんよ? それでも——」
再び口を塞がれた。今度のは啄ばむ様な軽いヤツだ。

「——いっくんはいっくんの人生を好きに進めばいいと思う。私達を抱いたつて、別にいっくんに『責任を取れ!』なんて言わないよ……くーちゃんは貰つて欲しいけど。でもいっくんに強制はしない。寧ろ、今やつてる事はいっくんに嫌われる様な事だと思つてる」

「なら……」

「でも止めない。今此処で止めたら、私が永遠に後悔する事になるから。だから、いっくんは気にしなくて良いの。——だから」

言いながらも顔近づけ、

「今だけは私を愛して」

俺が何かを言う前に、三度目のキスを落としました。

それに対し、俺が取った行動は——

45 帰宅。俺の不幸はこれからだッ!

お
ふ
う

俺と亮斗は、朝の人の視線が少ない時間帯に学園に登校した。その方が人に絡まらなくて良いと思ったからだ。——が、どうやらヒトの好奇心とは抑えられないモノの様で、好奇心旺盛な女子生徒（中には教師も入ってたが）は俺達のクラスを調べると、教室に入らずとも廊下でひきりなしに——それこそ珍種を一目だけでも見ようとする客の様に——じろじろと見て、挙句の果てには写真を取る者もいた。

それ「だけ」ならばまだ良い方だ。中には雑誌社に売ろうとしたり、勝手に写真集とか作ろうとしたり、どっちが受けだ攻めだとか考えるのだ。

——マジ止めて欲しい、特に最後の。

まあ今はもう授業時間内なので、廊下には誰も居ない。今はクラスの女子の視線だけだ……それでもウザいレベルだ。

ちなみに、教室に入り早一分で亮斗は机に伏した。

「皆さん、ご入学おめでとうございませす」

教室のドアが開き、一人の女性が入って来る。

背丈は150後半程で、緑色のショートボブヘアの女性だ。教師と言う事は、少なくとも二十歳は越えている筈のだが、低い身長に童顔で、私服に眼鏡を掛けた姿は中学生、もしくは高校生と見間違えそうな程だ。ただある一点だけ、

「(デカイ)」

其処は見事に育つたようである……御胸様が、だ。おっと！身長の事を述べたので隠しようが無かつたぜ！

その女性が教壇に立つと、その横に空間ディスプレイを開き名前を表示する。

「私はこれから3年間、皆さんの副担任を務めさせていただきます。山田真耶です」

「……………」

意気揚々と自己紹介する可愛い系女教師の山田先生だが、聞き手側である生徒達はそんなの知った事かと言わんばかりに、視線は俺と亮斗に向けたままだった。

「……………威厳無いけど教師なんだから、少しは視線を向けてやれよ」

そんな事を考える俺自身、視線は教壇では無く、一週間ほど前に学園から届けられた、手元の分厚い教科書『ISの基礎理論』を読んでいるが。

昔、東さんの手伝いで知っていたので流し読みしていたが、後半になるにつれて此処十年程で新たに判明した能力なんかも載っているの、非常にタメになる。

「え、ええっと、今日から皆さんは、このIS学園の生徒です。この学園は全寮制で、放課後も一緒に過す事になりますので、仲良く助け合い、楽しい3年間にしましょう！」

「……………」

「すう……、すう……」

「うう……………」

「(哀れな)」

必死なのは分かるけど、それでもクラスメイト達の関心は俺たちに集中してるようだった。……うん。山田先生は頑張ってるよ？でもまずは、全員の視線を自分に向けさせないと、俺も手元から顔を上げられないんだ、だから泣かないで!? あと亮斗、テメエ寝てんじやねえよ!!

「じゃ、じゃあ自己しましょうッ!出席番号順に、まずは「あ」行の相川さんから!」
「え?……あ、はい、えーつと相川清香です。出身は——」

こればかりは無視する訳にもいかず、呼ばれた生徒は順々に自己紹介してく。これには功を奏したのか、全員の視線が俺達から視線が逸れた。あと山田先生が涙目から戻った。

——が、実は問題の先送りだった事を俺は気付いている。

「はい有難うございます!……じゃ、じゃあ次ぎはお、織斑君。お願いします」

「……はい」

流星にコレばかりは無視する訳にはいかず、教科書を閉じ立つのと同時、先程以上のプレッシャーが押し掛かった。

「(うおう視線が凄い。マジ穴が空きそう)織斑一夏です。何故かISを動かせる二人目の男性操縦者です」

無難な挨拶と言うのなら此処で終わりにすれば良いのだが、周りからは、無言だが『もつと!』と催促が来ている。

……良いだろう、俺の体を張ったボケを活目するが良い!!

「好きな事は体を動かす事、ボケる事、パソコンの前に陣取る事。嫌いなのは人の話しを聞かないとある女性。趣味はネットサーフィン、読書、料理。男友達は多い方で、彼女は今の所なし。ちなみに童しいたあツツ?!」

「あがぁーッ?!?!」

最後まで言う前に、側頭部からの鋭い衝撃が来た。ついでに後ろ側から亮斗の叫びも聴こえた。

「そこまでにしておけ盛年^{せいねん}。それと起きろ木場亮斗、授業中だ」

叩いた人物は、この学園の教師にして、俺の姉『織斑千冬』だった。……そう言えば、さつき山田先生は副担任って言ってたな。と言う事は、もしかして姉さんが担任って事か?

「!!!!!!!!!!!!!!」

「うおつ?!?!」

四方八方から音響兵器が発生した。マジ耳が痛てエ!!

「本物のブリュンヒルデ!生千冬様だわ!!」

「生きてて良かった!!」

「私、此処に来るために沖繩から泳ぎと徒歩で来ました!」

最後スゲーな、アスリート目指せんじやね?

「はあく、全く。毎年毎年、私の受け持つ奴等は信者ばかりか」

そりやあご愁傷様です。けどまあ、『モンドグロツソ』を見てISに憧れた子達ばかりだから仕方ないんじゃないやね? ある意味生きた伝説だし。女性としてもスタイル良いし、美人だからモテるしな。——家だと、社会に疲れきったOLみたいだけど。

「あだあああツツ?!」

乾いた音が俺の側頭部から出た。

「い、イテエゼ姉さんツ! 今にも脳が二つに分かれそうだツ!!」

「馬鹿な事を考えるなよ、愚弟? あと、脳は元々二つに分かれているし、側頭部だから割れる訳が無い。それと、学園内では『織斑先生』だ」

「流石だね☆ちーちゃんガツツ!!」

今度は木場が東さんの真似をして叩かれた。

……バカめ! 今東さんネタは藪蛇所か逆鱗だぞ? 言うつもりは無いが。

「そのふざけたしやべり方は余計イラつく。即刻止めろ——次は“縦”だ。分かったな? 木場、織斑……?」

マジで殺す気の日だ!!

「Yes, ma'am! 織斑先生!!」

俺と亮斗がハモって答えた。しかも、立ち上がり敬礼もしている。

「——完璧だな俺達!」

「——当然だろ? 義兄弟よ!」

アイコンタクトもバッチリだ。

「……………」

クラスメイト達からは、啞然とした表情で見られていた。

……むう、まだ俺達のノリには乗って来れないか。

「……まあ良いだろう。座れ」

「ハツ! 有難うございます!!」

危ねえ危ねえ。縦はマジ危ねえって。

「すまなかつたな山田先生、SHRを押しつけてしまつて」

「い、いえ! 私だつて教師なんです、これくらい出来ませんと!」

半分以上出来てないがな。現に自己紹介も俺で止まつてるし。

「織斑先生こそ、お疲れさまでした!」

「ああ、此処からは私が引き継ぐ」

「はーい」

む！山田先生から、何処となく百合臭が漂うぞ？……やっぱアレか？敷居の高い女子高特有の姉妹関係でも目指してんのか？お勧めはしないが、姉さんが幸せなら俺は反対しないけどな。

「さて、入学おめでとう諸君。私がこの一組の担任、織斑千冬だ。私の仕事は、諸君等新人を1年で使い物にする事だ。私の言う事は良く聞き理解しろ、出来なくとも出来るまでやってもらう。分かったら返事をしろ、分からなくとも私の言葉には返事をしろ。良いな」

「……………はい!!」

鬼教官の言葉にも、元気良く返事をするクラスメイト達。

その言葉に、満足げに頷く姉——いや、織斑先生。だから殺気を放つのを止めて下さい。

「今日だけは1、2時限をHRとして使って学園の規則や行事、その他色々な事を教える。3時限目から普通の授業を行っていくから、全員、進んで自薦しろ」

ああ、そう言う所は普通の学校と変わらないんだな。でもまあ入学初日から授業をするのは、やはりというか特殊な学校なだけある。



——時は進み、1時限目終了

やはり特殊な学校だけであった、と言っておこう。部活動とかは“割りと”普通なのだが、決まり事やら、制約などがかなりあった。

「流石はI S学園、と言えば良いんだろうな」

亮斗が俺の席までやってきて駄弁る。

まあその意見には同意しよう。何だ校則が55項目もあるって。しかもその中に国連がどうの、各国の政府がどうのって……校則に国の事情が入って来るとかマジパネエ。

「ちよつと宜しくて?」

「ん?」

声を掛けられた方向、左側に立っていたのは金髪で、先の部分だけ緩めの内巻きヘアの女子生徒だった。

ついでに、此方に声を掛けようと席から立ち上がった幼馴染の少女が居たが敢えてスルーだ。

……相変わらずタイミングの合わん娘だ。

「それで、俺？それとも俺達？に何か用か？ええつと——」

「まあっ！私の名を知らないと？このイギリス代表候補のセシリア・オルコットに声を掛けられたのですから、光栄に思いなさいな！」

コイツ、女尊男卑の間違った思想のバカ女か。

即座に亮斗とアイコンタクトスタート。

（——どうする？叩く？ポッコ？この一言だけでツツコミ所が一杯あるんだが）

（——久しぶりにヤルか）

一致団結だったようだ。

「いや、君の名前聞いた事ないし。1時限目の自己紹介、俺の番で終わったじゃん」

「その歳でボケか……大変だな」

先制で俺が入れ、亮斗が続く。

「な——ツ！」

驚き、言葉が詰まるのを尻目に、今度は亮斗から口を開く。

「そもそも元々ISに関わってない男なんだから、代表候補まで把握してる訳無いじゃん」

「少し考えれば分かりそうだけだな」

「そ、それは——」

まだまだ俺達のターンだ！

「確かに代表候補の人ってCMとか映画出演とかモデルもするらしいけど、アンタの事見た事ないんだけど？ 出た事あるのか？ それも全世界規模のな、国内しか放送してないなら知らないの当たり前だし」

「あ、あの……」

「ついでに国家代表でもないのに、代表候補程度で偉そうにしない方がよいよ？——器の程が知れるから」

「うっ……！」

「あとマナーが成ってないな。知っている前程だとしても、初対面同士なんだから、まずは普通に挨拶だろう。常識だぞ？」

「はい……」

「あと髪の毛の巻きが足りない。もつと巻けよ」

「そ、そうでしょうか……？」

「長手袋も無いな」

「長袖では目立たないと思うのですが？」

「目にしたいだけ模様入れろよ」

「そ、それは——って最後のは個人の自由でしょう!!」

チツ、掛ける言葉を間違えたか。

「それで、……セシーナ・ウオルコットンさん？」

「セシリア・オルコットです！何でのすの、その化粧品会社が出した化粧道具みたいな名前はず！」

おお、コイツ、ツツコミレベルが意外と高い！

「ならセシリーはどうよ？」

「……良いニツクネームですけど、その名前、私には荷が重すぎる気がします」

今度は亮斗が進めるが、やんわりと断られた。まあいい判断だと言わせてもらう。

「じゃあセツシーはどお？」

すぐ近くから、一人の女子生徒が間延びした口調で混ざって来た。

制服の袖を長めに改造した、あずき色のセミロングをツーサイドアップヘアにした少女だ。印象としては「ゆるい（漢字ではなく平仮名で）」だ。俺が見ているのに気付いたその子は、にへらあ、と笑顔を見せた。

……何この子、物凄くマイナスイオンが溢れてるんですけど？

「私、のほとけ『布ほんね』本音』ね。よろしく、おりむー」

「お、おりむー……？ いや、まあ呼び易いように呼んでくれて良いけどさ……のほほんさんで良いか？」

俺も東さんの事は言えないな。名前よりニツクネームの方が長いってどうよ？

「お〜！ おりむーは意外とネーミングセンスがあるね〜」

「のほほんさんも、解り易いニツクネームを付けるの上手いよな」

「じゃあ俺なんかどう？あ、俺は木場亮斗な」

のほほんさんとの話し中に、亮斗の奴が混じって来た。オルコットはガン無視か、スルーして対応するようだ。——まあ気持ちは分かる。

「ん〜、じゃあ、りよっちゃん〜」

「[[[ぶツツ!!]]」

二人——いや、箒も含め三人で嘖き出した。

りよっちゃん！りよっちゃんだとよ!!東さんと同じネーミングセンスかよッ！

「良かったな、りよっちゃん！」

「良くねえよー！」

亮斗が憤慨する。

「——ふ——」

「[[[ん?]]」

声の漏れた方を見ると、肩を震わしたオルコットの姿。

——あ、すっかり忘れてたな。と言うかコレは来るか？耳塞いどくか。

「——ふざけないで頂きたいですわッ!!」

予想通り爆発した。

「何なんですよの!?! 先程から私を無視しておいて、我慢がなりませんわッ!! あの《ブリュンヒルデ》様の弟であり、朝から教書を読む勤勉で、其処らにいる卑しい男性よりもマシな方だと思っていましたの!?!——なんて最低な屑ですよ!?!」

あ? コイツ、自分から非常識な声のかけ方をしたのもう忘れてんのか? それに変な理想押しつけんな。あと、『最低の屑』は別の人物だ。俺は催眠携帯なんか持つてねえよ。

「(おい、一夏)」

罵詈雑言を言いまくってるオルコットを他所に、亮斗が小声で話しかけて来る。

「(なんだ亮斗。俺、結構頭にきてんだけど?)」

「(抑えろ一夏。時間見ろ)」

時間?——あ。

「おい、オルコット。戻れ」

「戻れ!?!この私に、イギリス代表候補であり、第三世代機である《ブルー・ティアーズ》を持つこのセシリア・オルコットに、男如きと机を並べ勉学に励むのが嫌なら母国へ帰れと言うのですかッ?!」

いや其処まで言つてねえし!——つて来たあ!

その人物が教室に足を踏み入れるのを見たクラスメイトは、一斉に自席へと戻る。——1人の女子生徒を除き。

「おい」

「今度は何ですの?!私はこれか、ら……」

オルコットの声が、段々と萎んで行く。それはそうだろう。なにせ、不機嫌そうに振り返つた先に居たのは、出席簿エモ簿を持って、自らの肩を軽く叩いていたねe——織斑先生なのだから。

「お、織斑先生……えっと、何かご用でしょうか?」

「用か、ああ確かにあるな。——オルコット」

「は、はいッ!」

たった一声掛けられただけで、オルコットが背筋を正し、——顔をほんの少し赤らめて織斑先生を見る。

……いやいや、何で顔赤らめてんだよ!?

「休みの時間をどう過ごすかは個人の自由だ。——だがな、大声を上げて騒ぐとなると話しは別だ」

「うっ……!」

おお、オルコットがへこんだ。

「それと、お前はイギリスの代表候補だったな？お前の態度や生活、他者とのコミュニケーション能力は少なからず自国の風評へと響く。よく覚えておけ」

「で、ですが名を弄られた上に、あまつさえ話しの最中に他の方との話に夢中になられたのですよ!?!」

さつさと本題に入らないのが悪いんじゃないやね？でもまあ、無視したのは悪いとは思ってる。予想以上に、のほほんさんとの会話が弾んじやったからなあ。

でもオルコット。ウチの姉さんはちよつと非常識だぞ？

「——だからどうした？」

「なッ!?!」

「無視された？ 男の視線ぐらい振り向かせろ。名を弄られた？ そんなの芸人のコントかパフォーマンスの一種ぐらいに思え、むしろ普通の自己紹介ぐらいじゃ印象に残らん」

そら来た。理不尽な発言だとは思うが、姉さんの人生、出会った人達はかなり濃い人格が多いのだ。

だからこそ、こう言う発言も説得力がある。

「あ、う……」

そして大概の人が、今のオルコットの様に口をパクパクさせて唾然とする。

「話しは以上か？——なら、私の手間を取らせた罰だ……初犯だから軽めにしておいてやる。よく覚えておけ」

直後、軽快な音が響き、同時に二時限目のチャイムが鳴った。

決闘は避けられない

——4月7日・二時限目

「——さて諸君。一時限目と並行して、この時間も特別HRだ」

教壇でそう宣言する織斑先生。その言葉を、約一名を除き全員が静かに聞く。その約一名——オルコツトは、随分手加減された一撃だけでフラフラと自席に戻って行った。

内心、あの程度でフラつくとは情けない、と思っていたのだが、それ以上の打撃を喰らって『クラクラする』で済んでいる自分の事を思つて、軽く鬱になった。

——慣れ、そう慣れだよなっ!!人間慣れる生きモノ!

そう納得し、織斑先生の話しを聞く。

「それではまず最初に、クラス代表を決めて貰う。クラス代表とは、言葉通りクラスの代表、——まあつまりは委員長的な存在の事だ。学生会議や来月行われる『クラス対抗トーナメント』、それ以外にも色々な行事で引つ張りだこになる役職だ。しっかりとこなせば、内申での教師側からの評価は高いぞ?ちなみに定員は一名。——誰か、やりたいやつはいないか?」

いやいやいや、その説明で自薦するヤツは中々いないと思うぞ?

「はい！織斑君を推薦します！」

やっぱり来たなッ！

「私も織斑君が良いと思います！」

「そうよねー、なんとたつて織斑先生の弟さんだもの！」

「ええ——きつとトーナメント戦で優勝して、私達にフリーパス券栄を持って来てくれる光

わ！」

「「「「「賛成!!」」」」」

欲望に忠実だなオマエら！ あと姉さんと比べるな！ 姉さん、戦闘能力に関しては

人外だから!!

「いいえ、此処は木場君を推薦するわ！」

良しッ！誰だか知らんがよく巻きこんでくれた！

「フフフッ、普段は爽やか王子様な美少年が、いざ戦いの場に出ると闘志を漲らせ、獯猛な笑みを浮かべ敵へと果敢に向かつていく……………コレは売れるッ！」

「合作を希望するわ」

「あつ、クソッ！先に言われたッ」

「ふん……………ジャンル違いね。私は『姉×弟』でいこうかしら」

「あら、アナタそつち系？私は今回、無難に『一×木』にするわ……………いや『姉×(一十木)』

で行くべきかしら？」

「「それ下さい！」」

やっぱ何処にでも居るんだな、作家つてのは。つーか4人か、意外と多いな。常連も居るみたいだし、マジこの教室力オスだな。

「納得いきませんわッ!!」

そんな空気を断つように、机を思いつき叩いた音と、叫ぶような声が同時に響いた。場所は教室の後ろ。振り返らなくても誰だか分かる——セシリア・オルコットだ。どうやら立ち直ったようだ。

「クラスの代表を、物珍しいからと言ってやる気も実力も無い男性になど、——唯でさえ先程の件で頭にキているのに、このセシリア・オルコットを抜きにして納得できませんわ!」

じゃあ何で自薦しないんだよ。アイツ、もしかしてさつき自分で代表候補だつて言ったら推薦されると思つてたのか?もしそうなら、ハッキリつてバカだなアイツ。欲しいモノがあるなら、自分で動かないと手に入らないのに。——東さんとか、最もな例だな。「大体、此処「S」学圃がこのような外れの島国などになれば、こんな辺境の地になど赴かなかつたものを……っ」

「あつ、おいそれ以上は止め——」

「なんですかの!?!人の名前を間違えるお猿さんっ!」

「おおい、空気読めイギリス淑女。お前の発言、女尊男卑以前の問題だから!代表候補生とは言え、国を背負ってるの分かってる?!国際問題だからッ!」
「っか姉さんがッ、織斑先生がめつちや見てるからッ!!」

「大体、せつかく彼のブリュンヒルデ様に教えを乞う事が出来るのに、貴方達がいるせいで、私のクラスの気品が下がりますわ!!」

「ゾクリッ、と俺の背筋が凍った。けど周りを見ても、誰一人としてその圧を感じている様子は見られなかつ——いや、箒のヤツが感じてるな。山田先生も顔が青ざめてるし、後ろをチラリと振り返ってみれば、木場のヤツも冷や汗を掻いてやがる。……意外なのは、のほほんさんも笑顔で固まっていた。」

「その圧の発生場所である織斑先生が、オルコットが続きを言うよりも速く、口を開いた。」

「——話しは分かっていたオルコット。なら織斑、木場、オルコットの3名で試合をして貰う。形式は総当たりとしよう」

「一気に捲し立てる織斑先生に、流石のオルコットも口を挟めないでいる。」

「……たくつ、唯でさえ姉さんはブリュンヒルデとか言われるの嫌いなのに、日本人の事を猿だの、辺境の地だの言うから。……今夜は姉さんの好きなモノでも作るか。」

自分達

「試合日は来週の月曜だ。異論は無いな？あつても呑み込め。——では少し早いが、授業を始めよう。山田先生」

「え？あつ、は、はい！ええつとそれでは皆さん、『ISの基礎理論』の教科書を出して下さい！」

織斑先生のプレッシャーが治まり、山田先生が慌てて授業の準備をする。そのアワアワした姿を見た生徒達は、漸くと言った感じに息を吐いていた。

……うーん。これもある種の才能か？

姉さんが絞めて、山田先生が癒す。実に飴と鞭な関係だ。どっちがどっちだかハッキリ分かる。

「——織斑。今、変な事考えたな？」

「イエー！ワタクシメハ、ナニモカンガエテオリマセン！」

何で分かるのさ。

「——ふん、まあいい。丁度良いから織斑、現在ISコアが全部で幾つあるか答えてみる」

セーフ！なんとかセーフ!!……で、ISコアだっけ？

「500です」

言った瞬間。教室の時間が止まり、次に笑い声が教室中から湧きあがった。

……俺、なんか変な事言ったか？

「えっと、織斑君？その——」

「織斑。何故その答えを言ったか、全員に分かる様に説明しろ」

山田先生が何かを言う前に、再び織斑先生が言葉が発してきた。

「何故、て。そもそも東さんが造ったコアの数は500じゃん。織斑先生だって知ってるでしょう？」

「今回だけタメ語は見逃してやる。次からはちゃんと丁寧語で話せ。——なら、何故世界中にバラ撒かれているISコアは467個なのか分かるか？」

「その数が、他国が争わず、文句も言われない最低数を満たしているからです」

詳しく説明すると、ISはISコアと腕部やPICシステムが詰まった脚部、それに加え非固定浮遊部位アンロックユニットから成っている。その為、ある程度の技術力が無ければISは完成まで成り立たないのだ。

それ故に東さんは、アメリカ・ロシア・中国といった大国や、ある一定の水準の技術レベルを満たした国の各企業、研究施設、国家に配った必要最低数のコアが、

「——467個と言う訳です。ちなみに、残りの33個は全部東さんが持っています。以前ソレ踏んづけて尻餅ついたり、肩凝った時にツボを刺激するのに丁度良いって言ってみました」

説明し終わったんだが………なんか教室内が微妙な空気だ。

「ああ、説明御苦労。——あと織斑」

「はい?」

「私はコアが500個あるとは誰にも言っていない。親しくなった友人やIS委員会にもな。教科書にも467としか記載されていないし、各国が束を狙うのも、コア目当てではなく、アイツの知識目当てだ」

「マジ?!あれっ?と言う事は俺、墓穴掘った?!」

「ああ、見事な自爆っぷりだった」

最初の方も流し読みすんじゃないかなあ!!

「——そんな訳で諸君。そのバカには期待しておくといい。ISの知識に関しては国家代表どころか、専門の技術師と同レベルだ。当然、来週の試合でも代表候補生に引けを取らない試合を見せてくれるだろう」

しかも嵌められたあああああー!!

と内心で叫ぶがもう遅い。周りからは先ほどとは違った期待の視線と、約一名の憎しみの籠った視線が俺に集中していた。

……うわあ、もうヤダ。貝の様に引き籠りてえ。



——二時限目終了

結局。二時限中ははずっと視線が集中していた。それに加え、再び他クラスや上の先輩方の見世物状態の休憩時間。

ちなみにオルコツトは、授業終了後、足早に教室を出て行った。

「ちよつと良いか」

そんな中、勇気ある少女が声を掛けて来た。

黒のロングストレートをポニーテールにし、無改造の女子生徒用制服を着た、凜とした佇まいの少女。6年振りに会う幼馴染だった。

「箒か、久しぶり」

「箒?——おお!箒じゃん!!……随分、印象が変わったなあ」

俺が言った名前に、亮斗が反応した。つかお前、何処見て言った?いや分かるけどな?!

「ああ久しぶりだな。一夏、それにりよ、亮斗。そ、それで少し良いだろうか?」

ザ・アイコンタクトスタート!

(——どうするよ?!亮斗)

(この視線の群れは精神的にクルから賛成)

(同意。——すまん、ホントは二人つきりが良かったんだろ?)

(ぼつ、俺と箒はそんなんじやねえよッ!)

(はいはい、"まだ"ね。りよーかい)

(おい!まだ話しは——)

強制カット。

「俺は良いぜ。廊下……は駄目だな。体育倉庫裏……もダメだろうな。屋上行こうぜ。」

——な?亮斗」

「くつ、後で覚えてろ一夏。——ああ、行こうぜ、箒」

「そ、そうか!では行くとしよう!」



——IS学園・校舎屋上

「いやあ、空気がうまい!」

外に出た瞬間、口から出た言葉がソレだった。

「そんなにキツかったか?」

「オイオイ箒さんよオ、『キツイか?』だと?キツイに決まってるだろ!!」

亮斗がそう言うが、お前、最初寝てたの覚えてるか?その意見には同意してやるが。なにせ全方面から女性特有の匂いがあるし、何処を向いても目が合つて、顔を赤くされながら手を振られたり、笑みを返されたりするのだ。

「お前は何も分かつてないな箒!あの視線は相当にクル!見られてるだけで物理的な重圧が産まれるなんて初めての体験だぞ!」

不本意だが束さんとの「経験」が無かつたら、立つことも出来なかつただろう。……
「息子」が起つちまうから。

「そ、そうか……」

俺達の気迫に押され、たじろいだ箒。救いの女神さまにこれ以上当たつても仕方ないので、一度深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

「ふう。改めて、久しぶりだな箒」

「だな。大体6年振りか」

「ああ、そうなる。……それにしても、行き成り代表候補生と決闘とは、——大丈夫なのか?」

「「さあ……?」」

だが対策はある。取り敢えず第三世代の専用機と、量産前提の第二世代では性能的に

差があるから、オルコットの貴族意識を煽って学園にある第二世代である『打鉄』か『ラファール・リヴァイ』に変更させて、後はまあ、自主錬でどれだけISの機動に慣れるかといった所だな。

といった事を説明すると、二人から恐ろしいモノを見る目を向けられた。

……失敬な。

「し、しかし驚いたぞつ。ニュースを見てたら、行き成りお前達二人がISを動かしたと報道された時は」

色々揉めた末に、埒が明かないから二人ともIS学園に入れて、取り敢えず問題の先送りにしよう、つて言うのが真実なんだけど、ソレを聞いたら二人の反応が面倒なので言わない。

「——特に一夏は、な」

「あー……」

そう言えば、箒も知ってたな。俺がISを嫌ってるつて。

正確に言うなら、IS自体は嫌ってないのだ。ただISに夢中になってる政府と世界と、理不尽にISデカラを振り回す人が嫌なのだ。ISに罪は無いのは分かっている。けど不確定な「世界」やら「政府」などを恨んでも切りが無い、だから結局はISを八つ当たりのように恨んでしまう。……ダメだな。自分でもよく分からん結論になりそう

だ。

「そ、そう言えば亮斗！」

そんな俺の纏う、何とも言えない空気を何とかしようとして再び箒が声を出す。

「この去年の夏の剣道大会で優勝したのだから？ 毎月発行される全国中高生スポーツ新聞で読んでぞ！」

「ん？ ああ、そう言えば箒も優勝したんだっけ？ 決勝戦は男女で別の日だったから、俺も後になって知ったぜ」

普通なら男女纏めてやれば良いのだが、こんな所でも女尊男卑の影響が出ており、子供とは言え、男と一緒にウチの娘の晴れ舞台を穢されたくない”と言ったどつかの金持ちの女性が教育委員会とスポーツ連盟に言った為、男女の決勝戦の日は別々なのだ。……全く以てアホだとしか言えない。

とは言え、俺もコレ以上気を使われないので、気持ちを切り替える。

「大会の記録映像見たけど、最後の面打ち、結構良い感じで決まったんじゃないか？ 見るこつちも、気持ち良いくらいの良い一閃だったぞ」

「み、見てくれたのか？ 私も、あの時ほど剣と一体になれた瞬間は無いと思ったな（ほ、本当は、亮斗が今も剣道を続けていてくれた事が嬉しかったからなのだが、——い、言える訳無いッ……！）」

何やら途中でブツブツと小さな声でしゃべりだした箒。だが生憎と、この距離なら耳の良い俺達には何とか聞こえるのだ。そう言えば、確かに男子の決勝戦は、女子の前に行われたんだっけか。

「(愛されてるなーオイ)」

「(う、うっせえ!!)」

亮斗をからかっていたら、急に箒が遠くを見て、

「父上達は、見てくれてただろうか……?」

ポツリと声に出した。

箒の親父さん、篠ノ之柳韻りゆういんさんと、妻であり、箒と束さんの母・珠樹たまきさん。俺と姉さ

んもかなり世話になった人達だ。

「柳韻おじさんか、……良い人だったな」

「死んでないから!」

亮斗の定番なボケに、俺と箒が突っ込む。

「冗談だ。けど、やっぱり柳韻おじさんとは全然会えないのか?」

「ああ。手紙のやり取りはしてるから元氣だと言うのは分かっているのだが、ここ数年は会ってない。……最後に会ったのは、中学に上がる時だったか」

確か『重要人物保護プログラム』だったか? 本気で狂ってるとしか言いようがないな。

保護じゃ無くて束縛だろうに。しかも、本当の重要人物である東さんには逃げられてるし。

「そう言えば一夏。その……姉さんとはよく会ってたのか？先程の話の様子だと、よく会っていた感じがするのだが？」

まあ、あの話し方だったら誰だって気付くか。

「ああ、不定期にふらりとウチに来ては、メシ食って愚痴っていくぞう。」

この前なんかエロい事——じゃ無かった。エライ事しかしてくれたしな。

あの後、朝早くに『嫌な予感がした』と言つて急遽帰つて来た姉さんに、バツチり事後を目撃された。その後、修羅神と化した姉さんに、俺とクロエはリビングで正座させられ、姉さんと東さんはガチ喧嘩。それはもう——凄かった。

箸は砕け、フォークとナイフは飛び交い、スプーンは床に突き刺さり、お玉とフライパンで音響兵器が鳴り響き、ソファはひっくり返るわ、窓は何時の間にかマジックミラーの強化ガラスになってるわ、お互いの関節を極めようとするわ、俺のシャツで血を拭うわと——アレはもう人類の頂上決戦だった。

最後は姉さんも東さんも笑いながら殴り合ってたから、問題は無いと判断して後片付けを頑張った。クロエ？一緒に風呂に入ったら、出てきた時にはグツタリしてた………フシギダナー（遠い目）。

まあ、流石にそんなことまでは話せないので、心の中に留めておく。

「俺、東さんとは全然会ってないんだが……?」

「そりやお前、東さんに嫌われてるじゃん」

主に箒が原因で。お前が箒を貰う際は、『御宅の娘さんを下さい』じゃなく、『お義姉様の妹様を下さい』になるだろうな。

「私も全然会っていないな」

「え? マジ? ……ああ、そう言えば遠目で見たとしか聞いた事なかったな」

盗撮もしているみたいだけど、ソレは言わないでおく。姉——と言うより人としての尊厳も失くさせるのはどうかと思うのと、今この瞬間だって盗み見ているかもしれないからだ。

——と言うか、何故俺があああの人のフォローをしなくちやならないんだよ。

「あの人、箒の事気に掛けてたぞ? お前の生活を滅茶苦茶にしちまった事、結構、気にしてたみたいだったしな」

「姉さんが………取り敢えず竹刀にしておくか」

「何する気だつ?!」

いやその獲物でナニするか分かるけどよ、竹刀の前は何だ?! 木刀か? それとも真剣か?!

「おっとそろそろ教室に戻るか」

「待てえええい!!」

露骨に逸らしやがったよコイツ！　：けど、6年前の俺達もこんな感じで笑いあつていたのだと言う事を思い出し、

「ははっ」

「ふふっ」

思わず笑いが込み上げ、三人同時に噴き出した。

……まあなんだ、かなり変則的で特殊すぎる学校だけど、

「これから3年間、宜しくな、箒」

「まあなんだ、……再会できたことは嬉しいぜ」

「ふふ、——ああ、宜しくな一夏、亮斗」

こうして気の置ける友人と再会できた事だけは感謝してやつても良いな。

でも授業に遅れるのはヤバいので、他二人を妨害しながら教室へと、競歩（※校則：廊下は走らない（緊急時を除く））で急いだ。

真昼の出会い

——同日、正午——

時間は少し進んで、昼休み。

3・4時限目は特に何の問題も無く終わった……のだが、4時限目が始まる前の休憩時間に、オルコットと三度目の口喧嘩になり、何故か負けたら一生小間使い——所謂奴隷宣言された。英国、つーか貴族って連中、好きだよな奴隷——させるのも、なるのも………あ、なるのはゲームの中だけか。

「よし、一狩り行こうぜ一夏！箒！」

授業終了のチャイムが鳴り、逸早く亮斗が昼食の誘い（？）をしてきた。ので、

「そこは昼食にしとけ」

「サバイバルでもするつもりか？バカ者め」

当然、ボケには全自動でツツコム俺達は反応する。

「ずっるーい篠ノ之さん！」

「織斑君！一緒に昼食でもどう?！」

「あつ！私も私も！」

「お弁当持参だけど一緒にどうですか?!」

「い、今から作るんですが、一緒に食べませんか?!」

そして、良いタイミングと言わんばかりに、クラスメイト達が乗って来た。つてまたしても最後の方凄い奴が居るんだが……?

——つて、コラコラ箒。そんな嫌そうな顔すんじゃないの……気持ち察してやれるがな、……仕方ない、フォローするか。

「悪い皆。今日の所は、俺達幼馴染組だけにしてくれないか?」

これから先も遠慮したいが。

「あつ、幼馴染なんだ」

「ああ、6年振りに会えたんだ。近況報告を兼ねてるから、居ても気まずいだけだと思うぞっ。」

亮斗が俺に合わせて言葉を重ねて来る。

「ちえつ、じゃあ仕方ないか」

「うーん、織斑君達の昔つてのも気になるけど、流石に、ねえ……?」

「……うんうん……」

話の解る娘達で有難い限りだ。……一部の子の頭の一部分が腐ってるのを除けばな。

「じゃあ行こうぜ、箒。——此処の学食って、一夏の作る物より美味いらしいぜ」

「いや、一夏の作る料理の味自体、もう記憶の彼方なのだが……」

「——ほう？ 流石ISの名の付く学校。やはり俺に喧嘩を売って来るか」

「お前はお前で、目つきが鋭くなってるぞ!？」

「一夏のより美味かったら、……クククツ、お前の持ちネタが一つ無くなるな」

「俺のより味が格下だった場合、——まずは食堂から制圧すべきだよな?」

「お前達、別れる前と全然変わってないなっ」

((((())) (小学生の時からあの性格?!))((()))

「おや? 何やら周囲が驚愕しているが、……まあ良い。取り敢えずは昼食だ。」

「味^みせてもらおうか、IS学園の実力とやらを……!」

「此処、料理学校じゃないから!」

そのまま三人で移動し、——その後ろからぞろぞろと女子の群れが付いて来て、食堂へ向かった。



「箒。お前、何食うよ?」

食券券売機の前で亮斗が箒に聞いてきた。ちなみに、券売機はタッチパネル式の最新機だ。

「私は、今日は蕎麦系だな。 稲荷セット（3個＋お新香付き）の方で」

「やつぱり米か」

「わ、悪いかつ?!」

いいえ悪くありませんとも。

「つーか凄いよな。和洋中の他にエスニックとかあるし。 ……は? 精進料理? あんのかよっ」

言いつつ、肉野菜炒め定食を購入。ちなみに金額は500円。恐らくは食材を大量購入する事で、値段を安くしてるのだと推測する。

「検索方法も国別の他に、今日のオススメ、定食系から主食別、名前検索……種類自体は少ないけど単品で頼めるし、組み合わせは自由だからバラエティは豊富だな」

亮斗はカツ丼定食（味噌汁、お新香、日替わり惣菜（小鉢））の大盛を注文した。

そして、後ろからのほんさんが券売機の前に立つ。

「カロリーも普通より低くしてあるから、深く考えなくて良いよね」

そう言って白玉あんみつにチョコパフェ、野菜ミックスジュースを注文。

「速攻デザート?!」

「?」

俺達3人のツツコミに、のほほんさんは首を傾げるだけだった。

……ゆ、勇者だなオイ!

その後、食堂のおばちゃん達からそれぞれメシを受け取り、

「あ、お姉ちゃんはつけくん! じゃあまたね、おりむーにもつぴーにりよつちゃん!」

「もつぴーは止める!」りよつちゃんは……

爆弾を落としてのほほんさんは別れ、俺達は窓際のCの字型のテーブル席に着く。

「頂きます」

手を合わせて三人同時に言う。そして肉野菜炒めを一口、

「っ! 負け——い、いやまだ負けてないっ」

「アウトだ一夏」

「素直に負けを認めておけ、一夏」

——悔しいっ!でも(舌は)感じちゃう……っ!っ!つかマジうめえ!下拵えからして

念入りにしてあるぞ、コレ?!

「ふむ。 コレは……まさか手打ちか?」

「ダシ汁が米に染みてて美味しいなコレ」

その後黙々と食べて、定食の3分の2程食べ終えた所で箸が口を開いた。

「——それで？ 何か対策はあるのか？ 亮斗、一夏」

対策？……ああ、クラス代表決定戦の事ね。……………うん、

「無いな」

亮斗と同時に、同じ言葉で返した。

「つてダメだろ！」「それダメでしょ!？」

「ん?」

声が、重なって返ってきた。

声を発した人物は二人。一人は対面に座る箒だ。そしてもう一人は、俺達が座るテーブルのすぐ近くに立っている人物。

亜麻色のショートヘアで、此方を見る瞳の色は黒色の少女。手に持つトレイには、サンドウィッチセットと少量のサラダが載っている。

「遠見?!」

その声の持ち主は、実に約2年振りに見える友人の姿があった。

「やつほー、久しぶり、二人とも。…………隣、良いかな?」

そう言いながら、件の少女——『遠見真矢』とおみまやは、空いていた箸の隣に腰を下ろした。

「誰だ?」

箒が怪訝そうに、そして不機嫌そうに俺たちに問いかけてくる。

「つと、そう言えばそっちの人とは初対面だったね。木場君とかからは良く聞くけど。

——私は遠見真矢、宜しくね」

「篠ノ之箒だ。……そ、それと、二人とは随分と親しいようだが？」

「えつと、……中学校の同級生？」

まあ間違つては無いが、一応捕捉してくか。

「1年の時、ISの適性が高かったから政府からスカウトされて、実質名前だけの幽霊生徒だ」

「ひつどーい！　ちゃんとテストとかは受けてたよ!?　——別室で一人だったけど。それに終わったらすぐにISの訓練だったから、皆と会う時間とか取れなかったけど……！」

「とまあ、寂しい青春時代を送ってた友人だ」

ん？　遠見が項垂れてやがるな。箒も同情的な目を向けてやがるし。

「ドSめ」

「うん。織斑君、なんかいじめっ子になった？」

「最近、Sっ気が出てきたよな一夏」

失礼な。俺はドSじゃない。ちよつと前に、銀髪少女の所為で責めの快感に目覚めた

ただだ。

「あ、あと日本の狙撃部門の代表候補生で、——3組のクラス代表でもあるよ」

その一言で、聞き耳は立てていた周りの生徒達の視線が、一斉に此方を向いた。

……遠見のヤツ、随分とまあ遅しくなりやがって。

「聞いたよ？ イギリスの代表候補生と自薦で被って、クラス代表の座を賭けて勝負を

挑んだんだってね」

「「捏造されてるっ!?!」」

「えっ!?!」

驚く遠見。

……いやいや、こっちが「えっ!?!」だよ！誰だ、そんな風に改竄したヤツ！

「ん、ああそっか、確かに私が知ってる二人とは性格がちよつと違う気がしたけど、

……でも、クラス代表を争ってるのは事実なんだよね？」

「ああ、そっちは本当だ。……不本意ながらな」

「推薦より、自薦の方が絶対ヤル気あるよな？」

「決まってしまったのは仕方が無かろう。それに、千冬さん——織斑先生の言葉は絶

対だ。逆らえん」

「ああ、千冬さんはねえ……」

その場の全員が沈黙した。

「そつ、そう言えば！」

不意に、遠見が声を上げて口を開く。

「さっきの話に戻るけどつ、……本当に無いの？ 幾らなんでも、いきなり代表候補生と戦うなんて無謀すぎると思うんだけど……？」

「つつてもなー。姉さん命令だし、今更止めるとは言えない状況だからなあ」

「同意。それにISを動かした以上、戦う事からは逃げられないしな」

亮斗がえらくマジに言っているが、確かに洒落にならない事態だ。何時までも姉さんの威光で防ぎきれれるほど政府もIS委員会も、それに女尊男卑を掲げるヤツ等も黙っちゃいないだろう。——前者はモルモットとして、後者は自分達の権威を脅かす存在として。

場の空気が重くなるから言わないけど。

「へえ、結構考えてるんだね——木場君」

「俺だけか?!」

「当然だ。亮斗はやれば出来るのだ」

「止める筈！ それだと普段は全然出来ないヤツみたいだと思われる！」

「ぐちそうさま」

「「食べるの早っ！」」

普通だよ。15分もあれば食えるだろ？

「まあ話しを戻すけど、やれる事だけはやつとかないな」

「何かあるのか？」

「ああ。まずはオルコットの機体データだな……コレは俺が調べてみるとして、あとは戦いの感を養う事だな——筈」

「うむ、任せろ。今日は色々忙しいから、明日からで良いか？」

「ああ」

「まあ学校始まって初日だしなあ……」

初日からイギリスの代表候補と喧嘩になるなんてありえねーから。何処の主人公だよ！

……いや、そう言えば小説が元の世界だったっけ……？ 昔、亮斗が原作だヒロインだ俺の嫁だとか言つてウザかったから聞き流したが……アイツは、この後の歴史の流れも知ってるのだろうか？

少し、聞いてみたくもある——が、

「くだらないな」

「？ 何か言ったか一夏？」

つい口から出てしまった所を亮斗に聞かれてしまったが、なんでもないと答えた。

……今更、「正史」を聞かされたってどうしようも無い。

自分を変えられる訳無いし、今から自分の性格を主人公と同じなんかに出来ない。何よりも、

「（そんな事、考えた事もなかったな……）」

俺が今生きているのは「この世界」なのだ。一々原作とか考えるのは、思考の破棄と同じだ。いくら俺の人生を流れに任せているとは言え、思考の破棄は自分を殺す事だ。

……それだけは、したくない。

「（そうだろ？ —— 円夏^{まどか}）」

腰に付けた、スマホ用のホルダーケースとは別のケース。その内の一つにそつと触る。……その中身の、欠けたブレスレットに語りかけるように。

「「一夏……?」」

「織斑君?」

他人の変化に敏感な三人が、黙した俺に声を掛けて来る。

……駄目だな。コイツらに心配かけさせるようじゃ

「何でもないさ」

そう、何でも無いただの独り言だ。

「——さてと、まだ午後の授業までは20分くらいあるし……ちよつと花摘みに行って来る」

「女子かつ!」

「サイテーだよ、織斑君」

「箒達のツツコミが正しいから、遠見の負けだな」

「何で?!」

遠見が疑問の声を上げるが、箒と亮斗の二人は首を縦にして頷き肯定していた。

「亮斗」

「任せろ一夏。——良いか? 遠見。そもそもボケとツツコミの関係とは——」

亮斗がボケとツツコミの重要性について語り始めたのを無視し、俺は席を立ち食器返却棚に置き、そのまま食堂を出る。

そのまま8分ほど早歩きして遠くにあつて、かつ女子の視線がない男子専用トイレに入り、

「……いい加減、出てきませんか?」

口を開く。その言葉に、

「ふふつ、やっぱり気付かれたてたんだ。おねーさん、素直に感心するわ」

声が返つて来る。

何時入ってきたのか判らないが、トイレの入り口付近——外側からは見られない所に、一人の女子生徒が『驚』と書かれた扇子を口元に広げて立っていた。

無改造の制服に、上着ではなくベストを着、深紅のストッキングを穿いた空色のショートヘアの女子生徒だ。ネクタイの色は黄色——2年の先輩だ。そのオツ輩……じゃなかった先輩の紅目が、尚も鋭く俺を見つめる。

……そう、この視線だ。朝、教室に入った時からずっと視られていたモノだ。「良く分かったわね？ 隠行には結構自身があつただけだ」

「居場所までは分かりませんでしたよ。ただ、育ちが特殊過ぎるんで」
 気付いたのは日頃の経験。『世界最強のIS操縦者の弟』として見られて、此処最近では『超イケメンの男子』と言う視線で視られていたから気付いたのだ。

……随分と久しぶりだな、『俺』と言う存在を見る視線は。

一挙手一投足所じゃない、人と話す時の目線・口・表情といった顔の動きから、俺の性格まで視切ろうとする観察眼だからこそ気付いたのだ。

「それで、何の御用でしょうか？ 先輩」

「ん〜特に話す用事がある訳でも無いんだけど、……ちよつと確認したかった事があつてね」

「確かめたい事、ね」

……つーかホント何者？立ってるだけに見えるのに隙が無いし、穩行が出来るとか言うし、……確かな事は研究職の人じゃないって事だな。

「まあもう大体分かったし、特に問題無さそうだから織斑先生からの案件は受諾かな……？」

「……話が全然見えないんですが」

つーか自己紹介くらいしろよ。——いや、もしかしてアレか？関わったら面倒な人か？初日からストレス溜まったり、面倒な性格の人ばつかと会つてもう一杯一杯なんだが。

「ああ、そう言えばまだ自己紹介して無かったわね、——でも今は言わないわっ！」
「言わねえのかよっ！」

何だそのフェイント！つーか、やっぱこの人色々と面倒な人だ！

「ふふっ、別に言つたつて構わないんだけどね、……この後の事を考えると、言わない方がいいと判断したのよ」

「めっちゃ思わせぶりの発言ですね。——はあ、もう良いですよ。言わないなら言わないで」

「聞きわけが良い子はおねーさん好きよ」

「納得したんじゃないや無くて、色々面倒になっただけです」

「あらあら随分と投げやりね？ そんなんじゃ人生大損しちゃうわよ？」

「余計なお世話です先輩」

「つか既に手遅れだ。ISに関わった所為で、もう普通の人生踏み外したわ!!」

「余計なお世話、ねえ。……じゃあ余計なお世話ついでに、ISの実機訓練でもつけてあげようかしら？」

「考えておきます。……そろそろ休み時間終わりますね」

時計を見れば、あと10分程で昼休みが終わる時間だった。10分前ならまだ十分あると思うが、如何せん今居る場所は教室とは距離があるだ。

「あら、もうそんな時間？ 楽しい時間ってあつという間に過ぎちゃうものなのね……時間が止まれば良いと思わない？」

「——無いですね。止まっても、過ぎてしまったモノは還りませんから。あと、先輩が

意外とエロゲ脳だつて事が良く分かりました」

「エロこそ至高よ！特に妹モノなんか最高に萌るわ！」

……言い切りやがったよ、このエロゲ先輩。

その一方、言い切った女は、背を向けて男子トイレから出て行こうとし、

「あ、そうそう」

足を止め、顔だけを此方に向ける——所謂シャフ度的なポーズを取り。

「予知してあげる。君、意外と早く私と再会する事になるわ」

そう不吉な事を言い残し、今度こそ男子トイレから出て行った。

……やっぱ I S に関わると碌な事にならないな。こんなのが 3 年間も続くのか……
ストレスで禿げないか？俺の頭？

「——こんな時は、一旦思考を放棄する事べきだな」

取り敢えず、さっさと用を足して教室に向かうか。

そして——、

「織斑に木場。お前達に急遽専用機が拝領される事になった」

五時間目の開始前に姉——織斑先生が入ってきて、ドヤ顔で爆弾発言をブチかました。

「もうヤダ……」

どうやら今日はまだ災難が続くらしい。

放課後の出会い

——同日・放課後

時刻は16時を回った所。

すでに殆どの生徒は寮に帰ったり、校内を探索する為に居ない。今居残っている生徒は、俺達を鬼気迫る勢いで写生しているヤツ等ぐらいだ。

……と言うか貴様ら、程々にしないとアイアンクローで沈めるぞ？
「疲れた」

「だな。入学初日から6時限授業とか、マジ常識外な場所だと思う」
ポロっと零れた愚痴に、亮斗が同意した。

六時限なのもそうだが、3時限目以降昼休みも含め、全部の授業・休憩時間において平穏な時間など無かった。

その中で、一番有難くない事と言えば専用機持ちになった事だ。

『専用機』

言葉通り、その人専用に調整・開発されたISの事だ。

貴重なISコア467個（もう間違えないぞ）の内、『研究用』＋『IS学園に配備さ

れている数60個』を除けば、その分だけ国や企業が保有する分が少ないのだ。その少ない中で、俺と亮斗の専用機用のコアを用意したとなれば、——俺達がISを動かせる事を知っていたとしか思えない。

……其処ら辺も、少し調べてみる必要がありそうだ。ただまあ、

「面倒だよなあ」

「ああ」

今は物凄くタイミングが悪い。なんせオルコットとクラス代表の座を賭けた勝負が行われるからだ。

オルコットがポロリと言ったが、彼女も専用機を持っているので性能面では互角になったが——普通に考えれば、まだ初心者域を出ない俺達と、年単位でIS操縦の訓練を受けたオルコットでは錬度の差がある。

その為、三時限目前の休憩時に筈に言った、『使用機を学園の訓練機である《打鉄》と《ラファール・リヴァイヴ》に限定する』と言う策は物の見事に失敗した。

だが、決まってしまったモノは仕方ないとして頭を切り替え、取り敢えずは、姉さんにスペックと武装関係のデータを貰える事にしたが、

「肝心のISを使った訓練が出来ないとは……」

と言うか姉さん、対応早すぎ。

「まだ入学したばっかだから、ISを使った訓練は許可が下りないんだってさ。出来たとしても、教員同伴^{ほじしゃ}だつてよ」

「知ってる教員二人は忙しいから無理だな。……せめて一度くらいは実機で訓練したかったな」

なんつーか、更に難易度が上がった?……俺の受験内容よりは簡単だろうけど。

「あつ! 居た! 良かった。まだ教室に居たんですな二人とも!」

二人して黄昏ていると、不意に教室の入り口から、今日知つたばかりの人物——山田先生が、此方に駆けて来た。

……オイ教師、廊下は走つちやいけないんじゃないか?……いや、急ぎの用件だったなら可なのか?つーか山田先生、ノーブラ?走る度にかなり激しく揺れてんだが?あ、三要さん?!泣きながら廊下を走つちや駄目だぞ!?怪我すんぞ!!

「——あーつと、俺達に何か用ですか?」

「あ、はい。お二人の部屋の鍵を持って来るのを忘れてしまつて」

「ん? あれ? 寮暮らしになるのは知ってますけど、確か、部屋の準備に一ヶ月くらい掛かるんじゃない?」

しかも一人部屋。ぜつてー政府の目論見が丸解りな采配だ。

いやでも、そう言えば、亮斗の奴が1週間分の下宿の準備はしとけつて言つてたな。

気になったから土日までの下着の替えと、スマホ用の充電器にその他必需品に小物、それと自作PCも纏めて荷物の傍に用意しといたが。

「え、あ、あれ？ 連絡がいつてませんでした？ 実はですね——」
「事情が変わったんだ」

山田先生がしゃべろうとした矢先、今度は姉さんが入って来た。肩にポストンバッグを掛け、片手にPCケースとスーパの袋、もう片手はMサイズのキャリーケースを引いていた。

……つーかアレ、俺のバックとPCケースじゃん。ならキャリーケースは亮斗のか？ つーかスーパの袋に、家にあった野菜類と賞味期限が近い食品とか入ってるし。

「知り合いの専門家に、朝から私と木場の家を監視させていたんだがな。予想以上に各国家や企業、研究施設の間、挙句の果てに裏関係のヤツも居たらしくてな。一ヶ月も自宅登校だと『何かしら』の問題が出ないとも限らん。だから学園理事やIS委員会に進言して、強制的ではあるがお前達二人を寮に入れる事にした。——全く、日本政府は詰めが甘い」

どうしよう。姉さんの発言が突っ込み所が多くて突っ込み難い………うん無視しよう。

「えーっと、では織斑先生。それでは一カ月先まで女子生徒と半同棲という事でしょ

うか？」

「……………不本意だが、そうならざる負えない状況になった。——くっ……………！ あのバカの所業を繰り返させないと誓ったばかりだと言うのに……………ッ！」

引いてる。周りの人が引いてるから、姉さん！つーか姉さん、まだ東さんのした事を引き摺ってんのかよ。

あ、俺？俺はまあ男だし？初めてがどうか考えてなかったし……………寧ろラッキー？——次があつたら仕留めるがな。

そもそも東さんの行動を止められるとしたら、その場に姉さんクラスの武力を持った人が居ないと阻止出来んぞ？

「そんな訳で、こつちも色々苦労した。篠ノ之が居るから一人は確定してたし、もう片方の方も……………まあ色々調査して、取り敢えず国や企業系の思惑が介入して来ない生徒を選んどいた」

もしかして、昼に会った先輩の事か？——いや、あの時の会話の内容だとなんか違う気がするな。

「ちなみに木場、お前のルームメイトが篠ノ之だ。織斑の方は……………まあ、部屋に付いたら自己紹介でもしろ。どちらも襲ってくる心配は無い。寧ろ心配なのは木場の方がな」

ソレには同意するが、俺の予想だと、ナチュラルエロの箒が極自然にエロ方面に場の空気を持って行って、それに耐え切れなくなった亮斗が箒を襲うってパターンな気がする。

「ひでえ。　つーか其処は普通、弟の方を心配するんじゃないんですか？」

その言葉に姉さんは、ふんっ、と鼻で笑い。

「コイツの事なら心配いらん。　普通に迫られたくらいじゃ手なんか出さなし、自分の立場くらい理解している」

最初が『普通』じゃなかったしな。

「それに、コイツの同室の相手にも此処の生徒会長から直接伝達が云ってる筈だ。

……アレ渡したから、寧ろ別の意味で興味を持たれるだろうがな」

ナニ渡した?! 山田先生も乾いた笑みを浮かべてるって事は、アンタも一枚噛んだな!?

「そんな訳で、いい加減受け取れ。　持つてるのも疲れた」

「あ、はい」

いやに疲れた声を出した姉さんに逆らわず、素直に荷物を受け取る。

……むう、野菜類が大半に肉もあるな。あとはバターとか、タッパーに入れた惣菜類か……今度の休みは一度家に帰って在庫の整理だな。弾とか数馬の家に送るか? 後は一騎の所だろ。あとは、ってそう言えば小鷹は地方に引っ越したんだっけ? まあさか所

あれば十分だな。

「話しは以上だ。 学園内を見て回るのも良いが門限までには寮に戻れよ？ 今の私は寮長も兼任しているからな」

「どうやら、姉さんは予想以上に役職が多いようである。そりや偶にしか帰って来ない筈だ。」

「そして姉さんは言うだけ言って、足早に教室を出て行つた。その後を引き継ぐように山田先生が説明に入つた。」

「えっと、それと申し訳ないんですが、今現在、お二人の大浴場の使用は禁止させて貰います」

「まあそれは仕方ないよな。環境からして家とは全く違うし。」

「では此方をどうぞ」

山田先生が差し出して来たのは、二つの鍵と寮の案内図だった。

……1060号室か。2階の一番奥だから、意外と覚えやすいな。

案内図を見ると、各学年ごとに寮が別れているようで、一棟全てが今年入つた新入生の学生寮らしい。大きさそれなりに、一階は食堂と大浴場とランドリー設備があり。

2、3階が生徒用の寮室である百二十室がある。

一見して金の無駄遣いな気もするが、見様によつては納得できる部分もある。

と言うのも、IS学園の入学者数は8クラスの240人前後と決まっている。それも世界各国から集まって来る——それこそ、オルコットの様な生粋のお嬢様から、宗教信のある子や腐女子まで、だ。そんな私の強い子たちが部屋内の改装をしないと思うだろうか？

恐らくNOだ。

だから入学してから卒業までの3年間。入学してから入った部屋を使って貰い、その子達が卒業したら、一気に内装を整え、次に入学して来る新入生たちが使う、と言うサイクルを行っているのだそう。学年ごとに寮が別れているので、非常に整備がし易い環境になっている。

と言うのが、山田先生の話である。

「それでは、私も職員室に戻りますね」

「ええ、わざわざ有難うございます。——やまちゃん」

「い、いえ！ 私だって先生なんですからってやまちゃん?!」

「それでも有難い事には変わりないですよ、ヤーマ」

「そ、そんなッ！ お二人のこれからの苦勞に比べたらってヤーマ?!」

「マヤちゃんやっさしーっ」

「そ、そんな事ないです、ってマヤちゃん?!」

「おっばい☆おっばい☆」

「か、体ネタは禁止ですっ!」

からかい甲斐あるなあ。それにクラスメイト達もノリが良いし。でも、あんまりからかい過ぎると駄目なので、今日の所は此処までにしておこう。

「所で山田先生。職員室に戻らなくて良いんですか?」

「ああっ! そ、それじゃあ皆さんっ、近くですけど気を付けて帰って下さいね?!」

そう言つて足早に教室を出て行つた。

……やっぱり良い先生だなあ、やまちゃん。

「さて、俺達も寮に行くか? 取り敢えず、荷物を置きたいしな」

食材も冷蔵庫に入れないといけないし。

くく少年達、移動中くく

—— I S 学園・第一学年寮

あの後、学園内の更衣室やアリーナの位置などを確認の意味も込め軽く回り、寮近くにある購買店(当たり前だが、女性用化粧品なんかが多かった)で飲み物や足りなさそうな食材を買つた後寮に着き、

「……25、と。俺の部屋は此処か」

1025号室の前で亮斗が立ち止った。

「そつちは1025か。結構中盤にあるから通り過ぎに注意だな」

「一夏は60だっけ？ 端っこだから分かり易いよな。……そう言えば夕食はどうす

んだ？」

「同居の娘と話し合って決める。なるべく早く早く食材を使い切りたい所だな」

ルームメイトが居るとなると、流石に自分勝手にキッチンを使う訳にはいかない。向こうも料理をしたかったり、朝夕と食堂で摂るかも知れないのだ。それに冷蔵庫とかの取り決めもしないといけないし。

……コレが筈だったら、ある程度はお互いの事が分かるから話もスムーズなんだがなあ。

ちなみに、食堂自体は何時でも開いており利用可能だが、食時間帯は朝夕共に6時からやっており、朝は8時、夜は9時までだそうだ。

「決まったら連絡する」

「おう。……まあ、どんな娘とルームメイトになるかは知らんが頑張れよ」

「お前も……腰痛めるなよ？」

「やらんわ!!」

別れ際に一言煽って再び歩き出し数分掛かって目的地に着く。

……さてどうするか。

鈴とかなら、ある程度知り合った後に家に遊びに行つた事があるが今回は違う。なにせこれから一ヶ月ほど同居するのだ——それも異性と。

「いや、気負い過ぎだな。普通にしてれば良いんだ——多少は気を遣うがな」

そう思いながらチャイムを鳴らし、ドアをノックしてその場で待つ。

鍵があり、事前通達があつたからといってすぐには入らない。なにせ同居相手は女性なのだ。着替え中だったり、風呂——いや備え付いてるのはシャワールームだったか？——とにかく、そう言ったエロハプニングはしたくないし、しちやダメだ。

……エロ不注意は一步間違えれば死ぬしな。

と言うか、エロハプニングが許されるのは二次元の中だけだ。

そんな訳で1分ほどその場で立っていると、ドアの前からモノが退かされる音と、鍵が開く音と、チェーンが外れる音が聞こえた——が、ドアが開く気配は無い。

「(……………コレは、確かに問題は起きないだろうなあ)」

冷や汗が出る。まず間違いなく、同居人は不機嫌だ。不快指数MAXと言い変えても良い。

そう考えていると、遠くの方で怒声が聞こえた。

「ま、待て箒！　今のは俺が悪かったからッ！　だから竹刀は止めるッツ！！」
「ううううるさいッ！　二回死ねえええええ！！」

「お前狼少女じゃないだーるとんッツ！！！！」

……あつちは問題なさそうだな。

そう思うのも束の間で、亮斗の叫びを聞いた女子達が次々と部屋から出て来ては辺りを見渡し、

「あつ！　織斑君発見！」

「え？　——あ、本当だ」

「ふむふむ、織斑君の部屋はソコか……あの部屋の人、誰だか分かる？」

「さ、さあ……？」

「良いなく、ワタシも彼と一緒にの部屋が良かったなあ。……毎日がカーニバルね！！」

「——ブハアツツ！！」

「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」

「しっかりとしなさい！　まだ夏は先なのよ!?　あ、誰かティッシュ持って来て！　10

秒ね!」

「「「「「お前が行けよ！」「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」

……こっちはこっちでカオスか。あ、あと鼻血出た娘。鼻元抑えて上向いて、首の頸

動脈辺り冷やすと止まるの早いぞ？

「おお？おりむーの部屋って、お隣さん〜？」

「ん？この声」

隣のドアが開き、聞き覚えのある（と言うか独特過ぎて記憶に残る）声が聞こえ、ひよつこりと顔を出してきたのは、のほほんさん事、布仏本音だった。着ているのは、制服と同じ感じ様な感じのダボダボのジャージだった。

「お隣はのほほんさんか」

「だね〜……それにしても、おりむーがかんちゃんと同じ部屋か〜」

「ん？ 知り合い？」

コクコクと頷き、

「幼馴染みたいなものかな〜……？」

そう言いながら此方に歩いて来て、ペタンペタンとドアを叩く。

……って叩いた音がしてねえぞ？!

「かーんちゃん、あーけーてー………寝てるのかな？」

「いや、さつきドアの鍵を内から開けてたから起きてる筈だ」

「じゃあ、なんで入らないの〜？」

「気配から察して入り難い雰囲気だったからな」

「……おりむーってへタレ……？」

この娘、意外とハツキリ物を言う性格してたんだな。

そんな内心の評価など一切気にしないのほほんさんは、笑い顔でドアを開け、体を左右に揺らしながら入っていく。

その行動に啞然としつつ、嫌な予感がするのでドアを閉め、耳を澄ます。

『かんちゃん、遊びに来たよ』

『ッ！ ほ、本音?!』

『わーお、かんちゃん凄いかツコウしてるね〜!』

『こ、コレは、シャワー浴びてたからって本音?! 引つ張らないでっ!』

言い争う声が聞こえ、その後には方に向かつて来る足跡が聞こえ。

……あ、ヤバイ。

そう思うのと同時ドアが開き、その中からのほほんさんに腕を引かれ、水色のセミロング少女が連れ出された。

ちなみに着ているモノはバスタオル一枚だった。

「(……違うな)」

水色の髪色を見て、昼に会った先輩を連想したが、ドア越しに聞いたのほほんさんと会話の様相と、実際に見て、髪長さや眼鏡の有無——それとオパールの差から別の

人物だと判断した。残念では無いのだが、その子の腕を挟んでいるのほんさんのモノと比べると、どうしても差がハッキリしてしまうのだ。

……て言うか、連れて来ちゃダメだろのほんさん。あと、強制エロ不注意は死亡フラグに入るのか？

「じゃじゃーん！ 私の幼馴染のかんちゃんです！」

「ほ、本音っ！ だ、だから引つ張らないで……！」

だが、顔の輪郭なんかは似ているので、ちよつと聞いてみようと思った……目線は少女の首から上に固定して。

「なあ」

「な、なにっ」

「行き成りで何だが、二年生に姉とか居——」

其処まで言い掛け、その先を言うのを止めた。

……地雷踏んだな、俺。

さつきまで顔を真っ赤にしてアワアワしてたのに、『姉』の一言を言った辺りから、一気に顔から血の気が失せ、どう表現して良いのか分からない表情をし、

「——！！」

右手が動いた。

……ああ、今日はやつぱ厄日だな。

そう思いつつ、変に防御態勢や回避の姿勢を取らず、体から力を抜き衝撃に備え、

——直後、乾いた音が廊下に響いた。

戦いに向けて

——木曜日・放課後

入学式以降のゴタゴタが終わり、ようやく通常運転となった教職員室の一角。其処にある机に向かって、織斑千冬は腕を組み、睨みつけるようにして目の間のディスプレイを見ていた。

「まだ悩んでいるんですか？ 先輩」

隣の席で、授業用のプリントを作成していた山田君が声を掛けてきた。

「……………先輩は止してくれ、山田先生」

「す、すみませんっ、なんて言うかつい癖で！」

擬音にすると、『ギンツ！』と音がしそうなほど、鋭い目つきで山田真耶を見る織斑千冬。その眼力にビクついた山田真耶。

そんな二人の様子に、呆れながら山田のフォローをする為に、千冬の前の席に座る女性——遠見弓子が口を挟む。

「真耶ちゃん、千冬と初めて出会った時、テンパって『お姉様』発言してたしねっ」

「いい言わないで下さいっ、遠見先生!!」

「ゴメンゴメン。でもちぶ——つと織斑先生。……ソレ、一夏君達の専用機をどちらにするか、つて倉研からの連絡でしょ？」

「ああ……」

遠見先生——いや、弓子の言葉に、声少なく返事を返した。

バカ二人がオルコットと決闘する事が決まった際、私は一つの決定をした。それが、二人に専用機を持たせる事だ。

表向きの理由は二人の安全上と発信機の意味合いを込めたモノだが、裏の理由は私的なモノ——すなわち、一夏を負かす事だ。

何を馬鹿な事を、と言うかもしれない。実際、世論アンケートで『ついこの間まで一般人だった男性と、イギリス代表候補まで上り詰めた女性とISで勝負したら』という題で聞き込みをしたら、確実に『女性が勝つ』に軍杯が上がるだろう。だが、その男性が一夏だった場合、勝率は一気に5割になる。この一週間の過し方によっては7割になるかもしれない具合だ。

本音で言うと、一夏には勝つて欲しいと思つてはいる。だが、勝てば更にバカ兔ネズミが己の願望の為に一夏を引き摺り込むだろう。

……そんな事になるくらいなら、いっそ監視付きの生活にしてやった方がまだマシだ。

『別名：モルモット生活』とも言うが、日本に居れば解剖される心配は無い。この国は良くも悪くも法を順守するからだ。まあ、精々血を抜かれたり、遺伝子又かれたり、子供が男子だった場合その子も観察と研究対象になるくらいだ。

……もしそうならなかったら、地下の『アレ』を束に頼んで起動してでも私がそうさせる。

「何か怖い事考えてない？千冬？」

「……お前の考え過ぎだ、弓子」

「(否定しないんだ)」「(否定しないんですね)」

……危ない危ない、かなり危険な思考をしていた。

話を戻すが、そんな私の思考などあのバカ兔は予想済みだったらしく、アイツお手製のＩＳが二機も表に出て来たのだ。それも、二人が入学する数日前、倉持技研の敷地内にポイ捨てされている様に。

当然、篠ノ之東製の最新機に日本政府とＩＳ委員会は喰いついたが、ＩＳコア部分に細工がしてあったらしく、倉持技研の研究者曰く『機体性能は把握できたが、武装関係は名称以外全てプロテクトされており解説不可能』と言う事だった。そのプロテクトを解除する方法が、製作者からの音声付で届いていたらしく、

『ノロマな凡夫供に判り易く説明してあげるけど、このＩＳ、いつくんか………ええつ

と、りよったん?……そう!りよっちゃんだ!りよっちゃんか、もう一度言うけどいっくんが乗ればプロテクト解けるからね!じゃあ、A b a y o F l y B y e!」

と言う事らしい。担当した技術者が「J9、って知ってるかい?」と聞いてきた時、思わず「知っている」と答えそうになったのは封印したい思い出だ。

そんな訳で、I S 委員会でも揉めたのだが、廻り廻って私に『二人をどちらに乗せるのか?』と言う判断が委ねられたのだ。

「で?どっちを乗せるの?」

「どっちとはどっちの事を聞いてるんだ?」

「どっちってそっちの事でしょう?」

「そっちとはどちらの事だ?」

「どちらってそっちの事じゃないの?」

「そっちとはだからどっちの事を——」

「ま、真面目にして下さいっ! っていうかも言うてる意味が分かりませんよ?!」

……遊び過ぎたか。

山田君からツッコミが来たので、真面目に話を進める事にする。

「それで、『白式』だっけ? 千冬の『アレ』積んでるI S」

「ああ……」

「アレ」だけでじやなく、コアのシリアルナンバーも001——つまり最初期に製作されたコアを積んでいると言うのは、関係者だけしか知らない事だ。

……言えば、余計に騒がれるだけだからな。

「性能スペック見ましたけど、現存するどのISよりも最高速度がトップでしたね。その変わり武装が一つだけでしたけど……」

『雪片式型』か。名前からして、千冬が世界最強の称号を得る事になった時に持った武装の後継兵装よね……？ 東博士が手を加えたなら何かしらのギミックが組み込んでありそうね。——取り敢えず、「重い」でしょうね」

弓子の意見には最大に同意する。

……全く、束にはずっと悩まされる。

だが、アイツには分かったたのだろう。私ならどういった選択を取るのかを。

「——そっちの方が一夏のプレッシャーになるしな——よし、これでいく」

「やっぱり」

……うるさい。アイツの思い通りになるのはかなりムカつくが、やはりこの選択しか思いつかないんだ。



——金曜・放課後

時は一日経ち、週末の放課後。

IS学園の一面にある剣道場では、二つの影が向かい合っていた。どちらも剣道着に防具を着けており、荒い息を吐きながら、お互いに正眼の構えで対立していた。

「はあはあ……ッ、ど、どうしたよ、箒？　ず、随分と息が、上がってる、ぜ……っ？」

「お、お前こそ、なッ、た、たかが、三十分程の運動で、い、息が切れる、ようではッ、代表候補に勝てる、気で、居るのかっ……？」

「いやいや、三十分も全力で動いてたら、流石に代表候補でも息が切れると思うよ？　ってゆーか、私は確実に切れる」

そんな意地なのか見栄なのか分からない激を飛ばし合う二人に、傍で見学してた少女、遠見真矢がツツコム。

何故此処にクラスの違う真矢が居るのかと言うと、ただ単純に暇だったからだ。と言うのも、彼女の所属している部活は陸上部（本人はクライミング部を設立しようとしたのだが、人が集まらなかつたため申請が却下された）なのだが、本日は自主練の為、今日送られてくると言う二人の専用機の情報が気になって仕方なかったので、こうして剣道場まで来たのだ。

それにしても、と真矢は思う。

「織斑君、遅いね……」

「うむ。千冬さんから資料貰って、亮斗に渡す為に此処に来るのなら、既に着て居てもおかしくない筈なのだが……」

自分の疑問に、休憩の為に防具を脱ぎ、此方にやって来た箒さんが同様の思いを述べた。

「多分、腹括る為に一人になってんだろうな」

そして、更にそう言いながら、同じ様に防具を脱いだ木場君がやって来る。

……む……。

思わず眉を顰めてしまった。なにせ二人の飲み物は自分の近くにあるのだ。だから二人が来るのは当然の事と言えるが、つい先ほどまで二人はかなり本気で打ち合っていたのだ。となれば、当然汗を掻く——それも大量に。

……も、もうちよつと離れての方が良かったかも——って違うよ、私!?

思考がズレたので、急いで軌道修正する。

「えつと。木場君は、織斑君がまだ来ない理由が分かるの?」

「んーあー……まあ、な。なにせ『あの』千冬さんだぞ? 一夏が大変な目に遭うのは決まりきってる」

「あー……」

何か引つかかる様な言い方だったが、最後の方の言葉に箒さん共々納得してしまつた。

仲が悪いと言う訳じゃないが、何時も織斑君の思考を先読みしたかのように先に釘を刺されてたつけ。

「さてと、オルコット戦はどうなるか知らんが、一夏だけには負けたくないし……箒、もう一本行けるか？」

「む、言ってくれる。一本どころか、学食の利用時間ギリギリまで付き合つてやるぞ？」

「クククつ、言うなあオイ。なら、もう少し付き合つて貰うとするか」

そう言つて、今度は木刀を持ち、ゆつくりとした動きで型取りをし始めた二人を見て、
「……………良いなあ」

思わずそう思つてしまう。二人の関係がちよつと羨ましかつた。何と言うか、通じ合つてる、つて感じだ。

その後、私と箒さんでISの動きなどを解説したり、IS無しでだがシミュレートしたりして時間を潰していたが、結局、織斑君は剣道場に来なかつた。



——同日・夜

既に日が変わろうとしている時間。翌日が休みと言う事もあって、まだ多くの部屋に明かりが点いている。だが、春先とは言え海に近い I S 学園は肌寒い為に誰も外に出ていない。そんな中、ペランダにただ一人、一夏は出ていた。

「ハア……」

溜息が零れた。

今日、本当は資料を貰ったら剣道場に行き、その後、オルコットの I S の事を調べるつもりでいたのだ。だが、職員室で I S の資料を貰った時に自身の乗る I S の資料を見て、——その後、気付いたら寮室に戻って夕食を大量に作っていたのだ。

そして、作った夕食も食わず、ずっと空を眺めていたのだ。

余談だが、I S 学園は空気が澄んでいるのか肉眼でも星空が良く見える。

「空、広いなあ……」

星は好きだ。中でもオリオン座は分かり易いし、その近くにはふたご座を見つげられるから尚の事好きだ。

……切欠が、あの束さんってのはアレだな。

何処が気に入られたのか知らないが、束さんには色々な事を教えて貰った。何に使えるか知らない雑学から、箒の可愛さ、歴史上の小説家の話し、箒の好物、プログラミン
グ、箒の癖、機械工学全般、箒の愛らしさ等、

……箒絡みはホンツとウザかったなあ。あのウザさが身内になるのが嫌だったから、
箒を亮斗に押し付けたんだっけ……？

まあそれはともかく、星座や宇宙に関してはかなり熱が入って教えられた。

「ま、まだ寝ない、の……？」

「ん？」

何時の間にか窓が開けられ、ヒーロキヤラ絵の半纏を羽織った更識さんに声を掛けられた。

……珍しい事もあるもんだ。

初日の夜の件は、その当日に、俺のお詫びの夕食とのほほんさんの三時間正座（強制）、
そして更識さんが俺に謝って片が付いたが、それ以降はお互い不可侵で、最低限の会話
くらいしかしていなかったのだ。

……その最低限の会話の中にアニメ議談があるのは、お互いオタク側に属しているか
らだろう。

「つと、そう言えば悪かったな。夕飯、作り過ぎちまった」

確か、それなりの量の食材をすべて使い切った記憶がある。

……と言うか、作つときながら自分自身が食べないなんて、ホント、何やってんだ俺。この数日で分かった更識さんとのほほんさん（初日以降、朝と夜は毎日来ている）の食量から判断して、明日の朝は持つが買い出しにいかないといけない。

「あ、えっと、し、仕舞うのは大変だったけど、洗いモノは私と本音のしか無いから大丈夫」

日頃の行い言うやつだろう。何時も多めに作つて後日食べたり、弁当のおかずにするからだ。

……後でちゃんと把握しておこう。

「——今日はもう寝るのか？」

「う、ううん。まだ寝ない、けど……貴方は……？」

……この子、また寝落ちるまでプログラミンクする気か？あんまり根を詰めたりしても良いモノが出来る訳じゃないんだがなっと、今考えるのはこの子の事じゃなかった。

ズレた思考を戻し、視線を空に向け、

「俺も、まだ起きてるかな」

「そう。……ねえ、聞いても良い……？」

今日は本当、珍しい事だ、と思った。視線を夜の空から少女に向け、次に口から出る

言葉を待つ。

そして、少し言い淀んだ後、少女が口を開く。

「お姉さんの影を背負うって、辛くない……？」

「……は？」

考えてもいなかった事を言われ、数秒だけ気の抜けた表情を表に出してしまった。ま
ず初めに思った事は、どうして知っているのかと考えたが、

……そう言えば、彼女の専用機も倉持技研のだけ……？

資料を貰う時に聞いたつつーか聞かされた事だが、彼女の I S 《打鉄式》は倉持技
研が開発に従事していたのだが、俺と亮斗の I S を解析する為に人員が割かれ、その為
に彼女の I S は未完成のまま放置されたのだと言う。そして更識さんは、その I S を自
分の手で完成させる為に引き取ったそうだ——一人で I S を作り上げたお姉さんに
対抗して。

……全部のほほんさんに聞いたことだがな。て言うか、一人で作ったなんて絶対プロ
パガンダだろう。

随分、お節介な幼馴染を持つてるな、と思うのと同時に、似ている、と内心で思う。性
格と性別は姉弟・姉妹と違うが、その境遇が似通ってるのだ。

……それにしても、姉の影、か。

正確には、姉さんでは無く『織斑千冬』の影。知ってるだけでも『IS界の女傑』『世界最強のIS操縦者』『ブリュンヒルデ』『超人』『劍神』『現代版抜刀齋』『女武者』『取り敢えず剣、持たしとけ』『更木剣八(♀)』『銃弾斬った人』『もうあの人一人で良いんじゃない?』と様々だ……後半は2chスレのだが、確かに背負うとなると重い。重い
が――、

「俺は、別に背負ってる気は無いんだが……」

「じゃあ、何でお姉さんの決めた事に素直に従うの……?　なんか、自分の人生をお姉さんに委ねているみたい。――ううん、違う。　なんか、自分の意思を持たない様にしているみたい」

思わず眼の前の少女を見つめてしまった。

観察眼が優れてるってレベルじゃない。そういう方面の素質と特殊な訓練が必要な筈だ。そして、一つの事実気付く。

……建前は意味無いな。

本音だ。のほほんさんの事じゃなく、本心での言葉じゃなきや目の前の少女は納得しないだろう。そう思うと、何だか諦めにも似た感情が湧いてくる。

背を手すりに預け、一息吐き、

「――なんていうかさ、怖いんだ」

こうして、己の内を吐きだすのは何時以来だろう。

……思い返さなきや分かんないくらいって事か。

そう思いながら、前世の事とかはボカして口を開く。

「子供の頃からさ、俺、精神的に結構成熟してたんだ。あまり泣かなかつたし、我が儘言わなかつたし、姉さん達が母さんたちに甘えてた時も、母さん達の負担になるかもしれないって思ってたさ、寧ろ、よく家事の手伝いとかしてたな」

「『達』……?」

「……妹が、居たんだ。正確には双子の妹。アイツは姉さんにベツタリで、俺に対しては、お姉さんぶりたかつたみたいだったけどな」

「居たって事は……」

「——ああ、今はもう、居ない。——居なく、なつちまつたんだ」

言葉にして吐露する事で、何故、東さんがあんな賭けを持ちかけたのか、漸く分つた。「妹が居なくなつた後、俺、精神的に不安定になつてさ」

何で二度目の人生を歩んでる俺が生きて、未来が広がつてる円夏が死ななきやならないんだ、と。そう思いながら部屋に引き籠り。その内、

「自分が死ねばよかつた、自分なんか壊れてしまえって考え始めて、自分を苛め続けたんだ」

食事の量は普通だが、体を動かす量を多くした。なにせ、親も一緒に居なくなつたのだ。姉さんは家事スキルが殆ど無かつたから、必然、家事は俺が中心になつた。炊事、洗濯、掃除、買い出し……は姉さんも手伝つてくれたな。他に家計簿、裁縫、役所への提出書類等々。それと並行して学校にもちゃんと通つていた。

まあ、そんな事を、まだ体が出来て無い幼少の肉体で行つたのだ。当然、ガタはすぐに来た。

「2週間だつたな。夕食の支度をしてる時に、突然体に力が入らなくなつてブツ倒れたんだけ……それでも、コンロの火を消したのは流石としか言いようがないが」

……あの家は姉さんの帰る場所だし。流石に、姉さんの帰つて来る家を消し炭にはしたくなかつたんだな、俺。

「それで……?」

「姉さんに叩かれて、泣かれた」

同時、初めて姉さんは「弱い」のだと理解した。年上だとしても、二度目の人生の俺と違つて人生経験は少なく、心が成熟してない子供なのだと。なにせ一度に両親と妹を失つたのだ。さらに其処へ来て、俺が無茶をしてブツ倒れるという事態だ。

泣かれ、叩かれ、また泣かれた。それで降、俺は「自分」を心の奥に閉じ込めた。

その後、束さんと出会い、箒、亮斗と出逢つて……どう言う心境の変化かしらんが、外

道要素が入った気がするが、それでも、

「自分なんか持たないって決めたんだ」

「貴方は、それで良いの……?」

その視線は、俺に何かを問いかけているようで、その実、俺にナニかを重ねているように見え――、

……ああ、そうか。この子、俺と同じ様な事を考えてたのか。

自分と俺の境遇が似ている事を、彼女も気にしていたのだろう。俺がどういう行動を取るかを見たかったのだ。そして、多分俺の取ろうとする行動が彼女の視線に触れたのだ。

……恐らくは、自分の意思で動かない事かな……?」

自分の選択。自分らしく。長らくしていなかった事かも知れない。今までは姉さんに迷惑が掛からない様、姉さんの手を煩わせないよう心掛けていた。前世の記憶があるからこそ、まだ中学上がったくらいの年齢で、子供一人を養うと言う事がかなりの無茶だと言う事が分かる。そして、俺自身、

……姉さんの世話をする事で、円夏が居ない事を紛らわせようとしていた。

バカな選択だ、と内心苦笑する。円夏と姉さんを重ねようとしてるなんて、その人自身を見ていない事だ。

『「自分」なんか持たない』って決めたのになあ』

今までの自分を否定する。それもまた壊す事と同意だ。そして、それは同時に、後戻り出来ない道に進む事になる。

……例えて言うと『男の人生の墓場』みたいなッ！

「あ、あのっ……!」

「ん? 何だ?」

呼ばれたので、強制的に意識を戻す。

「だったら、私に見せて。お姉さんの意思に従わない貴方のやり方を」

今日、何度目かの呆けた顔を更識さんに見せた。そして、言われた事を理解し、

「——ははっ」

思わず苦笑が漏れた。

「な、なにっ……?」

「ああ、悪い。ちよつと色々考えてたのが可笑しくてな」

こうお願いされちや断れない。覚悟はまだ中途半端だが、取り敢えず腹は括れた。

……姉さんは大丈夫。もう立場もあるし、俺と言う重荷が取ればもつと好きな事を

やっていける。なら自分の選択を、自分自身の選択をしよう。

……負けるのは、やっぱヤダよな。

オルコットにも、亮斗にもだ。ならどうすれば勝ちに行けるかを考え、

「なあ、更識さん」

「な、なに……？」

黙っていた俺が急に話したからか、何時もの様にビクつきながらも答えが返って来る。

「IS学園の生徒会長って、代々一番強い人が務めるんだつたよな？」

姉さんが第1期生だからか、何時の間にかそんなルールが出来たらしい。

「そ、そうだけど、——貴方、まさか……！」

少女の驚愕の視線を受けながらも、俺は続きを言う。

「強くなりたいなら、強いヤツに教わるのが一番のコツだろう？」

実践式なら尚の事良い。何故ならISでの訓練も出来るかもしれないのだ。

「つと、更識さんにはちよつと世話になったな。手伝いが欲しかったら何時でも貸す

ぞ……しばらく世話になるしな」

「へ？ わ、私にも……？」

「おう」

……この子、確か未完成とはいえ専用機を持つてるんだよなあ。

思いついたプログラムとか、やっぱり試してみないとどう動作するのか分からない

し。

……ISを組み立てるってのも面白そうだな。

ちよつとだけ、この学園に来て良かったと思った。

後に聞いた事だが、この時の俺はイイ物見つけたような表情をしていたそう。

戦いに向けて2

——翌日、早朝

朝食を摂り、何時もの様に整備室へと向かう更識さんと、それに付いて行くのほほんさんと別れ、俺は目的の場所へと歩く。

「つと、此処か」

目の前にはちよつと豪華な扉——生徒会室の扉だ。場所は更識さんに聞いたのだが、教えてくれなかったので、のほほんさんに聞いた。

……まさか、のほほんさんが生徒会役員だったとは……。

失礼と言つちやなんだが、役に立ってるのか心配になった。だって、今日も会長は仕事しているのに、あの子だけのんびりと朝食食った後、更識さんに付いてつたし。

「まあ、いつか」

今は他人を気にしていられる余裕は無いのだ。

ドアをノックし、向こう側から女性の声（まあ当たり前なのだが）で入室許可が下りる。

入ってまず目に入ったのが、二人の女子生徒だった。どちらも無改造の制服を着てお

り。一人は正面の一番大きい目の机に座った、水色の外はねしたシヨートの女性——と言
うか、入学初日に出会った更識さん似の妹ジャンル系エロゲ先輩。もう一人は黒髪の三
つ編みで、メガネを掛けた女子生徒。リボンの色から3年生だと察する。

後者の人物は、見た目から仕事が出来る印象の通り淡々と書類仕事をしているのに対
し、もう一人の女子生徒は、結構書類が溜まっており——なんつーか、真っ白に燃
え尽きていた。

……取り敢えず、話を通じそうな人。

「初めまして生徒会長。織斑一夏です」

そう言って、黒髪の方に話しかける。

「はい。はじめまして、織斑一夏さん。貴方の事は妹から良く聞きます」

「妹、と言うと……?」

「本音の事です。私は布のほとけ虚うつろ、生徒会会計をしております。——それと、会長はあ

ちらです。……先日お会いになられたかと」

「ですよー」

一類の望みを賭けたが、どうやら座り間違えじゃないらしい。

……と言うか、俺の周りの姉系は全員優秀だな。

姉さんに始まり、束さんも性格はアレだが天才だし、のほほんさんのお姉さんに、遠

見の姉さんの弓子さんもI S学園に勤めてたっけ。

弓子さんだけなんかシヨボイが、努めている場所がI S学園だ。普通の高校教員とはレベルが違う。

「まあそれはさて置き」——布仏先輩

「下の名前で構いませんよ。それで、何でしょう?」

堅苦しいかと思ったら、意外と柔軟な思考の持ち主だった。今度から敬意を込めて虚先輩と呼ぼう。

「会長、なんで腐ってるんですか?」

さつきから椅子に座って、虚空を見つめて呆けている。入学初日の時とはえらい違いだ。生気も、エロ気も、胡散臭ささえ全く感じない。

「——アレは、5日前の出来事でした」

「行き成り回想?! しかも入学初日かッ?!」

急に昔語り口調になった虚先輩に即座に突っ込んだが、語りは止まらなかった。



——5日前・生徒会室

「だ、大丈夫かしら虚ちゃん?! 服と髪は乱れてない?! あっ! あと部屋も綺麗!?

簪ちゃんに、『お姉ちゃんなのに整理整頓も出来ないなんて……』って呆れた視線で見られたりしないかしら!? そ、それにかかかか簪ちゃんが埃とか吸って咳込んだりしないかしら?!」

「大丈夫ですよ、お嬢様。 何処も乱れてませんし、生徒会室も午前から授業サボタージユして、隅から隅まで綺麗にしたではありませんか——IS使つて。 埃取りから、水拭き、空拭き、更にはワックス掛けまで。 ……正直言つて、幾らなんでも職権乱用だと思えます」

今、私の前で生徒会長席に座っているお嬢様は、今までに見た事が無い程緊張していた。まあそれはその筈で、数年も絶縁状態だった妹様と、生徒会長と生徒としてではあるが話しをするのだ。

と、その時、部屋のドアがノックされた。

……来ましたか。

「お嬢様」

「何!? ISの事なら大丈夫よ! 簪ちゃんの事なら私にとつては最重要事項、私〓生徒会長、だから問題ないわ! ——あつ、そろそろ簪ちゃんが来るから、茶を淹れといて!」

どうやらノックに気付いていないらしい。取り敢えず、お嬢様の状態を落ち着かせた

方がいいと判断し問い掛けに応じる。

「分かりました。それとお嬢——いえ、会長」

「何?! 今最終確認の最中なんだけどつ!!」

「更識さんが、既にお目見えになっています」

「へっ……?」

会話のドツチボールが早すぎて声を掛けるタイミングを逃し、ドアを開けたまま止まっていた妹様とお嬢様の視線がぶつかり、

「~~~~つ、や、やり直し! もう一回入室から!!」

「え? あ、うん……」

言われ、一度退出しドアを閉めた。それと同時、溜息が出た、私から。

……本当に、昔から妹様が絡むとダメダメになりますね。

そう思っていると、再びドアがノックされた。

「——どうぞ。開いてるわよ」

「失礼します」

お嬢様——否、会長の入室許可があり、再び妹様が入って来る。その目は、先ほどよりも冷めていた。

……ああ、また溝が広く、深く……!!

「——1年4組所属、更識簪です。行き成りの呼び出しですが、私に何か用でしょうか？」

妹様が他人行儀で話したら、今度はお嬢様が笑みを浮かべながら固まった。

そのまま数秒だろうか、それとも数分だろうか？ただ沈黙だけが部屋を支配していた。その状況を破る為、私が一度、二人の意識をこちらに向けさせる。

「んんっ、——会長」

「っ！……ええ、ごめんなさいね？ 入学初日から呼び出してしまつて」

「いえ。……それで、何の御用でしょうか？」

漸くといった感じで会話が進む。

「かんざ——更識さんと呼んだのは他でもないわ。貴方のルームメイトに関してよ」

「ルームメイト？ それがどうし——」

ました、と妹様が言い掛け、止まった。今年は例外が二名入学している事を思い出したのだろう。

私的意見としては異性の方をルームメイトにする事には反対なのだが、「更識」として考えると、登校時と下校時に人員を裂かなくてはいけなくなる為、他の場所のカバーが効かなくなる恐れがあるのだ。

……幾ら「更識」でも、限界はあります。

だからこそ、すぐにでも寮に入って貰う必要があるのだが、彼等の分の部屋がまだ出て無いのだ。

……見通しが悪いのか、動くのが早いのか、——その両方ですね多分。

「——私のルームメイトは、どちらですか？」

やはり妹様は賢い。即座に、この場で納得できないと言つても無意味だと理解したの
だろう。

……それが、悲しい事でもありません。

別の言い方をすれば、諦めが早いとも言える事だ。

「理解が早くて結構。貴女のルームメイトとなるのは、織斑一夏君よ」

「つ……………話しは、以上ですか？ 私はこれからISの整備がありますので失礼した
のですが」

嘘だ、と内心で声にする。

まだ妹様のISは完成していない。それに、自分のISが未完成のままの原因である
人物と一緒に暮らす事になるなど、ハッキリ言つて酷い話した。

……それもこれも、『更識』に産まれた故、でしょうか……。

「いえ、もう一つ話があるわ」

「え？」

……え？

妹様と同じタイミングで、私も驚いた。お嬢様の事だから、言いたい事を結局言えず終わるのかと思っていたのだ。

私と妹様が見つめる中、お嬢様は口元に扇子を広げた。其処には『傾聴』と表示されていた。この扇子、ただの扇子では無く、第三世代のイメージ・インターフフェイス技術を使ったマクロサイズディスプレイの扇子だ。無駄に凄い技術を使った作品である。

……と言いますか、それが妹様の感情を逆撫でする事に気付いているのでしょうか……？

お嬢様は気付いてないのか、目の前の妹様の表情がかなり蒼褪めている事に気付かず、机の上に置かれたノートPCを操作し、

「勿論、簪ちゃんの損にはならないわ。——コレ、見なさい」

そう言って、目の前のノートパソコンを妹様の方に向けた。私も気になったので、机を回り妹様の後ろに立ち、ディスプレイを覗く。

どうやら一つのアプリが起動中の様で、其の画面だけが表示されており、ソコに映っていたタイトルは、

『刀砲紅魔館 Revolution』？』

刀砲。確か、お嬢様が此処最近、エロゲそつちのけでプレイしているゲームだった気

がする。

だが、これがどうしたのかと思う前に、妹様が飛び付くようにノートPCを覗きこむ。

「こ、コレッ！ 『刀砲Project』の完成未定の作品……！」

「ついでに、調べた限りでの情報を纏めたヤツが、コレね」

一冊の薄い冊子が差し出され、妹様が奪い取る様に受け取り中身を確認する。私も後ろに居るので、自然と見る事になり、

……なんですかコレ。全ステージ3Dに、《後付装備》の換装システム？それにこの主人公の『博麗千』とサブ主人公の『ター姉さん』って名前、どう考えても織斑教員と篠ノ之博士ですよ？と言いますかこのゲーム、明らかに最新の容量が大きい奴じゃないととともにプレイ出来ないじゃないですか。

「マルチ・ロックオンシステム……！」

小声で、妹様が驚愕の声が聞こえた。

……そう言えば、妹様が設計した《打鉄式式》には、誘導ミサイルが搭載される予定でしたね。

そして、ゲームとは言え3D——つまり三次元だ。このプログラムを元にすれば、式式の武装開発が進展するだろう。

「ど、どうしてお姉ちゃんが——」

言つて、妹様が止まった。

……まさか、お姉と言つてしまった事に気付いて……？

どんだけ頑固なのだ、この姉妹。

もう一度咳払いでもして話しを進めようと動いた時、妹様が首を横に振り、少し思案し、

『刀砲Project』ZUN主代理人「IKA」……」

一つの名前を口にだす。

……このアプリの製作者でしょうか……？

何ともツツコミ所がある名前だ。ZUN主代理、つまりはZUN主と言うのが本当の製作者か企画者なのだろう。そして今この場に出した事と、『損にはならない』と言つた事から、IKAとは織斑一夏さんの事を差していると判断出来る。

その予想は間違つていなかったらしく、お嬢様が再び扇子を開いた時に、その表面には『正☆解♪』と書かれていた。

「織斑先生からは、『扱き使つて良いぞ。寧ろ余計な事など考える暇など与えさせるな！』つて、完全パシリ宣言も貰つてるわよん♪」

……声真似、上手いですねお嬢様。

いや、お嬢様の声真似が上手いとかはどうでも良いが、織斑先生の発言は本当に仲が

良いのか分からない。厳しい事は知っていたが、まさか身内にまで厳しいとは思っていませんでした。

……ただ、手伝いを妹様が望むとは思えません。

なにせ、お嬢様が一人でＩＳを制作したと情報信じ、お嬢様に追い付こうと自らも一人でＩＳを作ろうとしている方なのだ。

——だが、そんな彼女の想いを、

「簪ちゃん」

……ダメですお嬢様……っ！

いけない、と思った。長年の付き合いから、この先何を言うかが予想出来てしまった。

「他人を頼るのは、悪い事じゃないわよ？」

お嬢様は呆気なく崩した。

……最悪ですよ、お嬢様。その発言は最悪すぎます。

「——なん、で……」

声が漏れる。

声を上げたのは目の前に居る妹様だ。普段はただどどしい感じで話すのとは違い、明らかに怒気と苛立ち、それと哀しみを含んだ声だ。

「なんで、そんな事言うの……っ?!」

声を上げて、目の前に居る人を——姉を糾弾する。

「誰にも頼らず、一人でISを組んだお姉ちゃんにそんな事言える資格、ない!! 私の、——私がやろうとしてる事に、口を出さないで……ッ!」

妹様の頬を伝っているモノがある事に気付く。涙だ。だがソレを拭おうとせず、最後の一言を、

「——私の事なんか、放って置いてッ!」

言った。言いきり、静まりかえった生徒会室の中で、妹様の荒い息だけが聞える。

そんな中、私は妹様の前に居る人物を見た。

「あ、つと、その、か——」

お嬢様は、悲愴な顔を妹様に向けていた。

「ッ、……失礼しますっ」

妹様が踵を返し、一目散にドアに向かって足早に去っていく。

……あ。

「妹様……!」

「ごめ、んなさい、虚さん。……ルームメイトの件は了解しましたと、お——生徒会長に伝えて下さい」

呼び止めるものの、それだけ告げると、素早くドアを開け足早に部屋を出て行った。

「……………いえ、そうではなくて、お嬢様のノートPCを持って行かないで下さい、と言おうとしたのですが……」

私の声は、虚しく室内に響いただけだった。

溜息を一つ吐く。

お嬢様は天才だ。だが、その天才であるが故に、物事の判断基準が高く。逆に常人の考えが、思考が、気持ちに分からない。

……全くお嬢様は。人心把握は優秀な筈なのですが……。

また一つ溜息を吐き、何時までもこうしていられないと気を取り直し、会計用の机に向かい、腰掛ける。

「——これで宜しかったのですか、お嬢様」

「……………」

お嬢様から答えは返って来なかったが、沈黙を了承と受け止め話を続けた。

「確かにこれから先、妹様が社会に出て行けば、お嬢様に頼ることなど出来なくなるのは必然です。ですから、敢えて反骨心を煽って成長させるやり方は理解できません。——

——ですが、もう少し本音——あつ、妹の事じゃない方です——で語る事もまた、視野を広げる切っ掛けにもなります」

「……………」

「会長の《ミステリアス・レイディ》も、元の I S とネット内で有名だったプログラマー、それと開発スタッフのご協力があつて完成まで漕ぎ着けたと言う事実。お嬢様が御一人で I S を作り上げたと言うのは、ロシア政府のプロパガンダと言う事ぐらい話しても宜しかったのでは……?」

そう、幾ら頭が良かったと言って、一から何かを創り出すのは数年の歳月が必要だ。《ミステリアス・レイディ》を造り上げるのだつて半年は掛かったのだ。それも、元の機体にはそれほど手を加えず、《ミステリアス・レイディ》の特殊武器『アクア・クリスタル』の製作だけで、だ。

「……………」

「……………会長?」

反応が無いので気になったので、正面に周り、

「お嬢様……………!」

悟った。

「気を失ってやがる…………ツ」

私の説教時間を返せと言いたくなくなった。



——時は戻り現在

「と、こんな事があつた訳です」

「自業自得じゃねーか、アホらしい」

率直な感想を言つたら、すぐ近くで胸を抑えのけ反る仕草をした“物体”があつたが、軽く無視した。

……すつつつげえくだらねえ……っ！

本当にこんなのに教えを請うて良いのか本気で悩む。だが、実力で言えば本物だろう。

……時間もあまり無い事だし、さっさと交渉に入るか。

決断した後は行動だ。幾つか手段は考えたが、まず、現在無気力な人間にヤル気を出させる方法を考え、——携帯を即座に取り出す。

……殺る気を起こさせる方法が先に浮かんだ俺、もうある意味ダメかもしれないなあ。

『——は、はいっ、さ、更識、ですっ』

「——あ、更識さん？今良い……？」

数度のコールで電話の先、更識さんに繋がる。声が聞こえた瞬間、妹ジャンル系エロ

ゲ生徒会長先輩の肩がピクリと震え、此方に意識が向いたのを感じられた。

『う、うん……えっと、お——生徒会長さんとの、交渉？は上手くいったの？』

生徒会長と言われた瞬間、件の人物は石の様に固まった。

……. どんだけシスコンなんだ、この人。

「交渉はこれからだけど、初っ端最終プランで行くから協力してくれ」

『え……でも、そのプランって危険だからやらないじゃ……』

やっぱりこの子、良い子だ。出来れば周りに染まらないで欲しいくらいに。

「色々面倒になったから手っ取り早くいく、——やってくれ」

『……. 分かった』

「頼んだ」

妹ジャンル系エロゲ生徒会長先輩の前に立ち、スピーカーをONにする。そして、俺の携帯から、更識さんに事前に頼んだセリフが聞こえてくる。

『い、一度しか言わないよお姉ちゃんっ、わ、わわ私、お、い、一夏君と付き合う事にしたから!!』

「っ——!!」

言い終わった所で通話を切り、すぐさまバックステップ。——先ほどまであった俺の後頭部の場所に、意識どころか生も刈り取らんとする断刀から逃れた。

「——へえ、意外と出来るのね織斑君」

「……………」

踵だけを伸ばした状態でしゃがみ込んでいる妹ジャンル系エロゲ生徒会長先輩——否、強者からの、淡淡とした評価に言葉少なく答える。

目の前の人がやったのは単純で、机の端を持ち上げる様に握り、椅子から勢いよく立ち、後ろに下がる椅子を蹴り、そのまま後転しながら踵落としだ。それを一瞬の内に行った。見切れたのは、俺に向かって振り下ろされる踵だけだ。それ以外の行動は全く見えなかった。

……………本気だったら、最後の踵落としても見きれなかったな。

様は「試し」だ。

「嘘とは言え、簪ちゃんと付き合っているなんてほざいた事は見逃してあげる。避けられたのは事実だしね。——それじゃあ対価と希望を聴こうかしら」

「言ったのは更識さんなんだが」

「簪ちゃんがそんな事言う筈ないじゃない！あれは強要されてたのよ!!」

……………うわ、マジうぜえ。

……………こういう時、変に反論しない方が良いと判断。さっさと本題に入る事にした。

「対価は生徒会の雑用係になる事、俺の希望は——取り敢えずアンタとサシで戦えるく

らいだ」

要するに、生徒会には入らないが雑用係として手伝う代わりに、ちよつくら強くしてくれ、と言う事だ。

それを聴いた妹ジャンル系エロゲ生徒会長先輩は、面白いと言わんばかりの笑み見せ、

「随分、思い切った事言うじゃない。5日前に会った時と比べてかなりの変化。寧ろ変態と言つても言い精神的変化」

「アンタの妹さんのお陰でね——ああ、気に入った事は認めるが、付き合いたいとかそんな事はないから安心しろ」

眩しいのだ。決定的に住む世界が違う。妹系だから頼られたら答えるけど、求められたら断る——そんな関係だろう。

「良いわ。その契約、受けましょう。——但し、半端は許さないわ。三日後の戦い勝ちなさい。例え勝ち目が無くても勝ちに行きなさい。それなら私は全力を持って答えるわ」

「上等。元々負けるのは嫌いなんだ。——で、まず何をするよ?」
「そうねえ……」

宙を見つめ、数秒して考えを纏めると、妹ジャンル系エロゲ生徒会長先輩師は笑顔で、「取り敢えず、戦いの勘を養いましょうか。具体的な訓練法を言うと、五時間位私と戦い

ましよう——肉体言語で」

死刑宣告を言い放った。

「ええ、コレは決して簪ちゃんと電話越しでも話し合ってるの事の嫉妬でも簪ちゃんと同室だって事でも一瞬でも簪ちゃんとキヤツキヤウフフな関係を想像した憎悪でもないわ！戦闘訓練、戦闘訓練よ……！」

……早まったな、俺。

亮斗 v s セシリア (上)

——月曜

時は既に放課後。本日はオルコットとクラス代表を決める為、6時限目の終業チャイムが鳴ると同時に、真っ直ぐに第三アリーナに入り、更衣室でISスーツに着替え、

「遅いー」「遅いな」「遅過ぎる」

ピットで待ち惚けを喰らっていた。どれくらいかと言うと、箒が呟いた一言に使って三段変化するくらいに。

理由は極単純、ISの搬入が遅れているのだ。

まあ、その間、俺はIS《白式》にインストールするプログラムの最終確認をし、亮斗は週刊ジヤムプを読み、箒は仁王立ちで腕を組んで静かに苛立っていた。

……試合しない箒が苛立ってるってのもなあ。普通、立場が逆の状況だろうに。つか眠い。

この二日の総計睡眠時間が5時間しかなかったからだ。まあ、それでも眠る気が起きないのは、内心、この後のイベントを楽しみにしてたからだろう。

……眠いのには眠気が無いとはこれ如何に。

『お、お待たせしました二人とも!』

「つと、よーやくか」

「——後は実戦で、だな」

山田先生の声がピット内に響き、目の前のシャッターが開き始め、其処から似た様な形の、しかし非固定浮遊武装の位置が、それぞれ両肩と背部の二機が姿を現す。

『コレが御二人の専用機、木場君の専用機《黒式》と織斑君の《白式》です!』

「やっぱ似た名前だよなあ?」

「お前の機体の名前考えるのが面倒だったんだろ、束さんが」

俺の言葉に二人が、あり得る、と眩きながら頭を押さえる。

と、今度は姉さんの声がスピーカーから聞こえて来た。

『何、頭を抱えている。 さっさと纏え。——全く、こんな余興にアリーナを貸し切ったんだ。くだらんやり取りで時間を潰すなバカども。まずは木場からだ』

「ういース!」

そう言つて亮斗が《黒式》の前に立ち、その身にISを纏う。

「ど、どうだ? 亮斗?」

「んー、なんつーか、《打鉄》と比べると感覚の広がりがいらい違いだな」

そうだろうな、と《白式》の前に立ちながら俺はそう心の中で言う。

不特定多数の人間使い、誰もが平均的に扱えるのが《打鉄》や《ラファール・リヴァイヴ》と言った量産前提の機体なのに対し、専用機とは、文字通りその人専用調整された機体なのだ。一応前者の機体も、乗る人に合わせてのバランスや出力系の調整は出来るが、専用機と比べたら雲泥の差だ。

……と言うのが、エロゲ好き会長から教えられた事だったな。

この二日の事を振り返っている間に俺もISを纏っていた。無数のパネルが表示される中、視線は武装覧に向けられ——ズキリ、と胸の中心が痛んだ。

……雪片式型。雪片、か。

『二人とも装着したな』

管制室からの姉さんの声で、意識を自身の内から外へと向ける。

「ウツスー」「はい」

今は姉さんの影を気にする時じゃない。今は、目の前の戦いに集中するべきだ。

『事前に伝えてあった通り、まずは木場からだ。その後、10分の休憩を取り織斑がオルコットと戦う。そして最後に織斑と木場の計三戦を予定している。何か質問は？ あつても時間が無いから受け付けんがな』

「二(じ)やあなんで聞いた?!」

『では準備に掛かれ。篠ノ之は……今回だけサービスだ。そのまま管制室まで来

い。織斑は公平を期す為、更衣室で待機だ』

姉さんの言葉を合図に、俺達はそれぞれの場所へと移動し始めた。



「負ける事など許さんぞ、亮斗！」

箒の遠回しな声援が聞こえる。

「へいへい、この一週間の訓練を無駄にするような試合は見せねえよ」

「むっ、とと当然だ！」

「はは、……じゃあ先、行かせてもらうぜ、一夏」

「おう、ボロ負けして来い」

「言つてろ！」

そう言い、射出用カタパルトに足を運ぶ事に、俺木場亮斗は感慨深い気持ちになる。

……始まる。

約十六年。この世界で自分という存在を思い出してから約十三年。漸くと言った感じだ。

自分は転生者だ。それも、俗に言う『神様転生』と言うヤツ。死んだ事に色々悩んだ

が、その事も『インフイニツト・ストラトス』^{世界}へ転生させてくれると言う事と、転生特典をくれると言う事で割りきる事にした。

俺が願った『特典』は2つ。

一つは『原作に関わって行ける事』。これなら、あの天災にも怪しまずにISに乗れると思つたからだ。それに、原作の女性キャラは美女・美少女ばかりだし、多少性格に難があつても、それさえ何とか出来れば良い女になるからだ。

もう一つは『戦いに関する才能』。コレは文字通り、戦いに関する事の才能だ。

初めは『身体能力強化』とか『オリジナルIS』とか考えたのだが、もともと完璧主人公とか嫌いな性質だし、幾ら女好きだとしても、篠ノ之束あの性格は遠慮したかったので、変に目を付けられないこの二つにした。

それに、一から子供をやり直すなら、努力して体を鍛え、強くなる方が自分の好みだったからだ。だから二つ目の特典は、言わば“手に入らないモノ”を補う感じで頼んだ。

そして転生。

初めは色々苦勞した。大人と子供では思考の違いもあるし、体も出来てないので、つい大人の考えで動かし体の節々を痛めまくった。後になって成長期に入ると、筋肉痛が無い日など無かつたのも良い思い出。

……まあ一番苦勞したのが、子供のフリだな。

そんな事はさて置き、5歳の頃、俺は初めて原作キャラに出会った。その人物が箒と千冬さんだった。

出会った場所は、箒の実家が経営している剣道場。当然、狙ってやった事だ。嬉しい事に、箒とは『織斑一夏』と出逢う前だった。当然話しかけた。その後、周囲にトラップが仕掛けられる様になった。でも諦めなかった。

初めは余所余所しかった箒に何度も声を掛け、トラップが悪質化し、次第に一緒に打ち合うようになり、トラップが減り、道場が無い日も一緒に遊ぶようになった時、千冬さんと束さんに、某エイリアンの様に連れられて来た一夏と出逢った。——確か、小学校に上がった直辺りだった気がする。

アイツとの出会いの印象は、『イケメンの将来を約束されたシヨタ』『良く笑ってる奴』と言う印象だった。通ってた生徒の女性陣が構うようになり、ソレに嫉妬した幼稚な男の子陣にイジメられ、ハブかれ、更にソレを見た女性陣が一夏を構うと言った悪循環の中、アイツはニコニコと笑いながら、

……ただ黙々と、自分の体を苛めるように基礎だけを続けていたんだっけ。

明らかに異常だった。しかもソレを数名——箒と束さんのお父さんの柳韻さんに、千冬さん、束さん以外に知られない様にしていたのだ。俺が気付いたのは、単に一回戦つ

たからだ。

……戦った理由は、まあ、ただの嫉妬だ。

後から来たのにあつという間に仲良くなって、俺でも2ヶ月ちよつと掛かった筈の笑顔向けられるようになって、——前世でも出した事が無かった、殺意と言うモノを向けたのだ。

だから、行動は早かった。

まず男子陣と結託し、教師陣にバレないように小学校の体育館の周囲を見張らせ、一夏が何時も持っていた小物を入れているケースを盗みおびき出し、稽古と称してアイツをボコる。という段取りだった。

初めの男子陣との結託は上手くいき、対戦する相手決めも俺に決まった。その次の小学校の体育館を利用するのも、戸締りが甘い教師の日を選択して何とかクリア。一夏を千冬さんにバレないようにおびき出すのも成功した。

体力の差は無し、使う木刀も言い訳の為同じ物。剣道の経験で言えば、俺の方が僅かに早かったぐらい。だが俺には、転生特典で『戦いに関する才能』と言う力があつた。だから上手くいったと思つた——最後の最後、俺との一戦以外は。

互角だった

試合内容は、終始俺が攻めでアイツが防御一辺倒だった。なのに、仕留めきれなかつ

た。何度打ち込もうとも防がれ、防ぎきれなくて体に打ち込まれ、痣ができ、斬れて血が出てこようとも、アイツはずつと俺を見つけていた、

——嗤った顔で。

その時悟った。コイツはずつと笑っていたんじやない、この顔嗤った顔しか出来ないだと。それ程の出来事がコイツに遭つたのだと。そして、俺の持つ“ちつほけ転生特典な力”に追い付ける程、——血が滲む所じやない、それこそ体を壊す程の鍛錬を自分に課していたのだと。それに気付いた瞬間、なんだかあまりにも自分がしている事が馬鹿らしくなった。

……コイツは“主人公”じやない、って理解しちまつたんだよなあ。

だから、この茶番は終わりにしようって思つて構えを取り直し、アイツも構えを取り直し、いざ——、

……つて時に、しびれを切らした低レベル精神組が木刀持つて乱入してきて、俺と一夏が即席コンビ組んでそのまま大乱闘。一夏の帰りが遅い事に気付いた——つて言うか、お腹が空き過ぎて苛立つた千冬さんに制圧されたっけ。

懐かしいが、改めて思い返してみると奇妙な縁だ。戦いから生まれた友情なんて、なんてジャンプ臭漂う関係だ、と亮斗は思う。だが、

……アイツとつるんでると、飽きねえし。

だからこそ、これからもバカやって、面倒事押し付け合つて、頼つて頼られて、——

これからはISも絡んだぶつかり合いも増えて来るのだ。

……そう言えば、あの時の決着、結局勝負付かずのままだったんだな……。

そいつはいけない。だからまあ、取り敢えず、

「——まずは目の前のケリを付けてからにするかね。なあ？ セシリア……！」

ピットから飛び立ち、不慣れな飛行でセシリアの前まで飛ぶ。

「……………この一週間、ずっと思っていたのですが。——貴方方の話しの展開が理解出来ませんわ！」

まあそうかもな、と亮斗は思う。

……寧ろ、一週間で会話に混ざって来れるのほほんさんの方が異常……！まさに『女

子高生は異常』!!

そもそも学園が異常だった、と思い出し。思考を冷静にする。

「さてと。……悪かったな、女性との逢引なのに遅れて来ちまって」

「……そうですわね。時間も押している事ですし、早速ダンスを始めましょうか？」

——もつとも、私の一方的な輪舞曲ロンドで終わるかもしれないが

「クククツ、言うなあ。なら、俺の演武とで舞闘祭とでも行くかい……？」

『両者共に良いようだな？』

俺達の口上にケリが付くの見計らった様に、耳元に管制室から通信が届く。

「私の方は何時でも」

「俺も良いぜ」

『よし！——ではこれより、一回戦、オルコット対木場を始める！』

「その真新しいIS、蜂の巣にして差し上げますわ！」

「やってみろよ、英国淑女!!」

『——始め!!』

試合開始の合図と共に、両者が動いた。

二人が最初に行った行動は、攻撃と移動に別れた。

セシリアは己の領域内から、得意武器であり、《ブルー・ティアーズ》の主力武装の大
型レーザーライフル『スターライトmkⅡ』をコール。同時、亮斗へ向けて構える。

一方、亮斗は武器を呼び出さず、猛スピードで、ただ真つ直ぐにセシリアに突っ込
んだ。

「速い!?!」

「うお、危ね!?!」

それに気付いたセシリアがすぐさまトリガーを引き、銃口からレーザーが放たれる——
が、照準が定まっていないう攻撃だったのと、亮斗も回避の動きを取った為に、あつけ
なく避けられる。

「つく、今度こそ……!」

外した。

ただそれだけの事なのだが、自尊心の塊であるセシリアにとつては、『ド素人』『男性』『入学初日から散々コケにしてくれた男』である人物に初撃をかわされたのは、プライドをいたく傷付けられたも同然なのだ。

その屈辱を晴らさんと、さらにトリガーを連続で引くが、

「ははっ! どう、したよっ! 当てる気あんのかっ!」

全て避けられた。——いや、シールドエネルギーは削れているので、当たってはいる。ただクリーンヒットは無いだけだ。

「つく! 何故当たりませんの?!」

「自分で、考えろよっ、代表候補生!!」

苛立つセシリア。対する亮斗も煽って入るが、心臓の鼓動は速く、内心では物凄く冷や汗を掻きまくっていた。

そもそも、なぜISに関する素人の亮斗がセシリアの狙撃を避けられるのかと言うと、亮斗の持つ『戦いに関する才能』だ。その『才能』が、最初の行動でセシリアの感情を揺さぶり、狙撃の狙いが付き易く、かと言って近づき過ぎない微妙な距離での行動を心掛け、更に常にセシリアの正面に立ち、

……見える見える、流石「ハイパー」の一字が付くセンサーって事か……！
ハイパーセンサーを最大望遠にし、セシリアの指の動きを常に視ているからだ。

◆
——管制室

「——と言う事だ」

先程までの説明を、千冬が語った。もちろん転生だとか、転生特典だとかは知らない
ので先天的なモノと言う説明だったが、あながち外れても居ない説明だ。

対して、それを聞いた二人の反応はと言うと、

「はあく凄いですねえ、木場君」

「ふん、亮斗ならまあ確かに出来ない事も無いと思ったがな」

一人は素直な関心。もう一人は微妙におかしい日本語だった。

……心配なら、素直に態度に出せばいいだろうに、箒。

千冬にはバレバレだった。

「でも、何で木場君は武装を展開しないんでしょうか……？まさか、武装の展開の仕方が
分からない？」

「なっ！ちふ——織斑先生！亮斗にアドバイスを」

箒の言葉を、睨む事で止める。山田君の懸念も無い訳でも無いだろう。事実、搭乗回

数二回では、幾らサポートシステムが起動していても武装展開に時間が掛かる事ぐらい分かってる。

だが、違う、と千冬は判断している。

……アイツの機体は、まだ一次移行ファーストシフトすらしてない。

最適化処理を終えた状態と、終わってない状態ではかなりの差がある。もし、今の段階で武器を振り回していたら、一次移行をした後に感覚のズレが起きる。そのズレは戦いにおいて決定的な隙となる。

それ以外にも、ISの動きに慣れる事と、戦闘勘を養う事も含まれてる事だろう。

……まあ、一番初めに考えられるのが、束が一次移行しないと武装展開出来ないようにしたか、だな。

身内が敵と言う状況も中々無いだろう。だが、と千冬は心の中で付けたし、

……出し惜しみは止めておけ、オルコット。貴様の目の前に居るのはまぎれもなく戦士だ。

そう思っていた時、画面の向こうの戦場は動きを変えた。オルコットが、機体の非固定浮遊武装の下側に付いている武装を分離したのだ。

「イギリスの第三世代IS『ブルー・ティアーズ』。最大の特徴は、名の由来にも成っている特殊兵装『BT兵器』です」

「素直にフアンネ」

「ソレ以上、言っちゃダメですよー!」

山田君にダメ出しされたので言い留まったが、実を言うと、IS委員会の議員達間で水面下の話題になっているのだ。

……イギリスはこれから先、SEED系に行くのかOO系に行くのか、とな。

割とどうでも良い事で盛り上がってるIS委員会は、本気で大丈夫なのか不安になる。

「??」

そして、隣で疑問顔の筈に少し癒された。

……ま、すぐに染まるんだろうな。

正面モニターに映る光景を目にしつつ、その実、試合時間を見る。試合開始から15分は経過している。

……そろそろか。

そう思ったと同時に、モニターに映る木場が勢いよく啖呵を切り、ISがその想いを反映するように姿形が変化した。

亮斗 v s セシリア (下)

——第3アリーナ

試合は、最初の展開と全く変わらず、セシリアが攻めで亮斗が守りと回避という様相だ。

だが、観客は開始時と違って固唾を呑んで見ていた。なにせ十分過ぎた今でも、代表候補生が素人を未だに落とせて居ないのだ。それどころか、次第に亮斗の動きが良くなつていく事に気付いている者も居る。

……また当たりませんわ……!

その事実を一番実感しているのは、他ならぬセシリアだ。

最初は小手調べで狙撃だけだった。ソレがあまり当たらなかつたので、今度はブルーティアーズによる全方向からの攻撃に切り替えた。だが、

「ちよこまかとおつ!!」

今度は自分を中心に円周軌道を描き、常に自分の死角に入ろうとしている。

ハイパーセンサーがあるので死角は無いが、それでも数コンマでも見失う事は、I S の速度を考えれば絶対的な隙になる。

……今、この場でそんな隙を見せれば、私が負ける……！

そう、負けるのだ。まだ総合操縦時間が一日以下の男に、2年以上も訓練に費やしてきた自分が、だ。

……そんなの、認められませんわ……ッ！

認めるわけにいかない。もはや相手が男とかいう問題じゃない、——負けられないのだ。国を背負う代表候補の一人として。

「戻りなさいッ！」

命を下し、攻撃中の全てのビットを一度機体に戻す。その行動を訝しんだのか、相手も——木場亮斗も動きを止めた。

……こういう所は、随分とまあ紳士です事。

攻撃してこなかった事に感謝しつつも、甘い事だ、と矛盾している感情を抱きながら、一度深く息を吸い、静かに吐く。

「——認めましょう、木場亮斗。幾分か私に驕りがあつたとは言え、全くの初心者でありながら、10分も持った事は褒めてあげますわ」

コレは本心だ。

「そりやどうも。まだケリついてねえのに、かなりの高評価で感動しそうだ、——漢泣きして良い？」

……お、漢泣き？一体、どういう泣き方ですの……?!

いや違う、と意識を切り替える。今はそんな事を考えてる場面では無い。——後で見せて貰うが。

ですが、と前置きして。

「この後、もう一方のお相手も差してあげなくてはいけなくて、——申し訳ありませんが、此処らで幕引きとさせて頂きますわ！」

対し、まだ一度も攻撃どころか武器すら展開していない男は、はつ、と息を吐き捨て、「——見縊ってんじゃねえよセシリア・オルコット！まだ勝つてもいねえのに次を考えてんのか……！」

此処に来て、初めて闘志を剥き出した。

ビクリ、とセシリアの肩が揺れる。

……この男……。

セシリアが今まで出会った男とは、全くもって知らない性格だ。

そもそもにおいて、セシリアの周りに居た男と言うのは、母にいつも頭を低くして接していた父。両親の死後、オルコット家の財産目当てで寄ってきた俗物。そして、自分の後継人になろうと言ってくる、——体目当ての色魔ぐらいだ。だが、目の前に居る人物は違った。

「本気出せよ、何時までも高い所から見下ろしてないで、全力で俺を潰しに来い！お前が今まで磨き上げてきた実力も、それ以外の全ても俺にぶつけて来い！——その上で、俺はお前を倒すツ!!」

……真つ直ぐに私を見ている。

口が悪く、態度も悪く、正直言つて良い印象は持っていない——が、身体でも莫大な遺産でもなく、一人の戦う者として自分にぶつかって来ている。ならば、

……英国の淑女たる者、無粋な姿は見せられませんわ！

「そう言うのなら、私に勝つて見せなさいな——」

エネルギーをチャージし終わったビットを展開する。

自分はまだ、BT兵器の性能を100%引き出せていないし、ビットとスターライトの同時操作さえまだ習得できていない。が、

……それが、どうしたというのです！

向うは自分を越え、勝ちに来ているのだ。ならば、やるべきことは一つ。

「勝ちに行きますわ！」

「やってみろよ!!」

瞬間、木場亮斗のISが光を放つ。

……これは、まさかッ！

「^{ファースト・シフト}二次移行?! 貴方、まだ初期設定すら終えてない機体で戦っていたのですか!」

言ってる内に光が治まり、機体の各所がより滑らかになり、背部の非固定浮遊武装は折り畳まれた翼をイメージしたスラストターに。機体色も灰色から黒を基調とし、所々に銀のラインが入った配色へと変化する。

……これが、本当の《黒式》ですか!

そんなセシリアの驚愕を余所に、木場は始めて武装を抜いた。刃渡りは2メートル程、柄を含めれば2.5メートルになる両刃の馬上槍だ。すぐさまコアネットワークを通じ、データが転送されて来る。

「ルガーランスⅢ、ですか。……ⅠとⅡを見た事が無いのですが」

「俺も知らん。束さんにでも聞いてくれ」

数少ない情報から、ソレがどういった武器かを悟る。

……篠ノ之博士謹製、と言う事ですか。

此処近年は活動しているといった事例は——表向きは聞いた事が無い。が、どうやら二人が舞台上上がった事を期に再び動き出しているらしい。

だが、今はそんな事よりも眼前の“敵”を見る。一次移行をした機体。戦意のある操縦者。展開した武装。お互い、まだシールドエネルギーはある。試合はまだ続いている。

……なら、戦うまでですわ!

セシリアが再びライフルを構え、亮斗は両手でルガーランスⅢを持ち、右脇の構えを取った瞬間、両者は再び動いた。

◆ 「おおおッ！」

亮斗は突き進む。試合開始直後と同じ様に、今度はセシリアへと一直線に。違いがあるとすれば、今度は本気で斬る為に。対するセシリアは静かに、冷静に、そして的確に、此方に照準を定め――、

「――っ！」

脳からの危険信号に従い、前につんのめるようにして姿勢を移動。

直後、上空の正面。斜め上の視界外から、体の中心があった場所に細い光が一本走った。狙撃すると見せかけて、視界外からの攻撃。そんな事が出来るのはBT兵器以外この場にはない。

立て続けに1本、2本。

「くっ……っ！」

更に2本、3本、4本と上下左右から狙撃が来る。ソレを時に急制動で、横ロールで、上下の急下降・急上昇で避け、掠り、時に左腕を楯にしながら進む。

「ははっ！」

……やる……!!

そう評価する。それしかない。何故なら、ハイパーセンサーで捉えたセシリアの表情は、真つ直ぐに俺を見、スターライトの銃口が一時も外れないのだ。

……止めは自身のある狙撃、つてか!

ビットで牽制と削りと誘導。最後は自分が信頼できる武器で決める。セオリー通りであり、実にシンプルだ。シンプルだからこそ、深く考えず、*“ただやれば良い”*。

……リアルは手ごわいなあ、オイ。

原作やアニメ、二次小説なんかとは全然違う。違うからこそ、

「燃えるなッ!」

顔面狙いの一撃を、反時計まわりのロールで回避。回避先を狙って撃たれた一撃を、ルガーランスを振り、遠心力で更に回って回避。回転の最中に、ルガーランスを左脇で刺突に構え。

……此処!!

更に加速。

「愚直ですわね!!」

そりやそうだ、と心の中で答える。何せどんなに動き、速さで攪乱していても、真正面から突っ込んでいるのだから。

極限の集中の中、意識が加速し、相手の銃口に光が発生するのを認識する。あとコンマ何秒で撃たれるだろう。自身の加速力を考えれば、相手との距離は4〜5メートルは足りない。

「黒式を舐めるなッ!!」

亮斗の意思に反応し、黒式がルガーランスに命令を送る。その命令を受け取り、ランスの切っ先から、鏢の手前辺りまで線が入り、——開く。

その姿はまさしく、

「砲塔?!」

セシリアが驚愕し、その形状の意味する事を悟る。

「しまっ——」

「遅え!!」

上下に開いた刃の間にプラズマが奔り、レーザー砲が撃ち出される。

それと同時に、セシリアのスターライトからもレーザーが放たれる。

両者が撃ったレーザーはすぐに衝突し、数コンマの拮抗の後、出力の違いから亮斗のがセシリアのを呑みこみ、そのままセシリアに向かって伸びる。

「っ——!」

寸での所で、セシリアは下方に落ちる事で回避に成功する。

その隙を逃さず亮斗が呐喊。狙える場所が顔しかなかったので、操縦者狙いは諦め、
「貰ったッ!!」

右の非固定浮遊武装を突き刺し、抉り、速度任せに切り裂いた。

通り過ぎ、右手でランスを振り払う勢いを利用して振り返り、——接近警報が表示。
直感的にルガーランスを眼前で構え、楯の様にし、

「ハッ!!」

「く——ッ!!」

衝撃が走る。セシリアが接近戦を仕掛けてきたのだ。そのまま鏖迫り合いの状態で
止まり。

「ティアーズッッ!!」

「グガッッ……!」

背後から非固定浮遊武装を撃たれた。

痛みと衝撃でランスを落としそうになるが、意識を繋ぎとめ、力押しでセシリアを押し返す。

……容赦ねエなッ!

まだ霞む視界の中、後ろに押し返したセシリアを見れば、既にナイフからスターライ
トへ武装を交換しており、此方に狙いを定めようとしていた。

だが、

……勝つのは俺だツ!!

すでにランスへのエネルギー充填は終え、砲塔の展開も終わってる。あとは、銃口をセシリアに向け、射撃命令を下すだけ。

そして、その通りに実行した。光が走り、セシリアを呑みこむ。

……これで……!

砲撃体勢のまましばらく待ち、相手の状況を確認する。終了のブザーは鳴っていない。と言う事は、まだ相手にシールドエネルギーが残っているという事だ。

数秒して、煙が晴れる。その向こうにセシリアは居た。

左右の非固定浮遊武装は無く、楯のように構えている狙撃銃はオシヤカになり、脚部は所々装甲が剥がれ内部が見える。セシリアには大きな怪我な無いようだが、白い肌に、所々紅くなっている場所がある。恐らく内出血だ。それでも、その目の中の戦意は衰えていない。

素早く視界を走らせ、黒式の状態をチェック。

……チツ!——こっちはもう、エネルギーがー少ねえか!

だが、まだ戦える。まだ使っていないモノもあるし、もうちよつと確かめたい事があるのだ。

「なら、最後のぶしッ?!」

衝撃が走った。場所は左右。そう認識した瞬間、衝撃地点を中心に爆発が起きた。

『試合終了! 勝者、セシリア・オルコット!』

管制室からの勝敗決定の報を聞きながら、亮斗は何が起きたのかを考え、一つの武装を思い出す。

……ミサイル型、忘れてたあ……。



なんとも情けない終わり方をし、気落ちしながら、ISの自動設定による浮遊落下の中、不意に近づいてきた存在に気付く。と言うか今、この場で飛べる存在など経った一人、セシリア以外に居ないのだが。

「意識はありますか? 亮斗さん?」

「あるよ。……最後の狙撃はフェイクか?」

「いえ、両方本命でしたわ」

「クツクツク、中々に肝が座ってやがるな、オルコット。——完敗だ」

「いえ、結構ギリギリでしたわ、亮斗さん」

そう言つて目の前に一枚の表示枠が映し出された。

……ああくそ、残り13つて、マジ僅差じゃねーか！

「て言うか、なんか行き成りフレンドリーだなオイ」

「え?! ええつと、わ、私を此処まで追い詰めた事の評価ゆえ、なの、ですが……だ、ダメでしたか……?」

最後の方、段々と尻窄みになつて、不安げに聞いてきた。

……これがちよろインの本領か

でも実際には全然ちよろくなかつた。どつちかつてーとジャンプ系のノリだ。

……まあ金髪巨乳は嫌いじゃないが、『金持ち・お嬢様』系が入ると面倒になるから遠慮したいなあ。一夏にマジ惚れしてくんねえーかなー。

無理だなー、とすぐに答えが出た。原作の「織斑一夏」^{主人公}なら、この後の戦いで奪う様に惚れさせるかもしれないが、この世界の「織斑一夏」^{あいつ}だとフラグが立つかも怪しい。

……つと、そうだ。一夏のヤツと言えば。

「この後、一夏と戦うんだろ? オルコット」

「セシリアで構いませんわよ? ええ、10……いえ、15分の休憩の後ですわね」

「んじゃあオルコット。一つ、アイツと戦う際の注意がある」

「何でしょう。——ああ、手加減はしませんわ。それと、セシリアとお呼び下さい」

拘るなオイ。だが断る。

「——遠慮はするな。全力だ、全力で叩き潰しにいけ」

俗に言う『全力全開』だ。『全力全壊』でも可。いや、寧ろ全壊にすればフラグが立つ気がする。

「やはり、貴方方の仲が良く分かりませんわね。……ですが、言われなくとも全力で向かい討ちますわ。ですので、私の戦いを活目して見届けて下さいまし」

……公平を保つために、ロッカー行きだっつーの。

けど一々構ってるのも面倒なので、適当に返しながらオルコットと別れ、俺は出撃したピットに入って行く。

「亮斗!!」

入った瞬間。扉が開き、箒が入ってきた。

「おう箒。悪い、負けた」

「バカ者! 何と言う無茶な戦い方をする!!」

「ヒデエ言い草だなオイ」

一定の高さまで来ると、黒式が自動で解除され、左手首にガントレット状になった。

……やっぱ一夏と同じヤツなんだな。

「分かってるのか?! この試合で負けたら、あの高飛車女のあ、ああ愛奴にされるのだぞ

?!

「お前の頭が心配になるセリフだぞ、ソレ。まあ、この後一夏が勝てば1勝1敗になるから、その後、俺が勝てば全員引き分けのドロ―だ」

「む、い、いやしかし……一夏、か。あやつは大丈夫なのか？その……知識はあつても、ISに関しては素人なのだぞ……？」

何の事かと思ひ、すぐに箒と俺の意見の擦れ違いに気付く。

……箒のヤツ、一夏の本性と言うか破滅症候群と言うか自虐癖と言うか厨二的二重人格要素と言うか、『アレ』の事知らなかったんだっけ。

「まっ、大丈夫だよ」

だからそう言っておく。それに、戦いに関する俺の直感から言えば、アイツは勝つ。

長年の付き合いだから分かるが、今までのアイツは『抜き身の刀身を握って持つてる人』だったが、今のアイツを例えるなら『刀』だ。まだ名刀も無く、真打ちですらない刀だが、それでもきちんと鞘に収まって、斬る時は斬る存在になっている。

……この二日の間に、何があつたんだか……。

気になるが、気にしても居られない。あと一時間もしない内に、今度は一夏と戦うのだ。その為に、今できる事と言えば、

……黒式の状態を把握する事。

そう判断し、黒式のステータスを表示させる。

……シールドエネルギー残量が0、ダメージレベルがB(中破)、一番酷いのは背部の非固定浮遊武装だが、

「エネルギーの補給があれば自動修復可能範囲、か。あんだけやってB判定って、結構頑丈だなコイツ」

「それでも、一夏と戦うまでには完全に修復は終わらないぞ?」

「ん、勿論その状態で戦うまでだ」

「ば」

「失礼するよ」

箒が何かを言う前に、扉が開き入室の挨拶をしながら一人の人物が入ってきたので、箒は言うタイミングを逃した。

焦げ茶色の髪之首筋辺りまで伸びたポニーテール。白のシャツにデニムのGパン、その上から白の白衣を羽織り、生地が厚いのか、それとも体型なのか分からないが、随分スレンダーな人だが、恐らく女性。

驚きと訝しむ箒を余所に、

……ちよつ、なんツ、えー!?この人、何でこの世界に居るの?!

俺はその人物を見て、よくもまあ奇声を上げなかった、と自分自身を褒めたかった。

対する女性(?)は、俺達の視線など一切気にせず、ズカズカと大股で俺に向かってくる。

「いやあ悪いね、プロテクトが解けたって聞いて居ても立ってもいられなくてねえ、——で、キミが木場亮斗くんが良いのかな? 早速で悪いけどキミのIS《黒式》を見せて貰っても良いかな? いや寧ろ触らせてくれないだろうかいややはり此処は直接中身を見せ欲しいつと言うか見せてくれえ! 私の黒式をおぶしッ!!!」

「落ち着け奇行者」

しゃべっている途中で段々と興奮し出し、最後には黒式を自分の物宣言した不審者は、何時の間にか部屋に入って来ていた千冬さんに頭を殴られ、頭を抱え蹲った。

ソレを見て俺は、

……ああ、世界変わっても中身は変わんなかったのか。

ある種の真理に辿りついていた。

「あの、織斑先生。そちらの方はどなたなのでしょう、と言いますか、ええと、目上の方なので言葉を選びますと、——頭大丈夫ですか?」

「言葉を選び過ぎだ、箒」

俺と千冬さんのツッコミが同時に入った。

ん、と一度喉を鳴らし、千冬さんが説明に入る。

「本当なら呼びたくは無かったのだがな、今回、二回も戦闘を行うという事で、一戦目で機体が破損した場合の修理の為に、急遽倉持技研の方から出向して貰った」

「坂地はんじ添ぞえだ。よろしくね、亮斗君」

「なんか違うー?!」

「ちなみに正式な肩書きは、倉持技研第一研究所所属、試作第4世代 I S 研究班主任だよ」

「ついでに言うのと、私や束とは同期だ」

「は、はあ、……って第4世代?!」

「箒が微妙な納得をした後で、第4世代と言いう名に反応する。確かに、世間じやあ、まだ第3世代で、しかも試作機の段階だ。『まだ』普通の感性しかない箒にしてみれば、驚きの一言だろう。」

「だが、俺としては千冬さんの『同級生宣言』の方が数倍気になったが。」

「別に驚く事じゃないよ、何せタバネが関わってるんだ。キミだって、彼女が常人とは違う発想力、行動力を持つてる事は知ってるだろう?」

「むッ……、いや、確かに、そうですが……」

「まあ無理に納得しなくたっていいさ、けど、今此処に試作型第4世代機である『黒式』と『白式』が此処にある、と言う事実は認める事だ」

箒が言い包められた。

……まあ、俺も原作と言う“知識”が無きや、箒と同じ感じだったろうなあ。

さて、と会話を区切って、ハンジ分隊長——いや、此処じゃ坂地主任——が俺に向き直った。……ちよつと肩がビクン、となつたのは見ないでいてくれると嬉しい。

「早速だけど整備室に行こうか。さっきの試合を見たけど、多分背部の非固定浮遊武装が結構ダメージ入ってるでしょ？」

「正解です。でも《黒式》の交換品はまだ出来てんじや……？」

「うん、出来てないよ」

あつさり言われた。

でも、と続き、

「《白式》もそうなんだけど、《黒式》もウチの《打鉄》がベースになつてるみたいだからね、相互性はある」

だから、と更に続いて、

「じゃあ早速往こうかッ！時間は待つてくれないしねッ!!ほらほら早く行こう!!!」

「え？あ、つちよ?!いだだだだ?!腕が捻じれるッ!!」

「Halley! Halley Halley!!待つててよお《黒式》ちゃあん!今すぐ私
が隅々まで解析してあげるからああ!!」

腕が捻じれられ引つ張られながら、俺はハンジさんに拉致られて、そのままピットから連れ出される。

……っーかマジ痛いッツ!!!

「りよ、亮斗ー?!」

「まあ、死にはしないだろうから……頑張れ」

そんな二人の言葉を聞きながら、ピットのドアが閉じられた。

——そこは捻じつちやらめえええええ!!

一夏 V S セシリア

——第三アリーナ・客席

亮斗とセシリアの戦いが終わり、次の試合までの15分の休憩の中。観客席のあまり目立たなそうな場所で、更識簪は先程の戦いを分析していた。

……彼のI S、《黒式》だっけ……？ 近距離戦闘寄りって織斑君から話しは聞いてたけど。

「あの武装……」

荷電粒子砲とは違ったけど威力は申し分なかった、と簪は考査する。ついでに織斑くんの嘘つき、と分割思考の一つで罵っておく。

取り敢えずあの武装だ。あれ一つで接近戦と遠距離攻撃の両方を兼ね揃えているのは、正直凄いと思う。攻撃の三大要素『斬ってよし、刺してよし、撃ってよし』の三拍子そろっているのだ。

……流星は篠ノ之博士、って言うべきなのかな……？

そんな事を考えていた簪は、自分に向かつて足音が近づいて来るのを察知する。普段は立てない足音を発している事に少しの嬉しさを感じながらも、一目散に逃げ出したくな

りそうになる——が、

……今は、ダメ……！

今此処で逃げだせば、この先、何時機会が訪れるか分からなくなってしまうので必死に抑える。何より、

……お、織斑くんが作る、トマトカレーが食べられない……！

某ゲームで有名なアレだ。彼の料理の腕前はこの一週で十分知っている。ならば食べなければ損だ。——それに、盗って来てしまったモノは返さなきゃいけない。

「隣、良いかしら？」

「……………どう、ぞ」

なんとか声を出す。

チラリと横目で見れば、隣に座るのは自分と同じ水色の髪の女性。おね——生徒会長さんだ。

会話は無い。ただ、無言の応酬が数秒ほど続き、

「……………つ、あ、あのっ！」

意外にも、先に動いたのは簪からの方だった。横に置いてあった鞆から小型のノートPCを取り出し、楯無に差し出す。

「も、持って行っちゃって、ごめんなさい……！」

……か、嘸み嘸みだあ。

顔を伏せているのでバレて無いだろうけど、泣きそうなのを我慢。少しの間ビクビクしながら待っている、

「ん。返してくれて、有難う」

手から重みが無くなった——受けとつてくれたのだ。内心ほっとするが、

……盗って行っちゃったの、私なのに……。

礼を言われ、逆に居た堪れなくなった。このままだと、また心にも思っていない事を言ってしまうそうなるので、用件も済ませたので早急にこの場を去ろうと思いい腰を上げる。

「そ、それでは私はこれで失礼」

「彼の試合を見ていかないの？」

最後まで言い切る前に、向こうから問われ、ハツとして目の前の人を見る。

会長は、私を見ていなかった。会長が見ている先は、試合会場のピット。其処から飛び立ったのは、純白の装甲を持つISを身に纏った織斑くんだ。

……アレが白式。

スペックだけで言うなら、既存のIS中最速の機体であり、武装が一つしかないピーキーな機体。

「簪ちゃん」

急に名を呼ばれ、反応せずに居ると、会長は更に言葉を続けてきた。

「これは I S 学園の生徒会長としてでもあるし、お姉ちゃんとしての言葉よ」

「え……」

話し方が、何時もの余裕のある話し方じゃなかった。その事実には、何故か耳を傾けてしまう。

「彼に深入りしない方がいいわ。表面上の付き合いだけにしなさい」

「ど、どう言う事……?」

この間訊いた自己破壊願望の事だろうか? でも、それだけで目の前のおねえ——会長さんが警告する事だろうか?

「解らなさそうね。——なら、この試合を見て行きなさい」

そう言ってお——会長は、私の事を一瞥もせず、試合会場の方を見ていた。

……なんか、悔しい。

その感情は、織斑くんへなのか、それとも目の前の人へなのかは分からない。だが、なんか悔しかった。

……ここ、このまま逃げるのもイヤだから……!

再び腰を下ろした。

◆ ヨツシヤキタアアアアアア!! クククツ、ハハハツ! 久しぶりに嗅ぐ簪ちゃんの匂いは格別ウウウウ——ツ?! コレ、私と同じシャンプー使ってる! くう……! 簪ちゃん最高! 同じ製品なのに、簪ちゃんが使うと最高級の香水よりもイイ香りだわ!! クククツ、流石私! 私流石! こういう時に誘導尋問系のスキルを持つていた良かったわツツ!!

——戻って第3アリーナ上空

「ギャップがひでえだろうな、アレ」

今俺は、ハイパーセンサーを使い、会場の何処かで妹ジャンル系ハメコンボ好きエロゲ会長に、ノーパソを返している筈の更識さんを探していたのだ。

で、見つけたシーンが一目散に立ち去ろうとしていた更識さんを、あの会長は一言二言しゃべって、事もあろうか更識さんを隣の席に戻させた場面だった。

……俺をダシに、煽って反抗心を刺激。更識さんに見稽古を付けるついでに、自分の欲望も充たしやがったよあのエロゲ会長。

二人の心境が解るだけに、あのシーンを見て出てきた最初のセリフだ。

「？ 何かおっしやいました？」

「唯の独り言だよ。そう言えば、アイツとの試合は完勝？」

「いえ、良い所まで追い詰められましたわ」

と言う事は、デカイ口叩きながら亮斗は負けたのだ。

……からかうネタゲット。

「機体は大丈夫なのか？ 負けた言い訳は聞きたくないぞ」

「御心配無く。同じ候補生の先輩が、『こんな事もあるうかと』と言って予備パーツを幾つか取り寄せてありましたから」

オルコットの性格が慢心と高飛車な性格だから不安だったが、ちゃんと頭が回ってる人は居るようだ。しかも浪漫が分かる人。

……まあ、SFの塊みたいな分野のIS道に入る奴なんて、どう考えても「そつち」方面に両足どころか、全身浸って滲み込んでる様なヤツしか考えられんなあ。

取り敢えず向うの心配は要らないようなので、試合に集中する事にする。

ISでの戦闘はコレで三回目。こっちは最強相手に受験試合一回、昨日のエロゲ好き会長と4時間ぶつ続けの訓練と、実機でのたった一時間の訓練だけ。対して、相手は月に数十回はこなし、数百時間以上は乗ってきた代表候補生。

……これ、どつちが凄いな……？

いや、向うだつて国家代表辺りと数回は模擬戦をしてるはずだ、と考え、自分を否定する。

そしてすぐに意識を切り替え、目線は拡張領域内にある武装一覧に向けられる。其処に、この機体に搭載されている唯一の武装があつた。

……恐れるな。

息を大きく吸いゆつくりと吐き出す。意識を少しずつ戦闘思考へと切り替え、——己の奥深くに閉じ込めた『俺』を解き放つ。

二日間の鍛錬の間に、エロゲ好き会長から指摘された事があつた。

曰く、力の込め方も体捌きも十分に出来ているが、攻撃する瞬間だけ力任せになりがちだ、と。ついでに、それだと自分の拳も傷めるゾ☆、と言われ。後者の発言でイラツと来たので、乱取りしながら自分でもどうしようもない破滅思考の事を、説明ついでにお披露目した所、これまた力尽くの荒技でこの自己暗示を修得させられた。

だが、付け焼刃の技能だとしても、今までとは全く違う感覚に至つた事は間違いない。かつた。

……ああ、良い気分だ。——良い気分ですれそうだ。

なんか間違つてる気もするが、別に良いや、と思考を破棄。

「全力で来い、オルコット」

「ええ、亮斗さんとの一戦で分かりましたわ。貴方方は油断できない相手だと。故に、最初から本気で行きましょう。——この試合、亮斗さんも見て居られるのですから」

……見てねーって、入れ違いで更衣室だっつーの。

内心でツツコムが、それと同時に、もう一つの事に気付く。

……落ちたか。まあ、俺に害がある訳じゃないから良いや。

と言うか寧ろもつとやれ、とエールを送つとく。それと同じ位に、無駄だと思いがな、とも否定する。だつてアイツの本命は箒で、箒の本命も亮斗だし。

……さつさとくつ付け——いや、やっぱ卒業辺りまで待つて欲しい。売れ残りの俺に卒倒するし。

『両者、準備は良いか?』

管制室に居る姉さんから通信が届く。

「私は何時でも」

「準備だけは良い」

後は本番だ。

『では二回戦目、織斑一夏対セシリア・オルコットの試合を行う!』

雪片式を抜き、顔の横に持つて行く。切っ先を相手に向けた式の太刀の構え。

対するオルコットは、左右の非固定浮遊武装の下方から2つのパーツを分離させ

た。

……アレがBT兵器。確か、自律行動じゃなく、使用者の思考伝達で動くんだっけ。

資料はエロゲ好き会長に、更識さんの『題：PCの前でウトウト』の写真とマスターデータで手を打った。

……なら楽勝だな。

内心でそう言い聞かせ、一つのプログラムを起動。右の眼前に一つのモニターを表示させる。

『開始!!!』

「――斬るか」

「撃ち抜きますわ」

直後、一夏がトツプススピードで疾走すると、ビット2つからの射撃は同時だった。

その攻撃を、一夏は、

「……………」

下半身を上を持ち上げ、反動で少し高い位置に身を置く事で避けた。

「貴方もですかッ！」

「軌道が見えるからな」

「ハッターを……………」

一夏の目には、嘘やハツタリでは無く、しつかりとセシリアの攻撃の軌道が見えていた。

それを成しているのが、一夏が右の眼前に表示させた一つのモニターだ。

……プログラム正常稼働。バグも、今の所なしか。

二日間の間、エロゲ好き会長に鍛えられながらも、更識簪に好きなモノを作ると言う交換条件で《打鉄式》を借り、組み上げた『射線予想プログラム』だ。ハイパーセンサーとロックオン感知、熱源感知のシステムを連動させており、ロックオンされた瞬間ハイパーセンサーが銃口向きと射線を読み取り、撃たれた際の銃口の延長上のラインを教えてくれるのだ。

……更識さんには、感謝しなくちやな。

エロゲ好き会長にはしない。なぜなら、彼女とは生徒会の雑務を引き受ける契約だからだ。

それに、と心で繋げ、

「見せる、つて言っちゃまったからなっ……!」

水平状態のまま瞬時加速。その爆発的な加速を得たまま、

「——ッ!」

「きゃあッ?!」

勢い良く、左肩からオルコットに激突。オルコットの胸が自分の左ほほに当たつてい
るが、

……斬るのに邪魔だッ！

即断。体勢を立て直そうと離れようとするオルコットに対し、俺も左腕で払いつつ体
を右にズラし、

「その足、貫つてくッ！」

「嫌ですわよ!!」

オルコットの左足のユニットを、ロールする勢いで下から斬り払った。

相手も危機を察したのか、左足を右に寄せ全力で横にズレた為、左足を斬り飛ばす事
は無かったが、体勢が崩れた。

対する一夏は、横ロールしている状態。右手に持った雪片は、真上を指している。

「おお——！」

そこに更に捻りを加え、勢いを付けて、——右手を開く。

……雪片大車輪つてな……！

「非常識な——！」

オルコットの驚愕する声が聞こえる。

目に見える状況は。縦回転しながらオルコットに迫る雪片と、更に後ろに下がりなが

ら、左右のどちらかに避けようとしているオルコットが見える。——が、
……距離が近いから無理だ。

後ろに向かつて瞬時加速でも行えば避けられるだろうが、オルコットの戦闘データを
見る限り、瞬時加速を用いた高機動戦闘は行った事は無い。

故に、

「どう出る！セシリア・オルコット……！」

体勢を立て直す最中、幾つか自分でも候補を考えつつ向こうの動きを見続け、——候
補の中の一つを、オルコットは選択した。

すなわち、両腕に寄る防御だ。

長銃を量子化し、インターセプターと声に出して近接用のショートブレードを横にし
て構えた。若干の違いはあるが、それでも想定内の動きだった。

………つまらん。

一気に心が冷めた。

体勢を戻し、すぐさまフルスロットルで加速。加速した瞬間すぐにスラストを止
め、機関内に圧が溜まったタイミングで再びの再点火——フルブーストの瞬時加速だ。
ソレにより一瞬でオルコットに接近。

そのオルコットは、雪片が当たる瞬間、下から掬い上げる様に上にトスし、一つの動

きを取った。

右腰のバインダーが動き、此方に銃口を向けたのだ。得た情報から察するに、追尾型のミサイルだったと思い出し。

……良いね！そうこなくちゃ!!

く、と口元に笑みが零れ、——真っ直ぐ突っ込む。そして、銃口に向かつて左の貫手を突き出し、

「諸共に吹き飛ばすッ！」

直後、銃口から発射された瞬間のミサイルと左の貫手が衝突し、炸裂した。



……なんて無茶苦茶……ッ！

爆煙が立ち込める中、全力で後退しながらセシリアは息を呑み、戦慄した。

普通なら、あの場面で取る行動は回避だ。実際、自分が戦った人達は誰もが回避を選
択肢していた。中には迎撃する方々も居たが、間違っても突っ込んで来た存在は居な
い。

……まして、負傷覚悟でなんて……！

まともな育ち方をしていない。まるで野生の獣だ。

そして、その獣はまだ戦いを止めていない。試合終了のブザーが鳴っていないからだ。即座に姿勢制御し、スターライトmk-IIを展開。最後に見た彼の位置を思い出し、

「——！」

一射。

「敵」を視認している暇など無い。そんな時間、^敵相手が自分の懐に迫る時間を与えるだけだ。

撃ち出された光撃は、彼が居るであろう位置に向かって行き、——爆煙から光が一閃され、打ち消された。

……やはり、ただでは撃ち落とさせてはくれませんわね。

煙が晴れる。彼の姿が露わになり、ハイパーセンサーを通して観客の小さい悲鳴が聞こえる、

「イケメンを傷つけるなんてッ！」

「血だらけになっても戦う男——否、漢」「イケますねえ、それ」

「前のヤツ邪魔よ！描けないじゃない……！」「はあー!? ポジション取りは基本よ!!」

「M? Mなの?」「違うわよ、オルコットさんがSなのよ」「……攻め受け?」「……それ

だ!!!
「」
「」

えたくないが聞こえた。

……それだ！じやありませんわよ！あと、だれがSですか！私はどちらかと言えば、亮斗さんに攻められる——って違いますわよ私っ……!!

変な方向に思考がズレたので、急ぎ修正。改めて彼の姿を見る。

白い装甲は装着者共々煤に塗れ、見た感じ中破以上といった所だ。中でも酷いのが左腕。左腕の装甲は砕け、生身の左腕にも幾つもの裂傷があり血が流れている。

唯一無事な右腕には、先程何処かへ飛んでいった剣——ユキヒラニシキが握られている。恐らくは、自動返還機能だ。

ISの武装は、必ずISに登録する必要がある。と言うのも、持ち運びを便利にするだけでなく、登録された武装は、所持者から一定の距離が開くと自動で量子変換し、格納領域へと戻る事になっている。これは安全性や、回収し忘れた武装が万一盗まれたりしない為にする防犯機能でもあるのだ。

「本当、素人とは思えませんわ……」

代表候補生の上位に居る者たちはそういった機能を十全に使いこなすし、武装を手元に戻させない為に距離の把握すら行う。

……だから化け物揃いですのよ。

そして、目の前に居る彼もまた、その化け物連中の領域に片足突っ込んでいる。ライオンの姉の弟はやっぱライオン、結局はそう言う事だ。

……ですが、

「もう負けられません!!」

「ん、じゃあ頑張ってください」

決意を新たにした所で、彼に軽く受け流された。心なしか、少し高度も下がった気がする。

「あの……、気の所為かと思いますがテンション下がってます……?」

そう言えば、先程から自分の剣——ユキヒラニシキをずっと見ていたのを思い出す。

「ん? ああ、なんつーか、俺はまだ姉さんに護られてばつかなんだな、って思い知ってたな」
「それはそうでしょう。あの方はモンド^ググロツソの総合部門優勝者^{ルキ}。私だつて届くかも分からない高みに居るのですよ?」

今更な事だ。私程度に後れを取るようでは、到底辿りつけない頂きだ。

だが、私の言った事を否定するように首を横に振って、

「いや、そう事じゃないんだ。——俺は、まだまだ姉さんの手の届く範囲に居るんだなつて事を痛感させられてな。そして、”ソレ”を利用してでしか勝ちも拾えないんだ、つて」

言っている意味がよく分からなかったが、恐らくは、

……「何か」を掴みましたね。

そもそも亮斗さんの《黒式》に彼の天才、篠ノ之博士が関わっていると言うのなら、織斑一夏にも関わっていない筈が無いのだ。

……何かあるとしたら、あの近接武装。

あの時、自分が撃ったレーザーを打ち消した光刃。恐らくはアレだ。エネルギー系の武器は、実体剣や実体弾と違い、当たればシールドエネルギーをかなり削る。

「ですが、当たらなければどうという事はありませんッ！」

「いやお前、どっちにしろ近づかれたら終わりじゃん？」

うっ、と言葉を詰まらせた。

……な、何か最初の時と随分と性格が違いますか?!

明らかに違うと思うが、今考える事は彼の性格のではなく、勝つ為の工程だ。残っている武装は、右のミサイル兵装以外は全て残っている。だが恐らく、相手は此方の性能を把握している。ついでに言うのと、私が取れる戦術も大体は知っているだろう。

……ど、どうしましょう……っ。

内心の動揺を押し殺し、スターライトを構えてみたが、対策が一向に思い付かない。

B Tとの同時操作、もしくは偏光制御射撃が使えたらもつと幅が広がるのだろうか、出

来ない事を願っても仕方ない。

……取り敢えず、撃つて当てれば勝てますわね……！

漸く覚悟も決まり、相手に意識を集中する。



構えは顔横に剣を置く、弐の太刀の構え。ただ今までと違い、左腕が負傷している為、右腕一本で支える。こういう時にアームが付いていた事を有難いと思った。

けど、正直言つて邪魔だった。特に肩部の戦隊モノっぽい肩当て。

……なんだよコレ、当たり判定の箇所が増えるだけじゃねーか。

つまりは本気で束さんに言われたとおり、自分好みの I S の製作だ。別名『俺の考えた最強の I S』である。

……まあ、今は勝ちに行くだけだ。

顔はオルコットに固定したまま、横目でチラリと一つの表示を見る。其処には一つのプログラム『零落白夜』と表示されていた。

……まさか、此処でその名前を目にする事になるとは……。

『零落白夜』

嘗て姉さんが発現させ、使用していた単一仕様能力^{ワンオフアビリティ}。仕様は『シールドを斬り裂き、搭乗者本人への直接攻撃』。

要は、防御無視で本体に直接攻撃して、絶対防御を強制発動させエネルギーを消費させるのだ。

……けど、発動させた際の光刃のエネルギーは、こっちのシールドエネルギーを消費させる。

言わば諸刃の剣。さつきも一秒に満たない時間しか使っていないのに、一気に30近く持ってかれた。

こんなにも扱い辛いスキルで姉さんは無双したのだ。だが、今はそんな姉を持てた事を有難いと思う。そして、個人技能である単一仕様能力を、どうやってISに組み込めたかと言う事も思考の隅っこにブン投げる。束さんの思惑とやらも放棄。

「――勝ちに行く」

もう迷わない。立ち塞がるなら斬る。邪魔するなら斬る。俺の想いや考えてる事も斬り捨てる。

……俺は、世界最強の一振りと、世界最強の力を持つている^{ブリュンヒルデ}。

逆を言えば、それだけの重責を背負っているのだ。

……負けは赦さない。他の誰でも無く、俺が俺を赦さない。

コレが、本当の『覚悟』だ。最早、俺はこの剣と共に歩んでいくしかない道を選んだのだ。

「——忠、勝つ」

その為に、一夏は前へと出た。



後退し、引き撃ちするセシリア。

セシリアを追い、接近戦へ持ち込もうとする一夏。

エネルギーを消費し、的確に狙撃する者。回避するも、次第にエネルギーを削られていく者。

会場を縦横無人に飛び回り、ただ相手を倒す為に動き続ける二人。戦況は一見互角。だが次第に、会場に居る全員が分かるまでに流れが傾いていた。

その事実が一番知る事が出来たのは、指令所にいる山田真耶と篠ノ之箒だった。

「織斑君、凄いですね」

「これが、一夏……」

山田真耶はデータから導き出された統計から、一夏がこの短時間で白式の機動に〃合

わせた”事に。

篠ノ之箒は、幼馴染であり、自身の恋路を手助けし、また阻害する少年の技量と心の奥底にあつた闘争心に。

「……………」

その中で、ただ一人無言でモニターを見つめる千冬は、内心で安堵の息を吐いた。

一つは、一夏が雪片を持ってくれた事に。そしてもう一つは――、

「――フン」

其処まで考え、自分自身の愚かさに反吐が出そうになる。

「あの、どうしました？ちふ……織斑先生？」

「なんでもない篠ノ之。――それより、そろそろ片が付くぞ」

己の何もかも呑み込み、普段通りに振る舞う。

……まあ、一夏の勝ちだろうがな。

身内最良なものも入った予想だが、あながち外れていない。一夏は零落白夜の特性を、使用する際の条件も含め知っているのだ。

……さて、勝った後、アイツなら天狗になる事は無いと思うが、……負けもまたアイツの為だ。

考えるのはこの後の段取り。この後戦う一人は怪我、ISは共に中破という状況。教

師としては止めに入らないといけないが、恐らく二人は決戦試合を望むだろう。下手したら土下座までして懇願して来る。

流石にそれは面倒だ。

やるべき事は搭乗者の応急処置と、ISの応急処置・再調整だ。代用品で打鉄のパーツを使用すれば、時間は短縮できる。問題は搭乗者——一夏の方だ。

……20分。それくらいあれば、止血と表面の傷を塞ぐ事は可能か。

今の医療技術の高さに感謝だ。

其処まで思案し、意識は再びモニターに向ける。

試合は既に、削り合いへと変わっている。一夏は相変わらずオルコットを追い、オルコットは——、

……狙撃銃をやられたか。

銃口部分が焼き切れていた。使えないと悟ったのか、格納領域へと戻さず、一夏に投げる事で一瞬の壁とし、BT兵器を1つ展開していた。

思わず感嘆の声を零す。

……オルコットは移動とBT兵器の同時操作は出来ないと聞いていたのだがな。恐らく極限まで高まった集中力だ、ソレを可能としたのだろう。

一つのBT兵器を、前に突き出した右手で持つような位置に置いている。BTを狙撃

銃に見立てて、狙撃のイメージングを行っているのだろう。

……さあ、正念場だぞ？二人とも。



……80……ッ！

シールドエネルギー残量を尻目に、一夏はセシリアを追う。

ISが動く毎にエネルギーを消費していく事を考えれば、あと数秒程で勝負を掛けなければ、零落白夜発動分のエネルギーすら使ってしまう。

……焦るな、嘆くな、諦めるな。

全て、今までの自分の事だ。生きる事に焦り、生き残ってしまった事に嘆き、未来なんてどうでも良いと諦めた。

だが、これからはもう、それじゃダメなのだ。

——顔面狙いのレーザーを最小限の動きで避ける。

その為に、この試合は勝たないといけない。勝って、終わらせる。

……今までの『自分』をッ……！

——胴狙いの一撃を、縦回転のロールで避けた、

……マズイッ!

回転した分、距離が空く。致命的な“間”だ。

その間を更に開けるべく、オルコットが動きを見せる。左のバインダー——BTミサイルが——放たれた。

極限まで高まった思考が、全ての動きをスローに見せる。その中で一夏は行動を起さず。

……やれる。

——12メートル

ロールした勢いで、体は右へと向いている。其処から左へと体を回し、右手に持った雪片式を、縦回転で上向きに投げる。

……やってやる。

——9メートル

続く動きで、肩当てに手を置き外す。

……これから先を考えれば、この程度の無茶、平然とやってのけなきや駄目だ。

——5メートル

加速。

……もう逃げないって決めた。

——2メートル

……もう、戦うって、

「決めたッ!!」

ミサイルをギリギリまで引きつけて、その弾道を見切り、右の脇下へ通す様に体を動かす。その際、弾道上に手に持った肩当てを放り投げておけば、

「——ッ!!」

背後でミサイルと肩当てがぶつかる。音と衝撃が背後から届き、更なる加速を得る。

……届け……っ、

視界に映るのは、先程投げた雪片式。

「届けええ!!」

届く。指先が柄の先端に引っ掛かり、雪片が落下から一瞬停滞した。

その瞬間を逃さず、逆手状態で柄をしつかりと握り、——オルコットの下側へ向かって瞬時加速。胴体があつた位置を、二条の光が通過。

「お」

オルコットの真下を通り、マニュアルによるPIC制御で180度反転。今度は真上へ向かつて瞬時加速。

「お……お……」

通り過ぎ様、雪片で右の非固定浮遊武装を引き斬る。金属を裂く音を聴きながら、再度 P I C 制御で急停止。オルコットに視線を向け、

「これでッ！」

「舐めないで頂きたいですわッ！」

1つの B T 兵器の銃口が此方に向いていた。

予想通りの動き。故に俺は、

「貫けええッ!!!」

「またですのッ!?!」

雪片を投擲。

その後を追い、柄頭に足裏を乗せ更に加速。

「秘剣!—Gソードダイバー!!」

「何処が秘剣ですの——ッ!!」

オルコットが何やら叫ぶが無視。むしろ集中が途切れたのか、B T 兵器の攻撃は来なかった。逆にならぬ都合。

……零落白夜発動!!

距離が一瞬で縮まり、光刃が左の非固定浮遊武装を斬り裂き、オルコットの体を霞めるように過ぎる。

……獲ったツ!!

即座に零落白夜を停止。落ちていく雪片式式を無視して、残りのエネルギーを視界に捉え――、

『勝者、織斑一夏!!』

勝利宣言を得た。

束の間の男女

——試合会場・観客席

誰もが予想だにしなかった結果に、観戦に来ていた女子生徒達はザワつき、興奮していた。当然、話題は二人の男子生徒。

一人は二次移行前フエアーストシフトにも関わらず善戦し、最後まで喰らい付いた木場亮斗。

もう一人は、怪我をしながらも勝利を飾った織斑一夏。

「凄かったね！私、こんな凄い戦い、去年のキャノンボールフイストでの戦いを見て以来だよ！」

「うんうん分かるわー。負けちゃったけど終始余裕を見せてた木場君も良いし、傷だらけになっても勝ちに行く織斑君もカッコイイよね！」

「うーん、どっちも攻めなんだけど、何か受けてほしいのよねー」

「受け攻めって奴じゃないの？」

「それってMなの？Sなの？」

「Sじゃないの？自分からは手を出さないけど、寄ってきて巢に掛かった獲物にはガツツリ行く、みたいなの？」

「[[[[「きゃー!」]]]]」

とにかく騒がしかった。

対して、一戦目はギリギリ勝利。二戦目は敗北といった戦果を得たセシリア・オルコットの評価と言うと、そんなに悪くなかったりする。

特に1年1組の生徒達には。

「オルコットさん、やっぱり凄かったんだねえ」

「そりゃあ代表候補生だもん。私達とはレベルが違うっしょ?」

「織斑君との戦いも連戦だったし、一戦目で受けたダメージと疲れもあったしね」

「あれ? パーツ交換したからISは万全じゃないの?」

「馬鹿ねえ、幾らパーツ交換したからと言って万全とは行かないわよ、……でしよ? 本音ちゃん」

「うん、そくだね。流石に専用機ともなると専用のパーツだし、きちんと調整をしないと、ちよつとだけズレが出るんだよね」

「[[[[「布仏さんが真面目だ……」]]]]」

「皆酷い。でも、流石整備科の先輩たちだね。こんな短時間で、殆どのズレを修正するなんて凄いな」

「ええ。皆さん基本祭り好きですから。テンションMAXで作業してましたよ」

行き成り話しに入りこんできた人物に、全員が顔を合わせ、一人の女子生徒が合図し、
「……………どなたでしょう?」「……………」

疑問を口に出した。

「お姉ちゃんだよ」

「……………お姉さん?!」「……………」

「はい。I S 学園3年、生徒会会計をしております布仏虚です。皆様には、本音が日頃から世話になっています。……………この子、かなりペースが遅くて大変でしょう?」

「お姉ちゃん、ひどい」

「い、いえ。本音ちゃんは癒し要素で1組のマスコットですよ!」

「そ、そうです!それに基本織斑君が世話係になっていますので!」

「やっぱりですか……………——本音」

「ご、ごめんなさい!」

賑やかに時が流れて行く。



ピットの降り、白式を解除する。

「ッ、は……！」

途端に襲ってくる激痛と疲労。左腕から、ズキズキと痛みが脳に届く。

この後、亮斗との戦いもあるので、急ぎやる事を脳内でピックアップ。と言っても、やる事は単純で、

……治療と応急修理。

この二つしかない。休息も取る必要があるが、それは治療と同時に取れば良い。確か、どちらも人員を用意してある、とシスコン会長が言った。

そして、その通りに両方の担当者がやってきた。

空気が抜けるような音を鳴らしドアが開く。開いた入り口から二人の女性が入り、此方に駆け寄って来る。

一人は見覚えがあった。甘栗色の少しウェーブの掛かったロングヘアの女性。遠見真矢の母親、遠見千鶴さんだ。

……そう言えばIS学園で保険医を務めてたんだっけ。

スツパリと挨拶に行くのを忘れてた。

そしてもう一人は、ハーファップのヘアースタイルのメガネを掛けた——恐らく女性。その女性は、鬼気迫る表情で此方に走り寄り、

「私の白式いいいい!!!」

「なんだ、ただの奇行者か」



——西ピット

観客の目に付かない奥まで移動し、慣れた動作で《ブルー・ティアーズ》を解除して床に降り立つ。

降り立った位置から一歩も動かず立ち尽くしていると、空気の抜ける音と共に、一人の女性生徒が入って来た。

「お疲れ様、セシリアさん」

「あ、……サラ先輩」

サラ・ウィルキン。IS学園2年生パイロット科を専攻する女性であり、自分と同じイギリスの代表候補生。そして、自分にISの操縦技術を教えてくれた師でもある。

「負けてしまいました」

「だね。いやー、私から見てもありや怪物よ？素人とは思えないわ。………戦った事、後悔してる?」

「後悔はしていませんわ。ただ——」

「家の事？」

俯く事で、肯定とした。

隠そうと思つたが、今更隠そうとも、自分の事情を知っている目の前の先輩には意味のない事だからだ。

「代表候補の剥奪までは行かないかもしれませんが、恐らく——いえ、きっとオルコット家の相続権の保証などは放棄されますわね」

代表候補資格が取り上げられないのは、自分がBT兵器のテストパイロットだからだ。だがそれも、適性が高かつたからという理由だけで、これから先『前』に押し出される事は少なくなるだろう。

……いつその事、私から相続を放棄するのもありかも知れませんか……。

オルコット家の長女『セシリア・オルコット』から、ただの『セシリア』になる。何ともまあ、肩の荷が一気に無くなりそうだ。肩コリは無くならないだろうが。

「おーい、何か今、私に喧嘩売ってる思考してないかー？」

「ハッ!?!い、いえ決してそんなつ！先輩はスレンダーでカッコイイと思いますわ！」

「おーし喧嘩売ってんな？取り敢えず——モグゾ」

数分ほど騒ぎながらピット内を逃げ回るが、

「獲った!」

「ひんっ!」

身体能力の差から揉み拉かれた。

5分は揉まれ、満足したサラ先輩から解放された。

「うう、お嫁にいきませんわ……」

「女同士なんだからノーカンノーカン。話しは戻るけど、今回の負けでオルコット家が
どうこうなる確率は低いと思うよ?」

「——は?」

自分でも驚くくらい、間拔けな声が出たと思った。

「ど、どうしてそう思うんですか?!」

自分の疑問に、サラ先輩は小型パッドを取り出し、動画を見せてくれた。

『控えー!控えー!』『この紋所が目に入らぬかあ!!』

「おっと間違えた!」

慌てて引き戻し、再び此方に差し出して来た。今度は何だろうと思って画面を覗き、
……今日の戦闘記録……?

先程の織斑一夏との戦闘記録。その最後辺りの攻防だった。

「——分かる? 限定的とはいえ、高機動時におけるB T兵器の同時使用してたんだよ

？」

「あー！」

言われ、改めて思い出した。

確かにあの時、私はブルー・テイアーズをスターライトMk-IIに見立て、動きながら迎撃していた。確かにBT一基だけとはいえ、同時操作していたと言える。

「それに加え、この二戦でセシリアの実力が上がったんだ。彼等と同じクラスなら、これから先も一緒に訓練を行う機会は一杯あるさ。まあセシリアにとって、今日の試合は得るモノがあっただろ？ 腕もそうだし、——なによりも精神的に」

心当たりあるだろう、と言われ、確かに思う所があった。

入学早々に黒星は確かに痛い。だがソレを差し引いても、自分にとっては得るモノが大きい試合だった。

……亮斗さん。

ヘラヘラした顔をする軟弱な男。最初はそう思っていた。だがしかし、いざ戦いとなれば彼は荒削りながらも堂々と戦い、そして、真っ直ぐに自分に向き合ってくれた。

……織斑、一夏さん。

初日に顔を合わせた時から、笑みを絶やしてない男。だがその仮面の下には、灼熱のような荒々しい魂を持った男。一挙手一投足、一太刀ごとに洗練されていく動き。

二人の戦いの中で見せた動き、荒々しい気迫、此方の挙動一つ見逃さない視線、思い返すだけ顔が熱くなる。

「おやおやあく？ オルコツト家のセシリアさんは、何故顔が紅くなってるんでしょうか
〜？」

やっぱり目の前の人は喰いついてきた。

「い、良いでしょうッ!? 個人の自由ですよ!」

「そりゃあ、まあね。……で？ どっちに惚れたの？」

「お二人と付き合えたら毎日楽しいですわよねえ……」

「え？」

「はい？」



—— 観客席・片隅

更識簪は、同居人に恐ろしさを感じていた。

勝った事に対しては喜ばしくはある——が、試合の経過を見ると、そんな事は吹き飛ばすほど衝撃的だ。

まず単一仕様能力の存在。一次形態での発現は、現在まで前例が無い。織斑君が見せてくれた資料に『零落白夜』の事には触れて無かったから、本当に一次形態での発現か、もしくは篠ノ之博士が「何か」したか、だ。

……後者だとすれば、雪片式が怪しい。

だつてそうでなければ、かの篠ノ之博士が形状を似せた物に「雪片」の名を付ける筈が無い。

……でも、あの操縦技術は異常……！

だが、もし隣に座る人がソレを可能とさせたのなら、

……私、やっぱり出来損ない。

「何か勘違いしてるみたいだけど、私が彼に教えたのは、ISの基本的な動かし方と、初歩の機動パターンだけよ？」

「え？……あつ」

考え事に没頭しすぎて、初めは何を言ってるのか分からなかったが、すぐに自分の考えている事がバレているのだと理解し体を縮こませる。

だが改めて考えれば、

……確かに。

彼が行ったのはマニュアル操作での機動、実弾系兵器の回避、瞬時加速。確かに初歩

の技術。後は彼自身の身体能力と剣の腕前、そして私が協力した射線予想プログラム。けど、と内心で続いた思考は、

「近接型と遠距離型の戦闘は、歯車の噛み合い、です」

「敬語は付けなくても良いわ」
断る。

「最初、有利だったオルコットさんですけど、噛み合い一つで、織斑君にも勝機があると思ひ、ます」

例えるならシーソー。公園にある、梃子の原理を用いたあの遊具。

実力が拮抗していれば勝負は千日手。だが、少しでもどちらかに傾けば、すぐに勝負は決まる。ソレが射撃型と近接型に特化した者達の戦い。

今回の試合は、最初こそオルコットさん側に『勝利』が傾いていたと思われていたが、実の所、最初は拮抗状態。勝敗が傾いた切欠は、織斑君が『零落白夜』を発現し始めてからだ。

……アレで、織斑君の思考が一度リセットされたから。

「そうね。それに、セシリア・オルコットは思考錯誤の段階であるBT兵器を使用していた。彼女が純粹にスナイパーオンリーで戦っていたら、——まあ、8割って所ね」

当然、セシリア・オルコットさんの勝率が8だ。

けど、と内心で思った事を、隣の存在が口に出した。

「それでも異常でしょ？」

「っ……」

隣にいる人物と同じ考えらしかった。

「基礎中の基礎。たったそれだけを叩き込んだだけなのに、もう代表候補の一角と戦い、勝利をもぎ取れる段階にまで届いたわ」

それも、ISを動かして間もない期間で。確かに、傍から見れば異常に映るだろう。

だが、と更識簪は最初とは違う意を唱える。ISは空も飛べるし、音速を叩きだす移動速度を誇るし、量子化して多種多様の武装の携帯を可能とする——が、忘れてはいけないのは、ISはパワードスーツでもあるのだ。

……あの戦闘能力は、まず間違いなく織斑君自身の力……ッ！

入学してから彼は毎朝ランニングに行くし、剣の型の反復もしていた。隣に居る人の厳しい訓練も行っていた。夜もギリギリまでプログラミングをして、あのシステムを構築した。

……織斑君は、努力してるっ……！

ソレを、隣に居る人も知っている筈なのだ。

なのに、

「天才ね」

隣の存在は、その一言で彼の努力を無いモノとした。

「ちが、う……ッ！」

立ち上がり、隣の存在に、——自らの姉の正面に立った。

何年か振りに姉の顔を正面から見ると、外ハネした水色のショートヘア、似通った顔立ち、そして自分とは正反対の、真っ直ぐで強い光を宿した朱色の瞳、大きく実った胸部。

……ま、負けないっ！

「織斑君は、天才なんかじゃ無いつ。プログラミングは、寝る時間を削ってまで、長年に渡って組み上げた幾つかのアルゴリズムを組み合わせて、何度も悩んで、思考錯誤を重ねていたのを知っている！彼の手に出来たタコは、ずっと剣を振り続けて出来たモノだって、私は知っている。料理だって、上達するには長年の積み重ねが必要だ。全部、織斑君が血の滲む努力をして身につけたんだよっ！——おねっ、お姉ちゃん、知ってるよねッ！」

「ええ知ってるわ」

「え——」

「貴女と同じよね」

お姉ちゃんは、笑っていた。

「ふふ、結構久しぶりね。簪ちゃんがそんな風にハッキリと物事を言うのって。——それが異性の男の子ってのはー、お姉ちゃん的に納得いかないけど、いかないけど……ッ！」

まあ、と言葉を繋げ、

「彼をダシにしちゃったけど、簪ちゃんの本音——ああ、本音ちゃんの方じゃないわよ？本心の方、ソレを聞けて良かったわ」

お姉ちゃんは立ち上がり、私の頭に手を置く。

「それで良いのよ」

「………良い？」

「良いの。簪ちゃんが私の真似をして、ISを一人で組み上げようとしているのは知ってるわ。——でもね？もし心のどこかに認められたい、見返したい、追い越したいって想いがあるなら、真似だけじゃダメ」

頭から手が離れ、今度は両手で頬を抑えられ、強制的に真正面に向き合わされ、

「追い越す気で来なさい。貴女自身のやり方と“力”で」

「………ん。絶対」

「ええ、待っててあげるわ」

かなり上から目線の発言だが、これこそIS学園生徒会長だろう。

「さて、やることやったし、私はもう行くわ」

「……二人のは、見て行かないの……？」

「ISの情報は知ってるし、二人の戦いはもう見たわ。それに、IS学園の生徒会長はやるべき仕事が多いの」

背を向け、出入り口に向かって歩き出すお姉ちゃ——生徒会長。確かに私達一般生徒とは違って、生徒会の仕事は大変だろう。今年は二人の男子生徒が居るし。

……その割に、本音は結構暇そうにしてた……。

多分、戦力外認識。何故生徒会に入ってるのだろう。

それはともかくとして、最後に何か言おうとしたが、さっきまでとは打って変わって、何を言えばいいのか分からない。

「えっと、その、——お仕事、頑張って、下さい……」

「ふふ、有難う。貴方も頑張んなさい。——ああ、簪ちゃん。一夏君に伝えといて、『しばらく訓練は中止、怪我が治るのを優先ダゾ☆』って」

そう言い残し、会長さんは歩き出す。

その後ろ姿を、見えなくなるまで見送る。

……だ、だぞ……？

取り敢えずその件は置いて、織斑君の試合を見守ろうと思ひ椅子に座り直す。

「……………だ、だぞ☆、——無理……………ッ！」

顔から火が噴きそうだった。



試合会場から出てしばらく歩き、辺りを見回し、誰も居ない事を確認。人気0なのを確信し、手を鼻に近づける。

「簪ちゃんの匂い」

ああ、たぶん私、いま他人に見せられない顔してる……………！ と自覚しつつも手の残り香と感触、脳裏に刻み込んだ彼女の声を反芻する。

一夏君の言っていた通り、簪ちゃんは私を真似ようとしていた——それは正直嬉しい。

真似ると言う事は、彼女の中の『私』は “そう在りたい” “そう成りたい” と言える存在だと言う事だ。

でも、

……………私が歩いて来た道は孤独よ。

才があつた為に、更識の次期当主として育てられた。それが苦痛とは思わない。

……私自身、そうなるのが当然って感覚だったしね。

そして、周りにいた子達は全て更識の系列の者。付き合いがあるのもすべて『更識』。故に、周りが友人だと思つてる子達は全て部下だった。

もちろん普通の子とも知り合いになるが、何でも話し合える仲などただ一人も居ない。

そんな中、唯一とも言つていい存在が更識簪だ。

「知り過ぎた更識」とは対照的な「何も知らない更識」

純粹に姉として慕ってくれたのが嬉しかった。無邪気に笑い掛けてくれるのが、どんなに癒されたか。私の身を、「楯無」としてではなく「刀奈」として心配してくれた事に、どんなに救われたか。自分が段飛ばしで得てきたモノを、努力して乗り越えて来る姿がどんなに羨ましかったか。

そして、

「簪ちゃんは、私に無いモノをもう得てるのよ……?」

友人と言う、他人同士が仲良くなった時に得られ、「普通の人」が持てる縁。

此処最近、簪ちゃんのクラスメイト達が良く話しかけているのを知っている。織斑君情報欲しさに近づいて来ている娘も居るが、彼女の趣味を知り仲良くなろうとしている

娘も居る。純粹に仲良くなるうとして居る娘も居る。——そして、そんな娘達に心を開こうとしている事も知っている。

「全く。お姉ちゃん、一夏君に嫉妬しちゃうわ」

切欠は織斑一夏と同室になってからだ。

おまけに、入学前の食事の不摂取や睡眠不足からくる髪や肌の荒れがあつたのだが、先程触れた簪ちゃんの肌は綺麗になつており、目元に隈も無かつた。

彼が食事の管理や精神のケアもしていたのだろう。恐らく、日常的にさりげなく。

……餌付けてやっばり基本なのね。

私がしたいくらいだ。

でも、しばらくはその役目を一夏君に預けてあげる。その変わりに私には私の、簪ちゃんとの唯一無二の繋がりが出来た。

その事を思い出し、笑いが込み上げてくる。

「会長？」

「あら？虚ちゃん」

通路の対面から、虚ちゃんがやって来た。

「本音ちゃんの方に行つたんじゃないの？」

「もう終わりました。お嬢様と妹様と違って擦れ違つてませんから」

グサリと打鉄用近接ブレードが胸に刺さった気分になった。

「それで、どうしたのですか？そんな怪しい笑い声をお出しになられて」

「虚ちゃんの棘のあるツツコミを久しぶりに聞いた気がするわ。——ねえ、虚ちゃん。簪ちゃんがね、私を追って、倒す為に頑張ってくれるって」

「次期生徒会長の座は心配なさそうですね」

「あ、あら？何かあつさりしてないかしら？もっと、こう、私が負ける事に何かないの？」

「仕事が溜まってますよ、会長」

「あれえ?!なし?!と言うか、虚ちゃんが全部処理してくれたんじゃないの?!」

「此方で処理できるモノはしておきました。ですが、会長直々の判断が必要なモノは分けてあります。……枚数にして段ボール2箱分はあるかと」

「多い……!」

確かに5日間放心状態、一夏君の扱きで2日の計7日、つまり一週間は仕事が手付かずだったとは言え、まさかそんなに溜まるとは思ってもいなかった。

……けど大丈夫!私には簪ちゃんの匂いと声と感触があるから!

それに、先程簪ちゃんの周りに散布したナノマシンが、簪ちゃんの画像と声を私に届けてくれている。

……そう、今も『試合を待ち遠しそうにしている簪ちゃん』の様子を送って——、

『……………だ、だぞ☆、——無理…………ツ!』

「っ!」

「会長?!行き成り鼻から血が出てツ!しっかりして下さい!?!会ちよツ、お嬢様ああああ
!!」

一夏 v s 亮斗

カタパルトに足を固定。

「弟君」

傍らに居た坂地さんが声を掛けてくる。

「取り敢えずの応急処置として打鉄の腕を取り付けたんだが、動きに問題は無いかい？」
手を開閉し、調子確かめる。

「ありません。感謝します、坂地さん」

少しきこちないが、パーツの問題では無く、本体である俺の左腕だろう。血は止まり傷もある程度は塞いだが、激しい動きをすればすぐにまた開く、と診断されている。

……裂けるかもなあ。

更識さんとの約束は少しでもだけお預けだ。こんな手で料理なんざ衛生上悪いし、食材に
対して申し訳が立たない。

「それで、勝機はあるのかい？」

「負けに行くつもりはありません」

「うん、良い返事だ。——キミとはまた話しをしたいね。設計力はまだまだまだだ
けど」

まだ、言い過ぎです。

「キミが考えるアイディアは結構面白い。……タバネが興味を持つ訳だ」

「その所為で今、こんな苦勞してますがね」

「良い事じゃないか！未知の体験は心が躍るよ?!」

否定できないから困る。

『無駄口はそれまでだ。準備は良いか？一夏。あと坂地、お前はさっさとこっちに来い。

邪魔だ』

スピーカーから姉さんの催促が来た。

「相変わらず厳しいねえ、……それがまた良いんだが」

今なんつった？この人。

「時間の様だね。健闘を祈るよ」

「……ええ」

坂地さんが退出するのを見届け、俺もピットから飛び立つ。

対面側のピットを見ると、亮斗も飛び立つ所だった。初戦と同じ場所まで移動し、静
止。初めに口を開いたのは亮斗からだった。

「よう。ボロボロじゃねーか」

「どっかの誰かさんの所為でオルコットがマジでな」

そう言いつつ亮斗の纏う黒式を観察。

……全体的な感じは白式と似ているな。非固定浮遊武装は背中に、腰の両側面にあるアーマー、先っぽが尖ってるから、もしかしてスラッシュハーケンか？

俺が描いた穴だらけの設計図の中の内の一つ。ソードブレイカーの様な二又の鋸に有線式の武装だ。もし束さんが俺の描いた設計図の幾つかを採用して造ったのだとしたら、

……やっぱりか。

注意深く《黒式》を見ると、左右のアームの肘側が少し盛り上がっていた。恐らくは右に折り畳み式の『短剣』、左には伸縮式の『短槍』が収容されている筈だ。

……取り敢えずざっと見た感じ、

「お前、モルモット扱いだぞ？」

「やっぱ、そー思うか」

白式が『完成された機体』に対し、黒式は『取り敢えずオモシロソーだし積んでみた☆どお?! いっくん?!』と言った感じ。要は実験機。遊び半分で組んだ機体と言っても可。

「良かったな。東さん、お前の事はモルモット程度には認識してるらしいぜ」
なんとも言えない顔をされた。

『おいバカ二人。準備は良いな?』

「バカは酷い」

と言うか、教師としてその言葉遣いは良いんだろーか?

『良いようだ。 ——では3回戦目、試合開始!!』

合図が為された。

意識を日常から、戦闘へと切り替える。そして俺達が初めにした事は、

「はーやっぱりバカだな、一夏」

「お前ほどじゃない、バカ亮斗」

一足の距離まで近づき、お互いの武器を具現。正眼に構えて、武器を交叉。

剣道における試合開始の構えだ。

「ソレが雪片式か、 ——良い得物だな」

「俺が持つにはちよつと重いけどな。 ——それに、 “識つて” るんだろ? この武器の機

能」

「まあな。それはお前だつてそうだろ? 俺のルガーランスⅢ。名前と云い、こんな思い付くのはお前ぐらいなもんだ。 ……東さんにデータ渡したのか?」

「パクられたたつてのが正解だな」

「あつそ。……いい加減始めるか」

接触は一瞬。剣と槍の腹が接触し、

「オオオオツツ!!」

「ハアアアアツ!!」

一閃。お互いに放つたのは袈裟懸け。それが両者の間でぶつかり、火花が散る。

「……っ!」

剣を戻す。

「シッ——!」

二手目は亮斗の方が速かった。俺から見て、左からの胴薙ぎ。それを後ろに下がる事で避ける。



……強い。

それが亮斗の、一夏に対する評価だ。今も踏み込んで放った胴薙ぎだが、アイツのエネルギーシールドを削れた手応えがしなかった。

ISを扱う上で重要な事は、”どれだけISの事を理解しているか”だ。つまりISを乗りこなすには、搭乗時間の多さでは無く、ISそのものに対する知識、つまりハード面だけでなくソフト面の知識も必要になってくる。

その点、一夏が持つ知識は馬鹿にならない。

武装や機体情報に関しては公開されている範囲でしか知らないと思うが、全てのIS共通点であるPICやシールドエネルギー、ハイパーセンサー、コアネットワーク、絶対防衛の発動条件などと言った基礎中の基礎の知識。そして、それ等を動かしていく為のプログラミング技能に関しては、専門職の人間と話しが出来るレベルだ。つまり、

……野郎、シールドの範囲を絞りやがった……！

シールドの展開範囲を体や機体ギリギリまで縮める事で、シールドエネルギーを削られる回数を減らしたのだ。

けれど弱点もある。

シールドの展開を判断するのはIS側にあるので、人体に近ければ近い程、その分シールドの展開が急ぎの展開になる。ついでに言えば、此方の攻撃が強ければ絶対防衛が発動する。

要は高火力の攻撃を当てるか、手数で押しきるかかってとこだな。

……そういう戦い方は、黒式の得意とする戦術だ。

◆
薙ぎの一閃を避け後ろに下がる最中、亮斗が手にしていたランスを量子変換し、拡張領域へ戻したのを一夏は目にする。

……手数で攻める気か。

《白式》には出来ない戦術。ちよつとムカつく、自慢かコラ。

そう思っている間に《黒式》の左右のアームの外側が開き、右手に直剣、左に短槍を握る。そして、

「行くぜー！」

声と同時に加速。フェンシングの様に右の直剣を突き出して来る。

その刺突を後ろに下がりつつ、縦に構えた雪片でしのぎ——視界に鉄の鍔が視界に映る。

体ごと右に捻る。先程まで左目のあった場所を短槍が突きぬけた。

「避けやがった?!」

「避けるわー!!」

引き戻そうとする槍の柄に向かって、下段からの振り上げの一閃を放ち、

……零落白夜！



一瞬の交叉。

その一瞬で、短槍が柄から二つに断ち切られた結果だけが残った。

……展開が早え!!

『零落白夜』。作中で“織斑一夏”が駆る白式の、代名詞とも言える圧倒的攻撃力を誇る単一仕様能力。何物をも斬り裂く無双の一刀。ソレが今、目の前にあり、すぐに元の鋼のブレードに戻った。

覚えている“知識”では、発動したら単一仕様能力を切るまで発動し続ける能力だったので、多分自動で能力を強制停止するプログラムでも組んだのだろう。

……坂地さんも白式の応急措置をしたみたいだな。

まあそれはともかく、初めて見た零落白夜の感想と言うと、『美しい』の一言だ。

雪の様に白く、存在する事で、身を切る事さえ厭わない研ぎ澄まされた抜き身の刀。まさしく織斑千冬を現している。

その鍛えられた一刀が、最愛の弟である一夏と共に在る。

……羨ましいなチクシヨウ!

俺は前世も含めひとりっ子だ。兄弟・姉妹が居る感覚が分からないので、ソレを持っている一夏が羨ましい。ソレが例え、家事が駄目で身内には厳しい性格だろうと、綺麗なお姉さんとくれば尚更だ。

そんな想いを込め、隙を狙った一撃は見事に防がれた。

……相変わらずバカげたスペックだな、オイ。

本当に目立つのが面倒なら、その高スペックなステータスを隠せと言いたい。家事も出来て、頭の出来も良くて、容姿も整ってて、運動神経も良いから女子にかなりモテるのに、鈍感でも無いのに原作みたくとことんフラグを折っていくとかマジふざけてんのか!?

……ああ、思い出したらマジムカついてきたっ!!



「ハ! 当たれば一撃必殺?! ガード不可?! 要は当たらなきゃ良いんだろツ!!?」
 「隠し武器満載?! 手数で勝負!?! 全部叩き潰せば良いじゃねえかツ!!」

亮斗が断ち切られた柄を捨て、短剣を両手で持ち、脇構えで接近。

傷口が開いた左手を柄に添え剣を縦、八相の構えで一夏が迎え撃つ。

「テメエ！斬るぞ!!」

同時に言い、

「ハーケン!!」

牽制で亮斗が左のハーケンなアンカーを射出。レーザー有線式のソードブレイカーが一夏の胸部に向かって突き進む。

ソレに対し、一夏は構えを変える。右横に縦構えの雪片の刃先を、正面の左向きの水平持ちに変更。そしてタイミングを見計らい、

「ッ——!」

身体を左に移動させながら、柄尻で打撃。ソードブレイカーが一夏の右後ろへと飛んでいく。

対して、一夏は攻撃に移す。方法は刺突。狙いは一番早く届く顔面。

「クッ……!」

それを亮斗は右にズレ、さらに自身を縦軸にしてロール。短剣が一夏の左側をかすめる軌道をなぞる。

亮斗の狙いを察した一夏は、左腕を柄から離し、振り払いつつも自身の位置を微修正。左の非固定浮遊武装を、亮斗にぶち当てる軌道を取る。

そして、

「ぐ……ッ」

「ッ、!!!」

激突。

亮斗は一夏の非固定浮遊武装に叩かれ、短剣は剣腹を叩かれたのか、半ばからたたき折られていた。

対する一夏は、折る為に強く叩いた衝撃で更に左腕が激痛に襲われ、思考がリセット。両者とも行動が止まるが、ISは止まらない。数コンマの間で既に2メートル程の距離が空く。

「ま、まだまだあ!!」

逸早く体勢を立て直したのは、亮斗だ。

身体を動かし一夏の方を向き直り、折れた短剣を投擲。

「——っ、あ、ああつ、まだだッ!!」

そこで一夏が復帰。

だが構わず左の腰部を外し手に持ち、右手にルガーランスを抜き一夏に向け、

「一夏アアアア!!!」

フルブースト。

その間、一夏はハイパーセンサーで捉えていた短剣をPIC操作で機体を動かし回避する。

「亮斗オオオオ!!!」

後ろに下がりがつつPIC操作で停止。忒の太刀に構え、前に向かって加速。

お互いの得物が型を変える。ルガーランスは剣先から二つに割れ、プラズマが発生。

雪片は刀身が消え、鏢が上下に開放。

「——勝負ツ!!」

一夏が動きを止める。

ルガーランスからレーザー砲が放たれ、零落白夜の光刃がそれを打ち消しながら一夏が再加速。

お互いのシールドエネルギーがガリガリと削られていき、

「あ、やべ」

零落白夜の発動設定時間が過ぎ、光刃が消失。レーザー砲が一夏を呑みこんだ。



亮斗は止まらない。

事、戦いにおいては冴える感が「敵」が居ると訴え、高まった集中力が思考を加速させ、ただ敵を打倒する為に身体が動く。

撃ち終わりと同時、腕を引く動きながら開いた砲塔を――、

……いや、このままだ。

――閉じず。そのまま二の太刀へと構える。

……来る……！

「――オオオオオオ!!」

その通りに光を突きぬけ、一夏が呐喊して来る。すぐさま白式の状態を確認。

雪片は融解して使い物にならない。右のアームと両脚、非固定浮遊武装の装甲はポロボロ。一夏本人も額から血が流れている。結論として、

……よくもまあ、動いてられる……っ！

パイロット、IS共に限界に近いだろう。だがそれでも戦いを止めないのは、諦めが悪いのか、アイツの自壊願望か、それとも新しく「芯」を得たか。

だがそれでも、

……向かって来るなら倒す。

篠ノ之流。子供の頃からずっと続けてきた剣。

初める切欠は、強くなる為と、篠ノ之箒ヒロインに近づくためだった。けど、続けていく内に

篠ノ之箒との繋がりとなった。ISが生まれ、篠ノ之家と別れた後は、彼等と唯一繋がっているモノだった。

そして、10年。研磨し続けた技は、黒式と言う剣を得、業へと至る入り口に辿りついた。

……だからよ一夏、

「男の一途を舐めんナツ!!!」

身体を下へ。ルガーランスが拳の下を滑り通り、剣腹でかち上げる。上げた腕をそのまま振り回し、狙いは一夏の胴へ。

対する一夏も動く。避けられたと察するや否や、膝を動かすのを捉える。

その事に、やっぱりな、と内心で呟く。

あの時もそうだった。コイツのコレは、負けず嫌いなのではない。ただ単に「身体が動くから」という理由で動いている。だが、そんな死に体の動き、

……見えてんだよ

だからと言って、油断も慢心もしない。動けるから戦うのなら、動けなくさせるまでだ。

《黒式》が俺の思考を読み取り、ルガーランスに命令を送る。そして、開いたままの砲塔にプラズマが発生、

……やっぱり束さん、考え方がオカシイぜ!!

「シークレットモード」

その砲塔を閉じる。

プラズマが内部で膨れ上がり、刀身から光が溢れる。その光がルガーランスの周りを覆う様に形成。

待機中に思考を巡らせ、坂地さんにも考えを聞いて“一度だけ”ならと言われたオリジナルの技。

……その名も、

「月光!!」

プラズマで形成された光刃が白式の脚部を焼き斬り、そのまま振り抜く。剣の軌跡をなぞるように、その直線状にエネルギー波が放たれた。

黒式がルガーランスの状態を察し、再び砲塔が開口し、余剰熱を放出。

『勝者!・木場亮斗!』

彼女が選んだ道

「っ……っ！」

会場中から歓声が湧き、その音がやけに頭に響く。

試合中、何度も集中高まった時があったから、その疲労だろう。あとちよつと気持ち悪い。三次元機動し過ぎた。

何度か頭を振っていると、墜落してく一夏を見つける。

……ああ、そう言えばP I C詰まってる脚部斬ったんだっけ。

痛む頭を堪えて反転、加速。墜落していく白式の脚部を掴む。一夏が逆さ吊りになつてるが無視。だって勝者だし。

「俺の勝ちな」

「チツ、お前、ホントに初心者かよ？」

「鏡見て言え」

普通、I S動かして数時間の奴は代表候補生に勝てねえつての。この逸般人め。

そんな感情を込めた目で見ていたら、一夏が腹筋だけで90度程身体を曲げ、俺を見る。

「なんだよ、〃この逸般人め〃」って言ってる様な目は？」

エスパークコイツ。

「一夏こそ、今の状況分かってんのか？落とすぞ？」

「頼んでねえし、落としても救命領域対応モードになるだけだ」

「人目がある場所で出来るか？」

人目が無いなら良い、と言う問いは無い。だってやる時はやるのが俺達流。

お互いが悪態を吐きつつも、俺が発進したピットへ戻る——その寸前、俺から話しを振る。

「で、一夏、これからする事は分かってるか？」

「なんだ、お前も同じ考えか」

「付き合えば長いからな。平常時なら大体予想が付く」

「いやな付き合いだ」

「乗らないのか？」

「面倒事は極力放り投げる主義だ」

ニヤリ、とお互いの頬がっり上がる。

ピットに入り、一夏を放す。白式ごと床に転がり、その後ISを解除して——そのまま動かなくなる。

それを見つつ、俺も黒式を解除。気が抜けた瞬間、平衡感覚を失い、
「男は、倒れる時だつて前のめり……っ」

宣言通り前のめりに倒れる。右腕だけ前に伸ばすのがポイントだ。

「オイ、アホな事やってないで、とつと千鶴さん呼んでこいよ」

「お前が行けよ敗者」

「はあ？こつちは怪我人だぞ？お前こそ、なんで倒れてんだよ。無傷だろ？」

「うっせ、頭に響く」

「聞いてんですかー！りょーうーとーくーんー！」

「こ、この野郎……っ」

罵り合つてると、ピットのドアが開く。

「りよ、亮斗!!一があッ!」

「私の黒式と白式イイイイイ!!」

最初に箒が顔を見せ、続いて箒を押し退けるようにして奇人が突入して来た。一気にテンションが下がり、疲労がどつと押し寄せてきた。

当の坂地さんと言うと、疲れきっている俺達の様子などお構いなしに近づき、あつという間に待機状態のISを剥がし、手持ちのPCに繋げ空間投影モニターを表示。食い入る様に調べ始めた。

入ってから僅か1分の出来事である。

そして、開いたままのドアから白衣の女性——千鶴先生が入って来る。

「あつ！と、遠見先生！急患つ、急患です!!」

「あらあら、だから激しい運動すれば傷口が開くって言ったのに」

言いながら一夏を診始める。

その間、俺も自分なりの応急処置として仰向けになつて目を瞑り、深呼吸繰り返す。

……ちよつとは楽になった、気がする。気がするだけだが。

「ちよつと傷口見るわよ」

「へあッ?!」

横目で見れば、千鶴さんが一夏に悲鳴を上げさせながら診断してる。

……アレよりはマシだな。

「あー、坂地さん?」

「ああ……、最高だなあこの二機!まだ穢れも知らないまっさらな装甲も良かったけど、

戦闘後のこの壊れっぷりもまたイイ!——ああ、解体したい……つ!つと、何か用かい

?亮斗君」

「……ええ、俺達の機体ってどんな感じですか?」

「そうだねえ……、黒式は武装と非固定浮遊武装の損傷を考えるとダメージレベルBつ

て所だね。白式は両腕、脚部がダメ。非固定浮遊武装も小破、主武装の雪片も破損。……うん、もしかしたらレベルDまで逝くかな？コレは」

うわあ。俺自身も幾らかその要因だけど、搭乗初日で大破判定って多分新記録なんじゃないか？つーか原作よりもかなり酷い。

……当の本人は何でか知らんが満足気だし。

「あら何ドヤつとしてるのかしら？貴方、今の自分の状態分かってるのかしら？一夏君？」

「あつ、ちよツ!?千鶴さん?!あの、かなりっていかめがつき痛いんすけどっ!」

「せ・ん・せ・い、よ。もう、ちよつと大人しくしなさい」

「こ、この痛みを我慢しろとおおおっ?!」

その態度を見た千鶴さんに腕を捻じられ、キモチワルイ喘ぎ声上げる。

「うわあ……」

箒と二人で引いた。

「坂地、その二機はどんな状態だ?」

何時の間にか、千冬さんが真耶ちゃんを連れて入って来ていた。

その問いに坂地さんは肩をすくめ、

「自己修復よりパーツを交換した方が早い。あと、ここの設備じゃ時間が掛かる。倉研

に搬送した方がもっと早い」

「時間は？」

「機体データはもう写してあるし、二機とも同系統の機体だ。打鉄の部品とも相互性があるし、細かい設定ならこっちでも出来るから……11日って所かな？」

「一週間で頼む」

「おお、チフユの無茶な頼み事も久しぶりだ。ふむ……、工場フル稼働で何とかなるか」

「なら6日で頼んだ」

「こ、この鬼要求！ 国家代表時代を思い出すじゃないか！ 楽しかったね!!」

楽しかったのか。っーか、ホントに知り合いなんっすね。

「千冬姉って、兎と弓子さん以外にも友達が居だはッ——」

「取り敢えず寝ろ一夏」

一夏が自爆。頭を一蹴され気を失った。

「もう千冬ちゃんったら。恥ずかしいからって、怪我人を苛めちゃダメよ？」

「む、すみません千鶴さん。以後は場所と相手の状態に考慮します」

「よろし。一夏君も大人しくなっただし、さっさと保健室に運びましょうか」

「うわあ……………」

「あはははっ!!」

俺と箒は再度引いて、坂地さんは指を差して笑い、千鶴さんが気絶した一夏を運んでいく。

……つておい、俺に丸投げかよ。

一夏が居なくなつた事で、これからしようとする事を俺一人でやる事になつてしまつた。

一瞬、このまま原作通りにしようかと思つたが、後々の報復が面倒なので作戦通りにやる事にする。

大分身体感覚が戻つて来たので、ゆっくりと体を起こし、立ち上がる。

「だ、大丈夫なのか? 亮斗?」

「——つ、あ、ああダイジョーブだよ!」

その際、箒が身体を支えてくれたが、右腕がそのたわわに実つたブツに挟まれ、役得だと思つて放置。

「あーつと、織斑先生に山田先生。少々相談事があるんですか」

「何でしょう? 木場君?」

「ふん、言つてみる。どうせ外道な擦り付け合いだろうがな」

何の事か想像できない真耶ちゃんと、流星に付き合いが長いだけある千冬さん。二人

の対応に苦笑しながら。内心、千冬さん厳しい、と思いつつ考えていた内容を話す。



——保健室

全身の痛みを覚え、目を開ける。

まず目に入ったのは、白い天井と視界隅に映るカーテンだった。

……コ、コレはアレのセリフを言う絶好のチャンス……ッ！

「し、「知らない天井ね」らな……んん？」

セリフを取られ、聞き覚えのある声が出た方に視線を向けると、隣のベッドに横になつてゐるエロゲ好き生徒会長が居た。その鼻に、恐らくガーゼで作られた詰め物が見えたので、何が原因で此処に居るのか察した。

……まあそれはそれとして。

言いたい事を言われ、恨みがましい視線を向け口を開く。

「何で此処に居るんですか？会長？」

「あら……？一夏君こそ、何で此処に居るのかしら？ああ、負けたのね」

ぐ、と言葉に詰まる。その仕草に、エロゲ好き会長は結果がどうなったのか納得顔を

した。

「へえー負けたんだけ。ねえ今どんな気持ち？2日間で出来る限り訓練してコンディションバッチリな状態で挑んだのに才能差で負けた気持ちは？ねえ!!」

「鼻栓してゐるくせにマジうぜえッ……!!」

「コレは簪ちゃんへの愛を洩らさない為の蓋よッ!」

「へこまねーなこの人……!」

コレ以上の門答は流石に時間の無駄だと察し、話しを変える。

「真面目な話。更識さ——妹さんとは話しが出来たんですか?」

「ええ。パソも返してもらったし、ついでに宣戦布告もされちゃったわ」

「へえ、中々に剛胆な発言じゃないですか。なんて言われたんです?」

「ああ、それは——」

言う途中で何かに気付き、すぐさまベッドから降り掛け布団を整える。そして、

「一夏君!」

「はい?」

「私は此処に居なかった、良いわね?!」

訳が分からないが、取り敢えず了承の返事を返すと、それじゃあ宜しく!と言って隠れた。

その直後、ドアがノックされた。シスコン会長の行動の意味が何となく予想出来、入室を促す。

「えっと、し、失礼しますっ」

「おりむー、だーいじょーぶー？」

予想した通り、入って来たのは更識さんとのほほんさんの妹コンビだった。

俺が寝ているベッドは入って手前のベッドなので、二人とも入室してすぐに俺を見つけ、更識さんは安堵の表情を浮かべ、のほほんさんは笑顔になって此方に来る。

……癒されるわあ。

「あの、織斑君。その傷……」

「痛そー」

「まあ、しばらくは使用不可だろうな。……その、悪い約束守れなくて。この腕じゃしばらくご飯作れないわ」

流石にこんな手で料理をする訳にはいかない。一応、左手でも箸とかは使えるので日常生活の方は問題ないが。

「き、気にしなくて……良い、よ……」

「そん、な……おりむーのごはんが食べられないなんて……かんちゃん、私、夜はどうしたらいいの……？」

……そんなに楽しみだったか。

明らかに二人のテンションが下がった。

部屋の何処からか、刺すような視線。雰囲気で分かる。〃コレ以上悲しませたらどうなるか……分かってんだろな？あ？〃”と言う圧を感じる。

「あー、取り敢えず座るか？」

「あ、うん」

勧められるまま、更識さんはベッド横に椅子を持って来て座り、のほほんさんは更識さんの後ろから抱きついた。物凄く自然な流れだった。

「もう、本音」

「えへへ、かんちゃんいーにおーい」

しかもよくある行動の様で、更識さん自身も振り解こうともせず、のほほんさんのなすがままにしている。

……凄く……眼福です。

「そ、そう言えば、……お姉さんとは話せたのか？」

さつきダメ会長に自慢げに話されたが、今は〃更識楯無は保健室には居なかった〃という設定なのだ。

……だからうん、のほほんさん？さつきから部屋の隅っこ見ても誰も居ない事になっ

てるからな……?」

なんか、のほほんさんの凄い一面を見た気がする。

「うん。あのね、私、——お姉ちゃんに宣戦布告して来ちゃった」

可愛らしく宣言されても、言われた内容は改めて考えると凄い発言である。

……あんなのでも、実力で言えば世界トップレベルの実力者なんだよなあ。

後、のほほんさん? 更識さんの後ろに居るから気付かれてないけど、デスクの後ろには誰も居ない事になってるからな?

「そ、それでねっ、織斑君っ」

「ん?」

焦点を後ろに居るのほほんさんから、手前の更識さんに移す。

その更識さんは、顔を紅くしながら視線を合わせ、一度視線を外し深呼吸。再び視線を合わせ、大きく息を吐き。

「付き合って!」

「おおく、かんちゃんだいたーん!」

「——あ、ちがつ、えっと、その! あれっ! 式型の完成を手伝って言うつもりだったのッ!」

「ああうん、話しの流れから予想は出来たから大丈夫だ」

意外なのは、更識さんから言い出した事だ。

……正直言って、根詰まっても誰にも頼らない気がしてたんだが。

流星にそのレベルまで行ったら俺もさり気無く手伝うつもりだった。一体どんな話をしたんだか……。

「俺の知識で良ければ貸すけど、クラスの娘達は納得するのか？それとも手伝ってもらうのか？」

コレは重要な事だ。何せ更識さんは4組のクラス代表。他所のクラスが手を出していい問題じゃない。

……そう言えば、クラス代表の件はどうなった？亮斗の奴、目的通りに交渉出来たんだよな……？

「勿論、クラスの娘達にも手伝って貰えるかお願いしてみる。それも含めて、織斑君にもお願いしたいの」

「もつちろん私は協力する。だって、かんちゃんのお願いだもん」
視線を此方に向けたのほほんさんが、先ほどよりも笑顔増して言う。

……さつきから視線が感じられないんだが、シスコン駄会長生きてんのか……？
まあ生きているんだろう。

「一つ聞かせて貰って良いか？」

頷いたのを見て、言葉が続ける。コレが一番気になっていた事だ。

「それは、さっき聞いた宣戦布告の内容と被るのか？お姉さんと戦う日を決めたとか？」
首を横に振られた。

「違うのか。えっと、更識さんって確か、お姉さんを見返す為に一人で作り上げようとしてたんだよな？それが、何故に行き成りクラスメイトと俺に手伝いを頼みだしたんだ？」

「……最初は、そう思ってた。お姉ちゃんに認めて貰えるには、お姉ちゃんみたいに何でも出来るようにならないと、って」

不可能だ。完全無欠な人間なんて誰もなれない。姉さんや束さんだって欠点があるのだ。

……と言うか、その2人とも欠点だらけなんだが……。

そんな思考を余所に、でも、と更識さんが言葉が続ける。

「それは違うって言われたの。昔みたいなのに、まっすぐ、視線を合わせて『私を追い越す気来なさい』って、『貴女自身のやり方と“力”で来なさい』って」

普段は行動とか発言がアレだが、ちゃんと締める時はきっちりしてんだな。

「それでね、考えたの。私を持つてる私自身のやり方を」

「それが、『手伝って貰う』か」



織斑君の言葉に、首を縦に振って肯定する。戻した時に本音のむ、胸に優しく受け止められる。

……本音、何時まで抱きついてるんだろ……？

いや、振りほどかない自分も原因ではあると思う。だって、ちよつと自分には無いモノだけに、ウザいと思いつつも不思議な感触があつて楽しい。

でも今は自分の事だ。

「最初っからね、気付いてたの。IS組み立てるのに、私一人じゃ無理だって事は」
プログラミング能力では、納期ありみたいな期限付きの場合、焦つてミスるだろう。機体の製作能力は、本職からすればひよっこレベルかもしれない。

……そう言えば、さつき坂地さん居たから、ちよつとだけでも式式を見て貰った方が良かったかも。

取りあえず置いとく。

まあ何が言いたいかと言うと、それを素直に認める事が出来なかつたのだ。本当は大好きなお姉ちゃんに近づくためには、お姉ちゃんがやった事を自分も出来れば叶うんじゃないか、つと。

でも、

「お姉ちゃんは、”それ”だけが私に近づける方法じゃない、って言ってくれた」

まだ仲の良かった頃、私が駄目な事をしたら、目を合わせて叱ってくれた時の様に。

「私には、お姉ちゃんみたいに才能も技術力もコネだつてない。顔だつて、そんなに広くない」

それでも、

「私を応援してくれる一番の友だちが、どんな時も支えてくれるって言ってくれたから」
ソレを言われたのは、試合が終わり、織斑君のお見舞いに行こうとしてた時だ。

何処からともなく現れ、私の目を見たあとすぐに、

「私、かんちゃんのメイドさんだからー、かんちゃんと何処でも何時でもどんな時も一緒に居て、悩んで、支えるよー。あげちゃうよー？ ホントだよー？」

と言われたのだ。

だから、

「私の周りにいる人たちを頼ってみよう、って考えるようになったの」

コレは、ある意味”更識簪”にとつての始まりだ。本音が強めに抱きついて来る。

多分、今の私の顔は真つ赤になっているだろう。けど、後ろから物理的に支えてくれる一番の友だちが居る。

羞恥に染まった顔を異性に見せるのはかなり恥ずかしいが、私が私自身の道を進む為

に、織斑君の協力は必要だ。彼の独特な発想、プログラミング能力、新作の刀砲 Project 情報、家事スキル、それ等に加えアニメやゲーム等の話題を共有できる人である事も大きい。

……ううん、ちがう、かな……。

一緒に居ると、凄く安心する。恋ではないと思う。コレは、マンガとかに居そうな優しいお兄ちゃん”な感じだ。お父さんとも、お母さんとも、お姉ちゃんとも違う安心さ。

……あ、でもお義兄ちゃんつてのもヤダ。

その呼び方をするという事はつまり、お姉ちゃんと籍を入れてる事になる。二人が並んで居る光景を思い浮かべてみるが、「それはちよつと……」と否定と拒否の思いが来た。

どつちの何に対して、という疑問にも答えが無い。何せ、今だ目指すべき場所どころか、一步を踏み出せても居ないのだ。

逆に言えば、進んで行く事が出来れば、”どちらに対して” ”どう思った” のか分かるかもしれない。恐らく。多分。

……分からなくて良いかも。

でも取り敢えず今は彼の返事を聞く事だ。彼の返事はまあ予想出来るけど、それで

も、やっぱりちやんと答えを貰うべきだろう。

……だって、対等な関係で居たいから。

「私の進む道を、手伝って欲しいの」

言って、彼の顔を見る。

予想した通り、彼——織斑君は優しい笑みを浮かべながら、
“その一言”を口にした。

クラスの代表

——試合の翌日

「——と言う事で、一年一組のクラス代表はセシリアさんに決まりました、ハア……」
山ちゃんがそう宣言して溜息を吐き、クラスの約全員が戸惑いの声を上げ、一夏がガッツポーズを取るのを、亮斗は苦笑しながら見ていた。

だが、一番困惑しているのは当のセシリア本人だった。

「あの、質問……と言いますか、疑問があるのですが？」

「はいー？何ですかあ……？」

セシリアが手を上げ、山ちゃんが間延びした声で応じる。つーか、その態度は教師としては駄目じゃないだろうか……？

「何故私なのでしょう？確か、昨日の戦績は全員一勝一敗。こういった場合、今度はクラスでの投票ではないかと」

普通はそれが一番最初にくるのだが、ISを扱うと言う特殊な学園事情と、セシリアが千冬を精神を煽った事による、えらく個人的な理由から来るものだったりする。

「説明しようー！」

セシリアの疑問に、眼鏡を掛けた一人の生徒が答えた。白の制服を着た男子生徒。つーか一夏だ。

「あの、一夏さん……？何故メガネを掛けているのでしょうか？」

「いやな？最近になつて少し吹っ切れたんで、周りに居ない解説キャラでも目指そうかと思つて」

ちなみにあの眼鏡、昨日売店で購入するのを見た。伊達メガネらしい。

……そう言えば、一夏のルームメイトつて更識簪さんだっけ？なら仕方ないな。

アイツは『属性：妹』持ちの娘にはかなり弱い。どれくらい弱いかと言うと、友人である皆城総士みなしろ そうしと蔵前果林くらまえ かりんの妹、皆城乙姫みなしろ つばき（現在中学二年）と蔵前乙姫くらまえ おしひめ（同年）に結構な頻度で奢らされていたほどだ。いや、むしろ自分から奢つてた気がする。

……つーか、日常的に節約を心がけてたみたいだから気付かなかつたが、中学生にしてはかなり金持つてるよなアイツ。

それ以外にも、結構兄・姉持ちの娘（時々シヨタ系の少年）には懐かれていた。

まあ、それが恋愛感情じゃなく、『頼れる兄』ポジションと言う所が「原作一夏」と同じようなフラグブレイカーっぷりだが。

「——と言う訳だ」

何時の間にか一夏の説明が終わつたので話を纏めると。

一つ、俺と一夏は推薦組。対するセシリアは自分こそがクラス代表に相応しいと豪語した、言わば自薦組。

……言葉には気を付けようって事だな。

一つ、俺と一夏のISは中破と大破。対するセシリアのISはパーツを交換すれば早期復帰が可能な機体。

……こればかりは突如現れた機体と、国が関わった機体の差だ。凶面が無い。

一つ、やっぱり強い人がなつてくれた方が良いっしょ？

……学食の食券が手に入れられるチャンスが増すしな。

以上の3つ目の理由を千冬さんと山ちゃんに説明して、反対意見も出なかつたようなので押しきつた。唯一気がかりなのは、千冬さんが反論の一つも出さないで許可した事だ。

……なんかありそうだなあ……。

◆ 一夏の説明を聞き、セシリアは思案していた。

クラス代表。これになる事が出来れば、他の娘達と違い早い段階で試合に出場でき、『セシリア・オルコット』『イギリスの代表候補』『第三世代ISブルー・ティアーズ』と言った“名”を売る事が出来る。

昨夜、本国に連絡を取った所、サラ先輩の言った通り代表候補生、相続権の保障と言った案件は「一考の余地あり」と言う沙汰を貰った。

従者であるチエルシー・ブランケットにも家の事を尋ねると、「企業や政府の方々から遠まわしに仕事が減りますと言われましたが、オルコット家に関しては何も問題はありません。ええありませんでしたフフ……」との報告を貰った。最後の笑い声はなんですか。

つまりは評価が下がったが、現状に関しては変化なしだ。

……言い変えると、今後何もなければ「そう言う事も在る」と言う事ですわね。

政府の思惑は、コレを期に二人の内のどちらかと積極的に絡、——はしたないですわ！
取り敢えず親密な関係を結べ。あわよくば連れて帰って来い、と言ったところだろう。言われなくとも、お二方とは親密な関係を築かせて貰うつもりだ。

……ええ、出来れば親密！親密な関係が望ましいですわ！

取りあえず落ち着こう。

クラス代表をやる事には異存はない。寧ろ望む所だ。クラスの娘達からも、何でか知らないが受け入れられている。

ですが、

「その……私で宜しいのですか？私自身では亮斗さんか一夏さんのほうが良いのではな

いかと考えているのですが」

たった二人しかない男性のＩＳ操縦者と言うこともあるが、好きな殿方にもつと輝いて欲しいと言う願いもある。それに同じ専用機持ちと言うことで、御二人の内どちらかと二人つぎりの放課後授業の予定もあつたがパーだ。

……まあ、輝きすぎて他の女性が惚れるかもしれないかもしれませんが、お二人と結ばれるのは私です。今のところ敵は亮斗さん狙いの篠ノ之さんだけですし。

「面倒だからパス」

「あ、はい」

そう言えば、御二人ともご自身で代表になろうとした訳ではありませんでしたわねー。

「では反対意見も出ないようなので、改めまして一年一組のクラス代表はセシリア・オルコットさんと言うことで——はあああ、良かったあ。また揉め事とか起きなくて」

山田教員がなにかごによごによごと言っていたが無視。ただお疲れさまでしたとだけ心の中で労つておく。

周りからバラバラなタイミングで拍手が送られ、殿方二名がガッツポーズをし、

「よくやった亮斗!!」

「つたりめーだ!もつと褒めろ!」

……そんなに面倒でしたか。

嬉しき半面、御二人が活躍できる場と二人っきりの放課後授業は諦めるしかない。別の方策を考えなければ。

「残念だがソレはない」

織斑先生が入室早々、そんな事を言い出した。と言うかタイミング良すぎじゃありませんか……？

「千冬姉！頭がおか「それ以上言ったら縦だ」しくはないので黙りまーす」

手慣れてますわねえ。やはり織斑先生のような方でないと一夏さんはゲット出来ないと言う事ですか。見習わなければなりませんね。

「それで、先ほどの発言はどう言う事でしょうか？織斑先生」

「ああ、そうだったな」

私の問いに、織斑先生は教壇に立つ。

「まあ簡単な話なんだが、IS委員会から今回の件を報告したら、『男性操縦者二名はなるべく多くISに乗せて経過を報告するように』、との返答があった」

「えつと、つまりその……」

「ああ、ISを使用する行事にはよつぽどの理由がない限り強制参加だ。ぶつちやけ客寄せパンダとモルモットだな」

お二人をちらつと見れば、何か悟ったような表情をしていた。



……ああ、うん。何かしてくるだろうなー、とは思ってたが。IS委員会かー。

「首尾よくいかなかったな」

「流石姉さん姉さん流石、としか言いようがない」

亮斗がこつそり話しかけてきたので言い返し、俺も愚痴る。

達観している俺たちを他所に、姉さんへの質疑応答は続く。

「先生！じゃあ来月のクラス対抗戦で、二人のうちどちらかが優勝した場合の食券はどうなるんですか?！」

「優勝は優勝。同じように扱うとのことだ」

ある者はガッツポーズをし、ある者は拳をグツと握り、ある者は声に出して喜んだ。

「頑張つてね！織斑君！」

「木場君も負けちゃ嫌だよ！」

「オルコットさん！イケるイケる！」

「「欲望に忠実だな！」」

『いやあ……』

オイ、そこは照れる場面じゃないぞ。

「おりむーががんばって！」

「よおし！お兄さん頑張っちゃうよっ！」

「お前は単純だな、一夏……！」

亮斗が何か言っているが、妹成分満載ののほほんさんに応援されたとなれば、もう優勝狙いしかない。

「さて連絡事項等言い終わった。授業を開始するぞ」

『はーい！』

姉さん改め織斑先生の号令に、全員が返事を返す。

そして始まる授業、——に意識を向けながらも頭の中では別の事を考えている。それは更識さんの事。

……一カ月ちよつと、か。専用武装は無いにしても、機体にだけ集中すれば間に合うか……？

ちよつとだけ想像してみる。

鋼の鎧を身に纏い、必死に戦いながらもどこか楽しそうな笑みを零し、アリーナの上空を舞う更識さんの姿。対戦相手は「簪ちゃんにやられるのもまた至高!!」と笑顔全開

で攻撃を当たりに行ってる我らのエロゲ好きシスコン生徒会長。

……うん、まあシスコン会長の事はともかく、良い笑顔の更識さんは見たいな。
クラス対抗戦までのスケジュールは大体埋まった。

鳳来来

——四月中旬

朝、何時も通り教室に行くと、ちよつとだけ「ざわ……、ざわ……」としていた。席に着くと、待ってましたと言わんばかりに数人の女子が話しかけてくる。

「ねえねえ織斑君。二組に転校生が来たって情報知ってる？」

「は？」

間の抜けた声が出た。

……こんな中途半端な時に転校、ねえ。なんて分かりやすい。

あきらかに狙いは俺たち男性IS乗り。しかもこの学園の中途入学者の試験は、入学試験時よりも実技の難易度が上がっていると聞く。それを突破したと言う事は、実力者だと言う事を周りに宣言しているものだ。

「ああ、そう言えば会長がボヤいてたな……」

「そうなの？」

実際はボヤいてではなく、転校生が来る事によって生じる諸処の関連事情に忙殺され更識さんをこつそり眺めてる暇が無い、と言った呪詛の念だったが。

……それでもキツチリ仕事はこなしてるあたり変に優秀だからなあ……。

と言うか、こっそり眺める為の時間を作る為に自身のスペックをフルに使いすぎだ。さっさと仲直りすれば堂々とスキンシップとれるのに。

「おーつす」

「おはよう」

亮斗と箒も教室に入って来た。

「あ、亮斗君！聞いた聞いた?! 転校生来るんだって!」

そして早速自称『情報通』の本条綾ほんじょうあやさんが亮斗に話題を振りに行く。

「あ? ……あ、ああ、二組に来るんだっけ?」

……アイツの妙に歯切れの悪い返し。『転校生』は予定調和って事か。

「亮斗君も知ってたんだ……。あ、じゃあコレは知ってる!?! その転校生、中華人民共和国の代表候補生なんだって!」

「綾? ……なんで正式名称で言ったの?」

「専門は何? 総合? 射撃? 機動?」

「マジマジ。でも専門までは分からなかったわ」

「あ、あれー? 私の疑問はー?」

「その話、本当ですか?」

久しぶりに会ったからなのか、少し増量した胸部装甲にもかかわらず全く成長してない小柄な体格からは活発なオーラを出し、うなじ辺りに届くポニーテールの少女。髪型以外はめっちゃ見覚えのある顔だった。

「甘いつて、デザートなだけにか？鈴」

その一言に、少女——凰フアン 鈴音イリンは半眼のジト目を向けてきた。

「久しぶりに会ったのに、行き成り笑えないジョーク？アンタ、相変わらずねじ曲がった性格してるわね一夏」

「ツツコミ待ちかと思ひまして」

「アタシが突っ込み役よ！」

「相変わらず毒されてんなあ鈴」

「亮斗も久しぶりね。あと、この性格は付き合いが長かった所為よ」

「髪型変えたんだな」

前はツインテールだったのだが。

「解けばアンタ好みのセミロングよ？」

即座に復帰した数名がメモを取った。

……っーかなんで知ってるし……。

かなり混沌とした中で、二つの人物が此方に詰め寄って来る。

「りよ、亮斗？その……」「い、一夏さん？亮斗さん？その……」

箒とオルコットさんだ。だがしかし、残念ながら説明する時間がない。何故なら、
「そろそろ時間だ。席に着け」

時間に正確な姉さん先生が教室に入って来たからだ。それはつまり、後数秒でチャイムが鳴るのと同意。

そんな時報姉さんは、目の前に立つ鈴の存在に気付く。

「む？お前、鳳か……？もうすぐチャイムが鳴る。さつさと自分のクラスに戻れ」

「あ、はい！あつ、昼休みにね一夏！亮斗！」

……相変わらず嵐みたいな奴。

「しかし昼か」

今日は坂地さんと話し合いがあるんだがなあ。



——昼

“知識”通りに箒とセシリアが千冬さん叩かれるのを見つつ、木場亮斗はもうそんな時期だったか、と内心で思う。

……原作とはだいぶ違うからなあ。

セシリアのクラス代表決定祝いは一夏のケガが治ってすぐにやったし、この世界の
一夏はISに詳しいから地面にクレーターを作らなかったので、鈴の来るタイミングが
分からなかったのだ。

……まあ、来なかったら来なかったでそういう歴史を歩んでんだって納得するしか
ないけどな。

仲のいい友人と再会できないのは少し悲しいが、今の俺の立場で中国に居る鈴に会い
に行くのは無理な話だ。

……そもそも俺と鈴はそういった間柄じゃねーし、アイツの担当は一夏だ。

そう思いつつ授業内容をノートに書き込んでいると、授業終了のチャイムが鳴った。

「——ふむ、キリも良いので此処で終わろう。クラス委員、挨拶を」

「起立！——礼！」

『ありがとうございます！』

「ああ。次の授業も遅れるなよ？遅れたやつは放課後にアリーナの外周8周だ」

そう言つて千冬さんはささっと教材を片づけ去っていった。ちなみにアリーナの外
周は5km、つまりは罰で40km。ほぼフルマラソンの距離だ。

「さあ亮斗！朝の女との関係を話してもらおうぞ！」

「ですわね。私も気になっていましたの」

箒とセシリアが早速絡んできた。

「良いけど、取り敢えず本人もいた方が分かりやすいし食堂行こうぜ？」

「む？まあ、その方が分かりやすいか？」

「それもそうですわね」

「決まりだな。じゃあいち——あ？アイツどこ行った？」

二人が提案を受け入れてくれたので、一夏を伴って食堂へ行こうとしたが、肝心の一夏がいつの間にか席からいなくなっていた。すぐに視線を教室の入り口に目を向けると、のほほんさんに弁当を渡して出ていく寸前の一夏と目が合う。

「亮斗！今日、ちよつと倉研の人と話し合いがあるから、鈴の対応宜しく！」

それだけ言うと、あつという間に出て行った。

……アイツ、逃げたな。

仕方ないので箒とセシリアを伴って食堂へ赴く。

「あ、木場君！鈴ちゃんきたんだって？」

「ああ。今から食堂で待ち合わせだけでも来るか？」

「行く行く！」

その途中で、遠見と会ったのでついでに誘う。

「来たわね！つてあれ？亮斗だけ？」

予想通りの反応に、相変わらず素直だなーと内心で呟く。

……まあ、待ち人が来なかつたらそんな反応にもなるわな。

自分の面倒を押し付けるとか、ホンつと原作とは大違いだ。その分の報いは受けてもらうが。

「やつほー鈴ちゃん」

「あ！真矢じゃない！久しぶりー！」

中学時代少しだったが親交があつた二人が挨拶を交わす。

「二人から聞いてたけど、鈴ちゃんこっちに帰つて来たんだね」

「友人ネットワークの伝達速度も変わつてないわねえ。となると、弾達にも伝わってるっばい？」

「ぼいぼい。俺と一夏で回しといた。——それよりも鈴。券売機の前に居たら俺らが飯にありつけないんだが……」

「あ」

そこまで歴史再現しなくても良いのに。いや、食券だけでまだ昼飯を貰つてないところは違うか。

鈴が退いたので、それぞれ食券を買う。俺は箒製の弁当だが、最近はそれにプラスして吸い物系だ。今日は豚汁うどんにしよう。

早速注文し、お馴染みになりつつある窓際のテーブルに座る。

「んじやあ改めて、久しぶり鈴」

「再会の言葉と私の名前を混ぜないでよ!!」

「懐かしいだろ?」

「ええ嫌ってくらいにね」

「ねえ、それより早く食べよー」

俺らの会話をまるつきり無視して、遠見が催促してきた。そしてその通りなので、全員して飯を食べ始める。

「――で、亮斗? その、この女とはいったいどのような関係と言うか繋がりなのだ?」

そして開始早々、箸が突っ込んできた。

「どんな関係と言われると、……箸が小4年の時に引越した後、5年になってから転校してきた同級生、だな」

原作では一夏の奴がセカンド幼馴染とか訳の分からない単語を使ってたが、俺の考え方で言えば幼馴染と言えば箸と一夏だけだし。

「で、中三になる前に親の都合で中国に引越すまで俺らとつるんで、色々やかした女傑の一人でもある」

「ちよつと、変なことと言わないでよ!アレはアンタらが変なこと企てて私らに迷惑が掛

かったからでしょっ！そうよね真矢?!」

「え？私?!……いやいや私は翔子と一緒に見守ってたただけだし、笑いながら木場君たちを鎮圧してたのって凰さんと咲良じゃなかった?」

遠見の言葉に対し、鈴は少しの間 考え――、

「思い出の美化つてよくある事よね」

「それはあるかもしれないねーが、改ざんは良くねーだろ」

「うっ！わ、分かっているわよ?!それより！一夏の奴はどこ行つたのよ!」

「さてな、妹属性持ちの娘のところじゃねーの?」

「あんの野郎っ相変わらずか……ッ!」

適当に言ってみたら鈴の怒りゲージを貯めただけだった。

……普段の行動が行動だし仕方ないか。



「ッ!」

背筋に悪寒が走った。

『おや?どうしたんだい?』

ソレを、通信先の相手——坂地添さんは目敏く気づいた。

場所はI S学園内のセキュリティの高い通信室。その十の小部屋に区切られた一つ。

……でもさっきの嫌な感じ。選択ミスったか？でも坂地さんとの話し合いは前々から決まっていたことだしなあ。

ちなみに、普段は整備室で更識さんとのほほんさんと一緒に昼を取っている。

「それで、今日はいったいどんな用件で？」

『まず初めに、——ありがとう』

画面越しに頭を下げられた。

何事かと思う前に、頭を上げた坂地さんが言葉を繋ぐ。

『式式の事、感謝しているよ。彼女の件は私もどうにもできなくてね、心苦しく思ってたんだ』

……この人、行動はアレなことが多いけど良いヒトだ……！

「気にしないで下さい。俺が好きにやってる事ですから」

『——そっか。いやーやっぱりキミもそう思ってたんだね！未完成のままじゃ式式ちゃんも辛いよね!!』

「彼女ってI Sの方がよ!!」

もちろん簪君の事も気にかけてるさー、なんて結構棒読みで言ってるが。前言撤回

回。やっぱりこの人はオカシイ。

『弟君は簪君の I S が完成して嬉しい、私は式式が完成して日の目を見せる事ができるのが嬉しい。簪君は I S が完成して嬉しい。つまり win-win-win-win の関係で事で納得しようじゃないか』

間違っちゃいないけど無理やり纏めやがった。

「……良いですけど、装備に関しては？」

『専用装備に関しても開発凍結にはなっていないから、少人数ではあるけど開発を進めている。——それで本題なんだけど。白式の改修案の事だよ』

「——何か問題がありました？」

腹が減ったので、自作サンドウィッチに伸ばしかけていた手を止めた。昼メシにありつけるのは少し先になりそうだった。

『理論、技術的、ウチの予算的にも問題はないけど、ただ弟君が扱えるのか、と言うのが問題だね』

「つまり実力を示せと」

『そういう事。——できるかい？』

「やります」

いい返事だ、と坂地さんが笑う。

『そういう真つすぐな所、チフユとそっくりだよ』

「姉弟ですから」

さらに大きな声で坂地さんが笑い、

『——イチカならやりそうな気がしてくるね』

……あ、名前。

『こつちの企画も少しずつだが進めておくよ。上にバレない様こつそりとだけどね』

「感謝します——けど、大丈夫なんですか？主にスタッフの負担とか休みとか」

坂地さんフツ、と笑みを零すと。

『ISに尽くし、ISの為に倒れる。ISに人生を捧げた者にとって最高の人生だと思

わないかい？私の人生』

「自分だけに負担を強いてるのを褒めるべきか、倒れたら周りが迷惑するからと怒れば

いいのか……」

この人なら本当にサービス残業して寝ずにISイジってそうで怖い。

『そつちでも出来る部分は進めてても良いけど、その際は事前にレポートを送って欲し

い。許可を出すかは上の判断が必須なんでね』

「じゃあまずは両肩のアーマー取っていいですか？」

『はい、はい』

案を出したら即座に許可された。

そもそも何故あんな戦隊ものっぽい肩アーマーが付いてるのだろうか？オルコットさんや打鉄、さらに式型やラファールを見るに全機肩むき出しなのに。あれか、男の子だから戦隊ものに憧れてると思ったのだろうか？

『それで？他には何かあるかい』

「それじゃあ——」

その後、色々と話し合い、気づいた時には5時限目が始まるチャイムの音。

話の切り上げタイミングをミスった、と内心で後悔してもすでに遅く。昼飯を食べ損ねたのに加え授業の遅刻、初犯と言う事で放課後にグラウンド4周——一周5kmなので20km——の罰を受けることになった。



時は進み放課後。時刻は七時近く。

「だいぶ遅くなったな」

既にグラウンドには人影はなく、漸くハーフマラソン越えの距離を終わらせるところだ。

これからはなるべく無断欠席は避けよう、と内心で誓う。なんせ更識さん達と過ごす時間が減るからな。

その更識さんと言えば、特殊武装系を除く式式のプログラムが漸く完成した。あとはインストールと機体の組み立て、実際に動かし各種テストをクリアすれば完成となる――特殊武装なしだが。

「IS作るのって大変なんだな」

俺の知ってるISの製作過程は白騎士だけ。しかも東さんが担当しており、俺が参加した時にはもうパーツやら何やらが全て揃った状況。俺がやったことと言えば、デバックやデザインのみだ。

……むしろ俺必要？っていう段階だったな。

それでISの製作に携わったなんて言われても肩書負けする。

「なに辛気臭い雰囲気出してんのよ？」

「ん？よお、鈴」

昇降口の扉に寄り掛かる鈴に、手を挙げて答える。

その鈴は、ん、と軽く返事しつつこちらに近づき、手に持っていたスポーツドリンク缶とタオルを差し出ししてきた。

「お、さんきゅー」

受け取ったタオルで汗を拭き、プルタブを開け喉を潤す。キンキンに冷えたやつではなく、買ってから時間が経っているのか若干冷たさが和らいでいて飲みやすかった。

……一年経つのによく覚えてるな。

「ふう、生き返る。——さてと、改めて久しぶり鈴」

「だから再会の挨拶と私の名前を掛けないでよ」

むう、流石にもう二度ネタだったか。

「お約束だろ？」

「嫌なお約束ね！」

不機嫌に顔をそむける鈴。だがすぐに顔を赤くしてこちらに向き直った。

「一夏っ！」

「何？」

「ここ、この後アンタの部屋に遊びに行っても良い?! 良いわよね!」

「いや俺の部屋はちよつと……」

「べ、別に亮斗が一緒だって構わないわよ? 中学の時だって誰かの家に集合とか良くしてたんだし」

「いや、まあその通りなんだけど」

「なんか歯切れが悪いわね……、まさかっ」

……バレたかつ。

「一夏。まさかのまさかとは思って聞くけど、——ルームメイトは亮斗よね」
これが答えだ、と言わんばかりに顔を逸らす。

「ふ、ふふふっ」

「り、鈴、さん？」

妖しい笑い声につられ鈴を見ると、

「——一夏」

「はひっ！」

綺麗な笑顔でほほ笑む魔王様が居ました。

「案内しなさい」

「い、いやでも」

「しなさい」

「さ、sir, Yes, sir!!」

「ママよ」

確かに鈴の反応は正しい。むしろコレが普通の反応だ。現に入学初日に更識さんと初対面の時だって嚴重ロツクの上、バリケード付きの対応だったしな。

だがそれ以前に、

……さつきから鈴の態度。焦燥か？確かに異性と同室つてのは色々マズいのつてのは分かるけど、どーもそれ以外の理由がある気がする。

分からない。分からない、がどうやら国元に帰った後に色々あったみたいだな。

……まあ取り敢えず。

「鈴。部屋に案内するのは良いが、まずは着替えさせてくれ」

「四十秒で終わらせなさい」

「ついでに夕飯の買い物」

「三分待ってあげるわ」

「……バルス」

「はっ、ワロス」

……此奴っ、突っ込みの切れ味が上がってやがるツツツ!!